

福泉やぐら群 (No.447)

今泉三丁目 292 番他地点

例 言

1. 本報は「福泉やぐら群」(No.447) 内、今泉三丁目 292 番他地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間：2006年11月15日～2007年1月5日
3. 調査面積：63.9㎡
4. 調査の略称は「IF3293」とした。
5. 調査体制

担 当 者 馬淵和雄

調 査 員 松原康子・鍛冶屋勝二・鈴木弘太・沖元道(資料整理)・梶岡溪音(同前)

補 助 員 森谷十美(資料整理)

作 業 員 安達越郎・牛嶋道夫・佐野吉男・田嶋道夫(以上社団法人鎌倉シルバー人材センター)

6. 本報作成分担

遺構図整理 馬淵・沖元

遺物実測 梶岡

同墨入れ 梶岡

同観察表 森谷

原稿執筆 馬淵・沖元(担当部分末尾に記名)

編 集 沖元

凡 例

1. 方位は座標北を示す。
2. 遺構全図における小穴番号は、遺物の出土あるものや切合い関係などで本文中に記述のあるものに対してのみ付した。
3. 遺構番号は調査時点でⅠ区とⅡ区で個別に与えたものをそのまま継続したため、順列において層序と前後する場合がある。すなわち、例えば1面の遺構であってもⅡ区で検出されたものは、Ⅰ区の3面遺構よりも数字が大きい場合がありうる。

謝 辞

次の方々に感謝の意を表したい。

大橋康二(NPO法人アジア文化財協力協会理事長)・・・近世陶磁器に関するご教示

三瓶裕司(公益財団法人かながわ考古学財団)・・・石割りの工具に関するご教示

柏木善治(公益財団法人かながわ考古学財団)・・・古墳時代土師器に関するご教示

目次

本文目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	273
1. 地理的環境	
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	
第二章 調査概要	278
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査方法	
3. 調査経過	
第三章 調査結果	280
第1節 概要	
1. 層序と面の概要	
第2節 各説	
1. 1面	
2. 2面	
3. 3面	
4. 4面	
5. 5面	
6. 表採および攪乱坑からの採集品 (図14)	
第四章 変遷と年代—まとめ	298
1. 遺跡の変遷と年代	
2. まとめ	

挿図目次

図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡	274	図8 2面遺構全図, 同上包含層出土遺物 ..	286
図2 明治15年頃の調査地点一帯	276	図9 遺物集中1出土遺物	287
図3 調査区設定図	279	図10 3面遺構全図, 土層断面・遺構	288
図4 土層断面図	281	図11 3面上包含層・落込み1出土遺物	289
図5 1面遺構全図, 同遺構・同上包含層出土遺物	283	図12 4面遺構全図, 土坑2・4面出土遺物 ..	290
図6 土坑1, 同出土遺物	284	図13 5面遺構全図, 溝2出土遺物	291
図7 II区1面上・同落込み出土遺物	285	図14 表採および攪乱坑等からの採集品	292
		図15 遺構変遷図	299

表目次

表1 出土遺物観察表(1)	293	表4 遺物計量表(1)	296
表2 出土遺物観察表(2)	294	表5 遺物計量表(2)	297
表3 出土遺物観察表(3)	295		

図 版 目 次

<p>図版 1 300</p> <p>1 - 1. 調査地点遠景 (▼の下)</p> <p>1 - 2. 調査地点北側 山腹近世墓所</p> <p>1 - 3. 近世墓銘 (享保八年)</p> <p>図版 2 301</p> <p>2 - 1. I 区 1 面全景 (東から)</p> <p>2 - 2. I 区 1 面全景 (西から)</p> <p>2 - 3. II 区 1 面落込み 4 (西から)</p> <p>2 - 4. II 区 1 面全景 (南から)</p> <p>図版 3 302</p> <p>3 - 1. I 区 2 面全景 (西から)</p> <p>3 - 2. II 区 2 面全景 (東から)</p> <p>3 - 3. I 区 2 面 遺物集中 1 (南から)</p> <p>3 - 4. I 区 2 面 遺物集中 1 ・ 壺 (図 9 - 8) 出土状況 (南から)</p> <p>図版 4 303</p> <p>4 - 1. I 区 3 面全景 (南から)</p> <p>4 - 2. I 区 3 面全景 (西から)</p> <p>4 - 3. II 区 3 面全景 (南から)</p> <p>4 - 4. II 区 3 面全景 (東から)</p> <p>図版 5 304</p> <p>5 - 1. I 区 3 面 岩検出状況 (南から)</p> <p>5 - 2. I 区 3 面 岩検出状況拡大 (南西から)</p> <p>5 - 3. I 区 3 面 遺物集中土坑 (南から)</p>	<p>図版 6 305</p> <p>6 - 1. I 区 4 面全景 (南から)</p> <p>6 - 2. I 区 4 面全景 (西から)</p> <p>6 - 3. II 区 4 面全景 (南から)</p> <p>6 - 4. II 区 4 面全景 (東から)</p> <p>図版 7 306</p> <p>7 - 1. I 区 5 面全景 (西から)</p> <p>7 - 2. I 区 5 面全景 (西から)</p> <p>7 - 3. II 区 5 面全景 (南から)</p> <p>7 - 4. II 区 5 面全景 (東から)</p> <p>図版 8 307</p> <p>8 - 1. II 区最終深堀り坑 (南から)</p> <p>8 - 2. II 区東壁土層</p> <p>図版 9 308</p> <p>9 - 1. I 区東壁土層</p> <p>9 - 2. I 区東壁土層</p> <p>図版 10 309</p> <p>10 - 1. I 区西壁土層</p> <p>10 - 2. I 区西壁土層</p> <p>図版 11 310</p> <p>図版 12 311</p> <p>図版 13 312</p>
---	---

第一章 遺跡と調査地点の概観

1. 地理的環境

かつて鎌倉幕府が置かれた地「鎌倉」は、現在では市域を広げ、滑川の沖積低地である旧鎌倉を圍繞する丘陵部や、柏尾川水系の沖積低地である大船地区なども鎌倉市の行政区域内となっている。

鎌倉旧市街の北側の山稜部は、現在では宅地造成等の大規模開発により、往時の面影を残していないが、三浦丘陵から多摩丘陵へと連なる長大な丘陵部にあたり、かつては非常に懐の深い丘陵を呈していた。これらの丘陵には、境川水系最大の支流で、広大な沖積低地を抱えている柏尾川とその支流によって谷戸が開析されている。

本調査地である福泉やぐら群は、柏尾川の支流の一つである砂押川によって開析された今泉谷戸に面している。この砂押川は、調査地の東方1 kmほどの谷奥の称名寺(今泉不動) 近辺、および散在ヶ池を水源としており、そこから西流し、現在のJR大船駅近辺にて柏尾川に合流する。

本調査地は砂押川の右岸(北側)に位置する。調査区の北側は崖面となっており、かつて、急傾斜地崩壊対策事業の際にやぐらの事前調査が行なわれている。この崖面を擁する丘陵を北に越えると、柏尾川支流の^{いたち}猫川によって開析された谷戸に、源頼朝によって建立されたとされる證菩提寺と、かつての山内庄本郷が所在する。

本調査地と砂押川を挟んだ南側は、六国見山を主峰とする丘陵となっている。この丘陵の南側の小谷戸内には円覚寺・明月院・建長寺などの寺院があり、また、鎌倉旧市街の北側の丘陵へと連なっており、鎌倉を圍繞する丘陵部の一角を担っている。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

鎌倉旧市街はほぼ全域が遺跡といえる状況だが、今回の調査地点近辺は、鎌倉市内では遺跡の密集度が低いとされている地域である。

今泉谷戸内での調査事例も多くはなく、平面的な調査は、谷戸開口部に位置する岩瀬上耕地遺跡と西念寺境内遺跡のみで、他の調査事例は本調査地近辺における急傾斜地崩壊対策事業に伴うやぐらの調査となっている。

岩瀬上耕地遺跡では弥生時代～平安時代の竪穴住居址28軒のほか、古墳時代末期の横穴墓19基が検出されている(継1991・2002)。西念寺境内遺跡の調査では近世が中心だが須恵器甕が出土しており、遺構は伴わないものの古代の遺物がみられる(田代ほか1995)。また、今泉小学校の西側の斜面に七久保遺跡(No.339)、今泉七久保遺跡(No.383)があり、土師器の散布が確認されている(1999長谷川ほか)ほかに、本調査区の北側の丘陵は福泉遺跡(No.342)として遺跡指定を受けているが、鎌倉市史で前野町式土器の採集が報告されているのみ(赤星1959)で、調査事例もなく実態は全くわかっていない。

今泉谷戸内で調査事例のもっとも多いものは、本調査区周辺の斜面における急傾斜地崩壊対策事業に伴うやぐらの調査である。福泉地区のやぐら群は1990年、92年、94年、98年2回、99年の6度にわたって調査され、合計26基のやぐらが調査されている。しかし、後世の改変を受けているものが多く、遺物の出土も乏しいので築造時期など詳しいことはわかっていない(継1992、田代・小林1993、宮田・高野1995、宗臺1999、長谷川ほか1999、鈴木2000)。

このように調査事例も少ないが、今泉地区については史料的にも恵まれているとは言えない。今泉の史料上の初出は大永二年(1522)三月七日付の伊勢(北条)氏綱制札写に「相州岩瀬郷之内今泉村竹木之



図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡 (1/5000)

福泉やぐら群 (No.447) 本調査地点 今泉三丁目 293・294・292
の一部 1.今泉三丁目 267-5382(1998長谷川)長谷川他 1999「福
泉遺跡 (No.342) 所在やぐら群 かながわ考古学財団調査報告 70」
(財) かながわ考古学財団 2.今泉三丁目 282 (1999井関・鈴木) 鈴
木 2000「福泉やぐら群 かながわ考古学財団調査報告 91」(財) かな
がわ考古学財団 3.今泉三丁目 296-1 他 (1990田代) 継 1992「平
成 2 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」瑞
泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団・No.342 遺跡内やぐら発掘調査団・

極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団 4.今泉三丁目内(1993高野)
高野・宮田「平成 5 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘
調査報告書」福泉やぐら群発掘調査団
福泉遺跡 (No.342) 5.今泉三丁目内 (1991 田代) 田代他 1993「平
成 3 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」No.
342 遺跡内やぐら発掘調査団 6.今泉三丁目 296-1 (1998 田代) 田
代他 1999「中世石窟遺構の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所

事」とあり、今泉村が岩瀬郷内であったことがわかる。また、永禄二年(1559)の奥書をもつ小田原衆所領役帳に明月院の所領として「卅一貫九百七十文 東郡岩瀬之内今泉」とあり、天正十二年(1584)十一月十四日付の北条氏直判物にも「明月院寺領今泉村并總門之内田地」とあり、16世紀後半には岩瀬の今泉が明月院領であったことがわかる。この他にも、天保十二年(1841)に成立した『新編相模国風土記稿』(以降『風土記稿』)所収の毘沙門堂(白山神社)の享禄五年(1532)九月再建棟札の写に「禅興寺莊園、相州山ノ内庄今泉村」とあり、16世紀前半代に既に今泉村が明月院領であった可能性も考えられる。なお、岩瀬郷内の明月院領に関しては、永徳三年(1382)十二月十一日付の上杉憲方宛、関東公方足利氏満書状に「明月庵領相模國山内庄岩瀬郷事、任寄進状、被成安堵上者、雖無子細、就眞俗不可有相違候、謹言」とあるものが初出で、続いて至徳三年(1385)三月七日付で僧道光が「相模國山内庄岩瀬郷内田地」を明月庵に寄進した寄進状がある。これらのことから、14世紀末には岩瀬郷内に明月院領が存在していたことが窺える。

『風土記稿』によると、今泉村は家数二十、『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』には、今泉村は平民二十一戸、社二戸、寺二戸、総計二十五戸、人口は平民男八十八人、七十八人、総計百六十六人、牡馬十頭とある。

今泉不動 砂押川最上流部に所在する今泉不動は、『風土記稿』には、弘仁元年(810)空海(弘法大師)が創建した霊場とあり、弘法作の不動を本尊とある。鎌倉繁栄の頃には代々将軍が参詣したという伝承も記されている。

称名寺 今泉山一心院称名寺と号す浄土宗の寺院で、もとは芝増上寺末。空海の創建で今泉不動の別当であったという。『新編鎌倉志』には、かつては八相兼学で圓宗寺と号したとある。『風土記稿』によると無住となっていたものに、貞亨元年(1684)六月に直誉蓮入が再建し、元禄六年、増上寺の末となって、今の山・寺号をうけたとある。古代に遡る伝承を持ち合わせてはいるが、足跡が確認できるのは江戸時代以降である。

白山神社(毘沙門堂) 今泉不動に向かう途中にあり、かつては毘沙門堂と称し、今泉村の鎮守であった(『風土記稿』)。祭神は菊理姫之命くくりひめのみこと。白山神社と呼ぶようになったのは戦後のことのようにである(鎌倉市教育委員会1971)。社伝には、建久元年(1190)源頼朝の建立という。頼朝が上洛した折に、鞍馬寺の行基作の毘沙門天二体のうちの一体を請来した(『風土記稿』)、という伝承をもつ一木造兜跋毘沙門天立像一体、前立の毘沙門天立像とその両脇侍(吉祥天女、善賦師童子)の三体などがある。『風土記稿』では、この脇侍を弁天と大黒としており、興味深い。

この兜跋毘沙門天像とぼつびしゃもんてんは平安期の作とされているが、清水真澄氏は、現在、地天ではなく邪鬼の上に立っていることや、足の配置から兜跋像とするには気にかかる(清水1986)、と述べている。

平安仏の毘沙門天像が、なぜ今泉の地にあるのか、という点に関しては、史料の制約があり全くわからない状況である。こうした状況の中、橋本章彦氏の毘沙門天信仰についての研究がある(橋本2008)。

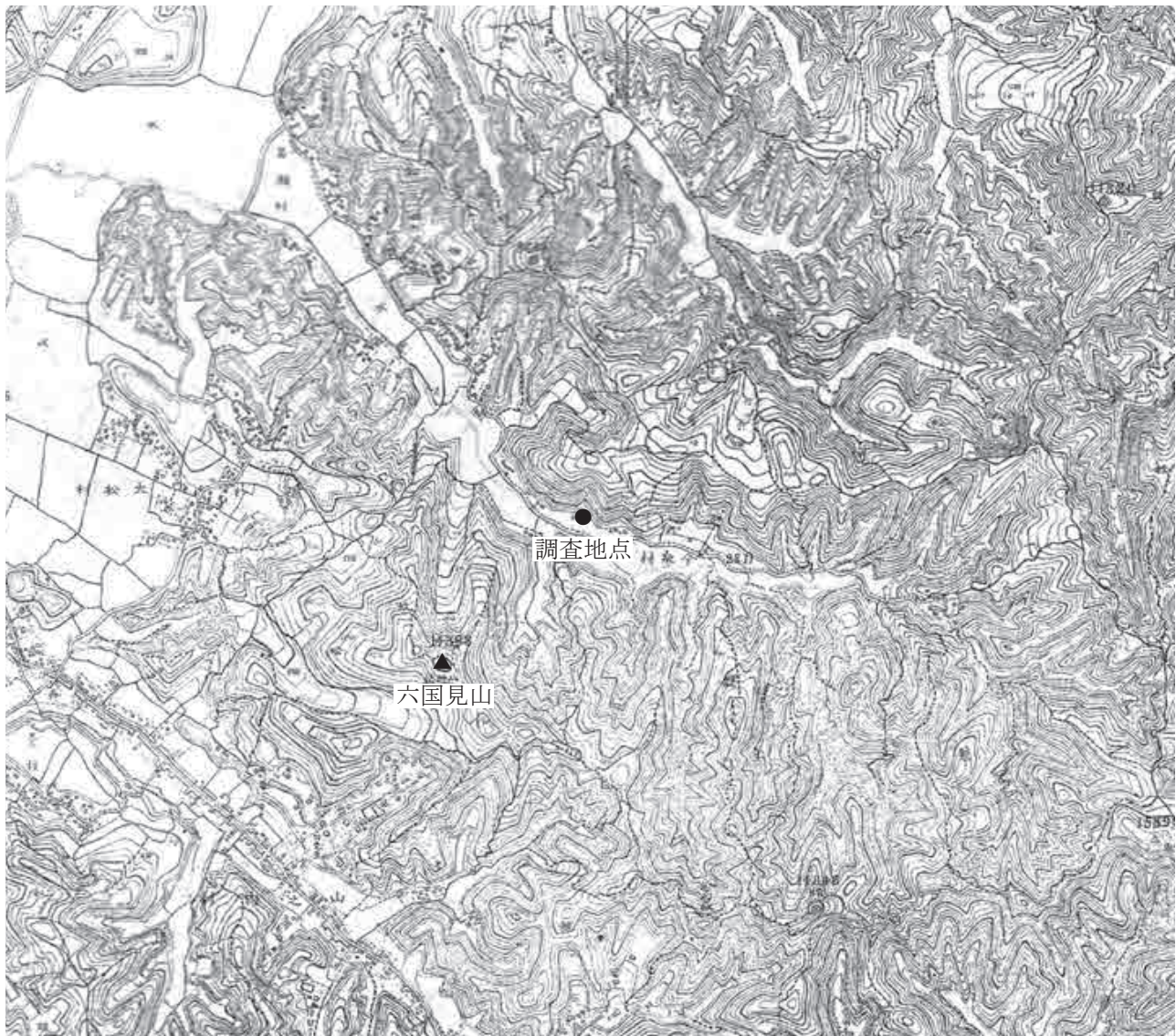


図2 明治15年頃の調査地点一带(迅速測図)(1/20000)

橋本氏によると、守護神として毘沙門天像を都市の城壁や寺の門などに置く行為は比較的早い段階では行われていたようだが、中国ほど広がりを見せていなかったことが示されている。また、毘沙門天説話において、中世以前の段階では毘沙門天によって救済される対象のほとんどが僧侶であり、仏法守護神として出家信者の仏道修行を完遂させるために施福している段階から、鎌倉時代以後、毘沙門天による救済が在家にも及ぶことや、遊行聖と関連する説話が見られること、融通念仏と関連する説話が見られることが示されている。そして、この融通念仏とその勧進活動によって毘沙門天が大衆化していき、室町時代以後の「七福神」の成立につながった可能性が示されている(橋本2008)。この橋本氏の論稿を鑑みると、平安仏である毘沙門天像が鎌倉の北方である今泉の地にあることから、この毘沙門天像を鎌倉の北方の守護神と結論づけることは短絡的と言えよう。

いずれにしても、史料数や調査事例の少なさからすると白山神社所蔵の兜跋毘沙門天像^{とぼつびしゃもんでん}について結論づけるのは時期尚早であるが、鎌倉時代の今泉を復元する上でこの毘沙門天像は重要な意味を持つと言えるのではなかろうか。

今泉寺 『風土記稿』によると、寿福山と号し、臨濟宗、建長寺塔頭廣徳院末であったという。本尊は出山釈迦（長九尺五寸、行基作）。毘沙門堂の別当であったという。『風土記稿』所収の「享祿五年（1532）九月再建棟札写」にも寺号がみえる。廃年不明。現在の今泉寺は昭和に再興されたもの。

六国見山 円覚寺北側にあり、標高147.7 m。鎌倉では大平山・十王岩に次ぐ高い山。伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総の六カ国を眺望できるので名がつけられたという。『風土記稿』には、西は富嶽、東北は筑波山をも遠望し、群中第一の壯観なり、とある。六国見山には富士塚と稚児塚と呼ばれる二つの塚があり、実際に眺望が良いのは富士塚である。また、稚児塚には、塔身と相輪が失われた鎌倉時代後期の宝篋印塔が残されている（日本石造物辞典編集委員会2012）。

（沖元）

引用・参考文献

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 神奈川県史編纂室編 1979『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3下）』神奈川県史編纂室
- 神奈川県史編纂室編 1979『神奈川県史 資料編20 考古資料』神奈川県史編纂室
- 神奈川県図書館協会編 1991『神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌 神奈川県郷土資料集成第十二集』神奈川県図書館協会
- 鎌倉市教育委員会編 1971『としよりのはなし 鎌倉市文化財資料第7集』鎌倉市教育委員会
- 鎌倉市教育研究所編 1993『かまくら子ども風土記』鎌倉市教育委員会
- 清水真澄 1986『かながわの平安仏 かもめ文庫24』神奈川合同出版
- 宗臺秀明 1999「福泉遺跡」『中世石窟遺構の調査Ⅲ 東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集』東国歴史考古学研究所
- 鈴木庸一郎 2000『福泉やぐら群 かながわ考古学財団調査報告91』（財）かながわ考古学財団
- 田代郁夫・小林重子 1993『平成3年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』No.342遺跡内やぐら発掘調査団
- 田代郁夫・大坪聖子 1995『西念寺境内遺跡 東国歴史考古学研究所調査研究報告第4集』東国歴史考古学研究所
- 田辺勝美 2006『毘沙門天像の起源』山喜房佛書林
- 継実 1991「岩瀬上耕地遺跡（岩瀬上耕地700番外地点）の調査」『第1回鎌倉市遺跡調査研究発表会発表要旨』
- 継実 1992『平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』No.342遺跡内やぐら発掘調査団
- 継実 2002「岩瀬上耕地遺跡」『鎌倉の横穴墓 東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集』東国歴史考古学研究所
- 日本石造物辞典編集委員会編 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 貫達人・川副武胤 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
- 貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
- 橋本章彦 2008『毘沙門天－日本的展開の諸相－』岩田書院
- 長谷川厚ほか1999『福泉遺跡（No.342）所在やぐら群 かながわ考古学財団調査報告70』（財）かながわ考古学財団
- 宮田眞・高野昌巳 1995『平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』福泉やぐら群発掘調査団
- 蘆田伊人編 1958『大日本地誌大系（二十一） 新編鎌倉志 鎌倉攬勝考』雄山閣
- 蘆田伊人編 1998『大日本地誌大系22 新編相模国風土記稿第四卷』雄山閣

第二章 調査概要

1. 調査にいたる経緯

「福泉やぐら群」(鎌倉市No.447)の一角に位置する今泉三丁目292番地において、個人専用住宅建設の照会があり、試掘調査をおこなった結果、数枚の生活面らしき平坦面が確認された。計画によれば基礎工事に鋼管杭の打設をともなうものであり、遺構の損傷は不可避と判断されたが、建物強度を維持するために設計変更は困難であった。そこで協議を経て、記録保存のための発掘調査が国庫補助事業としておこなわれることとなった。

調査は2006年11月15日に始められた。

2. 調査方法

掘削方法

掘削にあたっては残土を場内処理とし、置き場所の確保のため調査区63.9㎡を東西に二分割した。そして前半(西半部)を「I区」、後半(東半部)を「II区」と仮称した。両区とも表土、ないし大型攪乱坑堆積土を重機で掘削し、以下を人力で掘り下げた。なお地表面からの深度が2mに達した地点で、安全上の配慮から、以下の掘削は部分的な深掘りにとどめ、堆積状況の確認のみおこなった。その結果、後述するように確認坑以下は無遺物の地山層であることが確認され、調査を終了した。

測量方法

調査区はほぼ長方形を呈しているが、調査の際には長軸および短軸に直交・平行した基準軸を5mおきに設定し、のち資料整理時に世界測地系の数値を導入した。

調査区は以下の範囲内にある。

[エリア9] X - 72 540.45 ~ X - 72 548.10
Y - 25 322.60 ~ Y - 25 332.55

3. 調査経過

- 11月15日(水) 機材搬入、I区調査開始
- 12月8日(金) 調査区反転、II区調査開始
- 12月22日(金) 深掘り確認坑実測・写真撮影
- 12月27日(水) 機材撤収、調査終了

(馬淵)



図3 調査区設定図 (1/300)

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序と面の概要

地表面と表土

地表面の標高は、調査区内崖際で23.7～23.8 m、手前で23.5～23.6 mと、崖裾ではあるがほぼ平坦に調整されている。表土層は崖から離れるにつれ厚く、西壁では150cmの厚みがある。

1面

表土を除くと、若干粘性のある茶褐色土とやや暗い青灰色粘質土が現れ、これを除くと最初の生活面(1面)が現れる。面の構成土は岩盤の風化した山砂を主体とする暗～明灰褐色の弱粘質土である。若干の木片・腐植土塊を含む。東半分においては崖裾(北壁)から3.5～4m付近でなだらかに落ちる(落込み3)。1区北半部中心に性格不明の小穴が20近く空いているが、性格は不明で、人為性はあまり感じ取れない。

面標高(m)：高位面22.95(北西壁際)～22.75(南東壁際) 低位面22.45(落込み3下端部分東壁際)～22.38(落込み3下部東壁際)

検出遺構：柱穴ないし性格不明の小穴17口・土坑1基(「土坑1」)・溝ないし大型土坑1基(「落込み4」)

2面

1面構成土は岩盤崩土の山砂を基盤とし、炭化物や鉄分、泥岩の小片を多く含む。全体に締まりのいい砂質土だが、腐植土小塊を多く含む部分ではいくらか柔弱な部分がある。これを除くと2面が10～20cm下に現われる。

北西から南東にかけて斜めに浅い段状部があるが、自然の営力によるものか、人為的なものかの確証を欠く。面上には人頭大から縦横1m近い大型の凝灰岩(「鎌倉石」)が散乱していた。凝灰岩の間には遺物が集中している。

面標高(m)：高位面22.93(北西壁際)～22.50(南東壁際) 低位面22.35(南東部段下)～22.05(西壁中央部)

検出遺構：溝1条・遺物集中部1ヶ所・岩塊集中部2ヶ所・性格不明小穴3口・段状部1ヶ所

3面

2面構成土は全体に岩盤崩土の山砂を基本とし、大型凝灰岩を多量に含む。茶褐色または青灰色の砂質土を中心に、暗灰褐色の粘質土などで構成されており、締まりがある。また腐植土塊や木片を含む層もある。層厚は全体で10～40cmあり、これを除くと3面となる。

東半部の岩盤際には地滑りの痕跡とおぼしい溝状の細長い落ち込みが見られた。またその下段には段状の落ちがあるが、西半部南壁際で観察された落ちとともに、人工的なものかどうかは不明である。西半部の面上には1辺60～80cmの大型凝灰岩がいくつもある。このうちの何点かは2面時に見つかったもの。

面標高(m)：高位面22.32(西壁際北寄り)～22.75(東壁際北寄り)
低位面22.06(西壁部)～22.20(南東部段下東壁際)

検出遺構：溝1条・岩塊集中部1ヶ所・遺物集中土坑1口・段状部2ヶ所

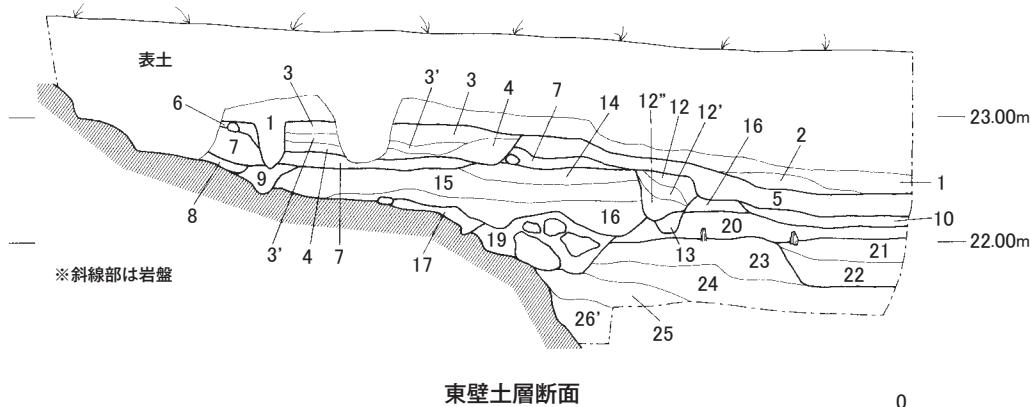
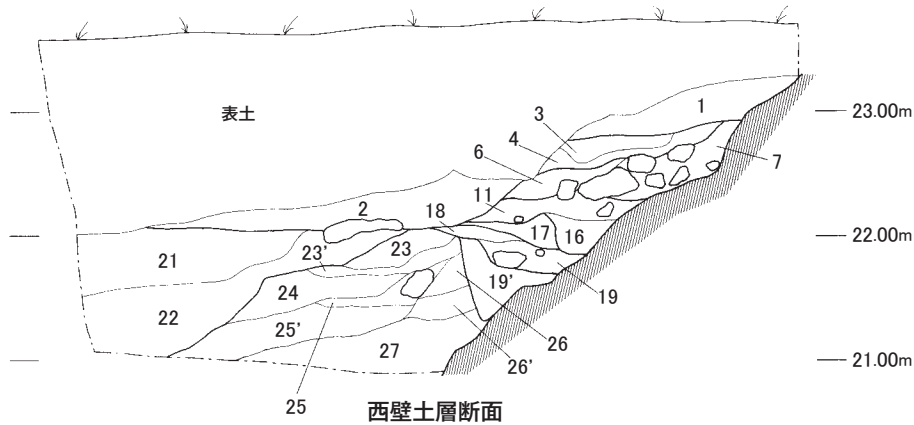


図4 土層説明

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 茶褐色弱粘質土 2. 暗青灰色粘質土 3. 明灰褐色弱粘質土 3'. 灰褐色弱粘質土 4. 暗灰褐色弱粘質土 5. 灰褐色粘質土 6. 暗褐色砂質土 7. 茶褐色砂質土 8. 黄灰色砂層 9. 青灰色砂層 10. 暗灰褐色粘質土 11. 青灰色砂質土 12. 黄灰色砂質土 12'. 黄灰色砂質土 12''. 青灰色弱粘質土 13. 青灰褐色粘質土 14. 灰褐色粘質土 15. 暗青灰色弱粘質土と茶褐色粘質土の混土 16. 青灰色砂質土 17. 茶褐色粘質土 18. 青灰色粘質土 19. 青灰色粘質土 19'. 19とほぼ同土だが、大型凝灰質砂岩を含まない。 20. 黒灰色粘質土 21. 暗青灰色粘質土 22. 青灰色粘土 23. 暗青灰色粘質土 23'. 暗青灰色粘質土 24. 暗青灰色粘土 25. 暗青灰色砂質土 25'. 暗青灰色砂質土 26. 青灰色弱粘質土 26'. 青灰色砂質土 27. 黒灰色粘質土 | <p>東壁近くではやや灰色味を帯び、鉄分多く、砂粒・拳大の砂の塊・炭化物を含む。縮まり強い。岩盤崩土が土壌化したもの。</p> <p>山砂(岩盤崩土、以下「山砂」といった場合はすべて岩盤崩土の意)を基本とし、泥粒・砂粒・木片多く、炭もしくは炭化物多く含む。縮まりはやや弱い。</p> <p>山砂を基本とし、粘性強く縮まりあり。鉄分を多く含み、炭化物が多い。上面が1面</p> <p>3より鉄分少ない。</p> <p>腐植土と砂質土の混土。微量の鉄分・炭化物・泥岩小塊を含み、湿性で柔弱、縮まりは弱い。</p> <p>山砂と腐植土の混土。炭化物やや多く、鉄分微量に含む。上面が1面</p> <p>青灰色の山砂を基本とし、暗灰褐色の腐植土が多く混じる。全体に柔弱。</p> <p>山砂を基本とし、巨大な凝灰質砂岩(「鎌倉石」)・泥の塊等が密に詰まる。やや縮まりあり。上面が一部2面</p> <p>砂泥・凝灰質砂岩の風化した小塊多く含む。2面遺構</p> <p>泥の小塊混じる。2面遺構</p> <p>鉄分多く、粘性強く、縮まりあり。上面が2面</p> <p>山砂を基本とし、腐植土が多く混じる。木片・鉄分・泥の小塊少量混入。やや縮まりあり。上面が3面</p> <p>鉄分と炭化物を少量含む。縮まりあり。</p> <p>鉄分と炭化物を少量含む。縮まりあり。</p> <p>鉄分・炭化物・泥岩と砂岩粒子微量含む。縮まりあり。</p> <p>山砂を含み、縮まり弱い。2・3面遺構</p> <p>少量の鉄分・腐植土・木片・凝灰岩粒子・炭化物を含む。縮まり弱い。上面が2面</p> <p>粒状~拳大小塊の砂岩や泥岩・木片多く、炭化物を散見する。粘性はあるが、縮まりは弱い。</p> <p>腐植土を基本とし、砂粒と拳大砂岩小塊を多く含み、木片・炭を散見する。軟質で縮まり弱い。</p> <p>腐植土と青灰色砂層との混土で粒状~半拳大の泥岩・砂岩を多く含む。木片・炭を含み、軟質で縮まり弱い。</p> <p>腐植土と青灰色砂層との混土。拳大の泥岩・砂岩を多く含み、炭化物混入する。軟質で縮まり弱い。</p> <p>腐植土を基本とし、大型凝灰質砂岩を多く含み、粒状~半拳大泥岩・砂岩・木片を若干含む。軟質で縮まり弱い。</p> <p>灰黒色のスコリアを散見する。鉄分をやや多く含み、縮まりがある。上面が3面</p> <p>砂質土・鉄分・木片・炭・泥岩粒子を少量含み、縮まりあり。上面が4面</p> <p>含有物のほとんどない粘土。柔らかいが粘性強い。</p> <p>青灰色の粘土を基本とし、腐植土・砂質土小塊を含む。上面が5面</p> <p>砂質土小塊が23よりも多い。粒状~半拳大の泥岩や凝灰質砂岩・木片・炭多く含む。</p> <p>柔らかいが粘性強い。若干の木片・炭化物含む。</p> <p>泥岩と凝灰質砂岩の粒・同小塊・炭化物・木片多く含む。少量の腐植土混じる。</p> <p>含有物少ない。</p> <p>粘性土ときめの細かい砂粒の混土。ごく少量の木片・炭化物・泥岩や砂岩の粒子を含む。</p> <p>26より挟雑物若干多い。</p> <p>腐植土・木片・砂粒と小礫かなり多く含む。</p> |
|--|---|

図4 土層断面図

4面

3面は西半部では青灰色砂質土、東半部では黒灰色の粘質土で構成される。前者は岩盤崩土を主体とし、腐植土が多く混じる。木片・鉄分・泥の小塊などが少量混入する。後者は鉄分をやや多く含み、黒色スコリアを散見する。地山層を素材とした土で、締まりがある。3面構成土の層厚は10～20cm程度あり、4面はこれを掘り下げると現われる。おおむね平坦な面である。

面標高(m)：22.00(東壁際)～22.05(西壁際)

検出遺構：溝1条・土坑1基

5面

4面を構成するのは暗青灰色の粘質土で、南に向かって厚みを増し、西壁の南端では50cmもある。これを剥がすと5面が現れる。南に向かって落ちるが、人為によるものかどうかは確認できない。崖際の岩盤と土との間が溝状に窪み(溝2)、周辺にはいくつもの不整形の浅い穴があるが、これも遺構と認定する根拠に乏しい。

面標高(m)：高位面22.00(東壁際)～22.05(西壁際)

低位面21.65(西壁南西角)～21.00(南東部段下東壁際)

検出遺構：溝1条

5面下

5面でほぼ遺物の出土がなくなり、以下は自然堆積層との認識を得たが、最終確認の深掘り坑を東西の壁際に設定した。深掘り坑の深度は西壁で2.75m、東壁で2.47mである。平坦面はなく、地滑りらしき断層が見られたものの(26・27上面)、全体に無遺物であり、崖際に堆積した地山層と判断して調査を終了した。

第2節 各説

1.1面

土坑1(図6)

概要：山際の平坦部に開けられた長円形の浅い穴 位置：X - 72 542.35 ～ - 72 543.38 Y (- 25 329.20) ～ (- 25 330.18) 規模：長さ(132)cm×幅103cm×深さ24cm 底面標高：23.17m 平面形：長円形または楕円 断面形：皿形 主軸方位：(N - 90° - W) 充填土：図5に記載 重複関係：P.4・10・16を切る 出土遺物：瀬戸美濃陶器輪禿皿(1)・肥前系陶器皿(2)・瀬戸美濃陶器袋物か(3)・瀬戸美濃陶器小碗(4)・備前か船徳利(5)・肥前系磁器碗(6・8) 肥前系磁器くらわんか碗(7・9・11) 肥前系磁器小広東碗(10)・肥前系磁器小杯(12) 遺物年代：肥前系磁器は18世紀前半や中葉のものを含みつつも18世紀後半のものが主体、1の瀬戸美濃陶器皿は18世紀後半頃のものか。 特記事項：江戸時代後期の穴、性格不明だが、遺物は多く、ゴミ捨て穴か。落込み4につながる可能性あり。

落込み3(図5・7)

概要：平坦面から緩傾斜面に移行する段差 位置(南北のみ)：上端X - 72 543.02(西北部)～X - 72 544.67(東南部) 下端X - 72 543.50(西北部)～X - 72 545.93 規模：段部幅135cm(西北部)～45cm(東南壁際)、段差高45cm(東壁)～65cm(西壁) 最低位点標高：21.11m 平面形：ほぼ直線(西北→東南) 主軸方位：N - 80° - E 堆積土：図4参照 出土遺物(図7)：肥前系磁器折縁皿(5・6) 遺物年代：5・6は17世紀後半の波佐見の製品 特記事項：山裾の堆積層の自然傾斜か

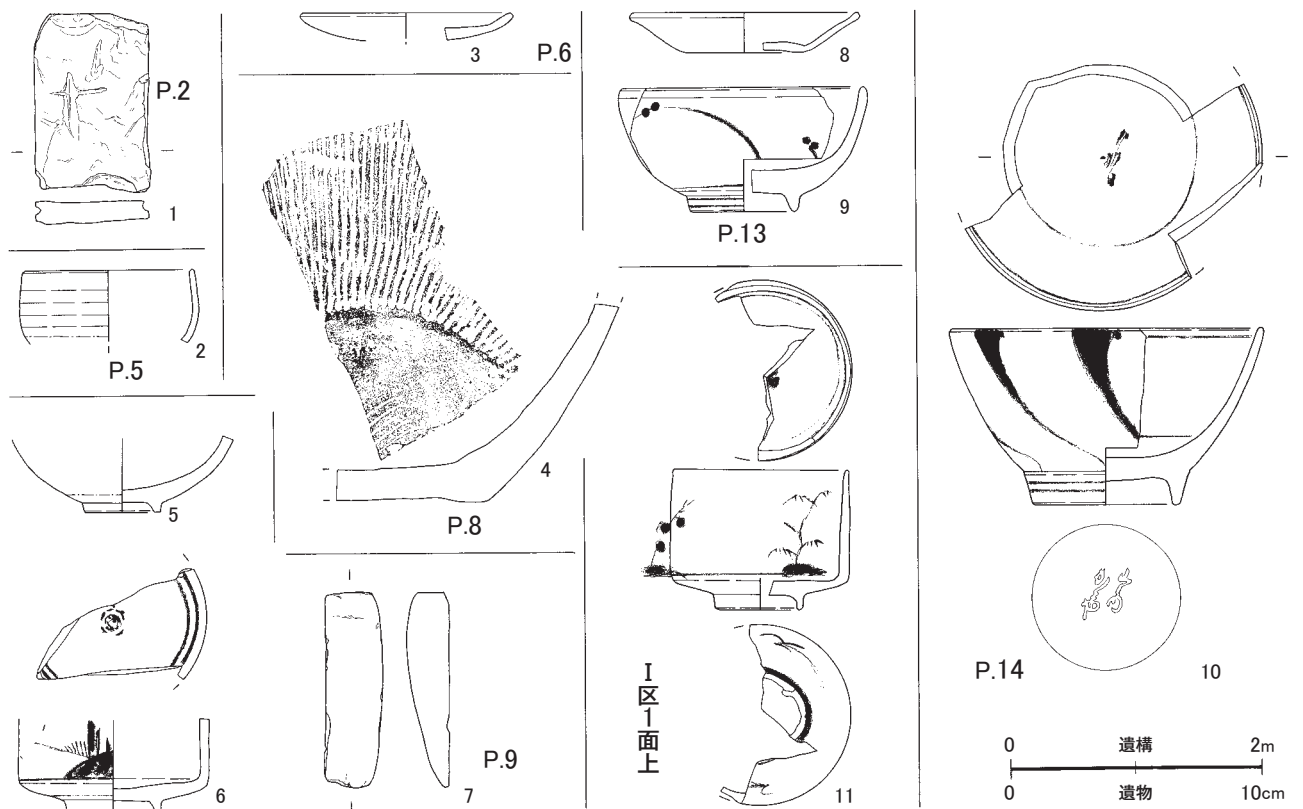
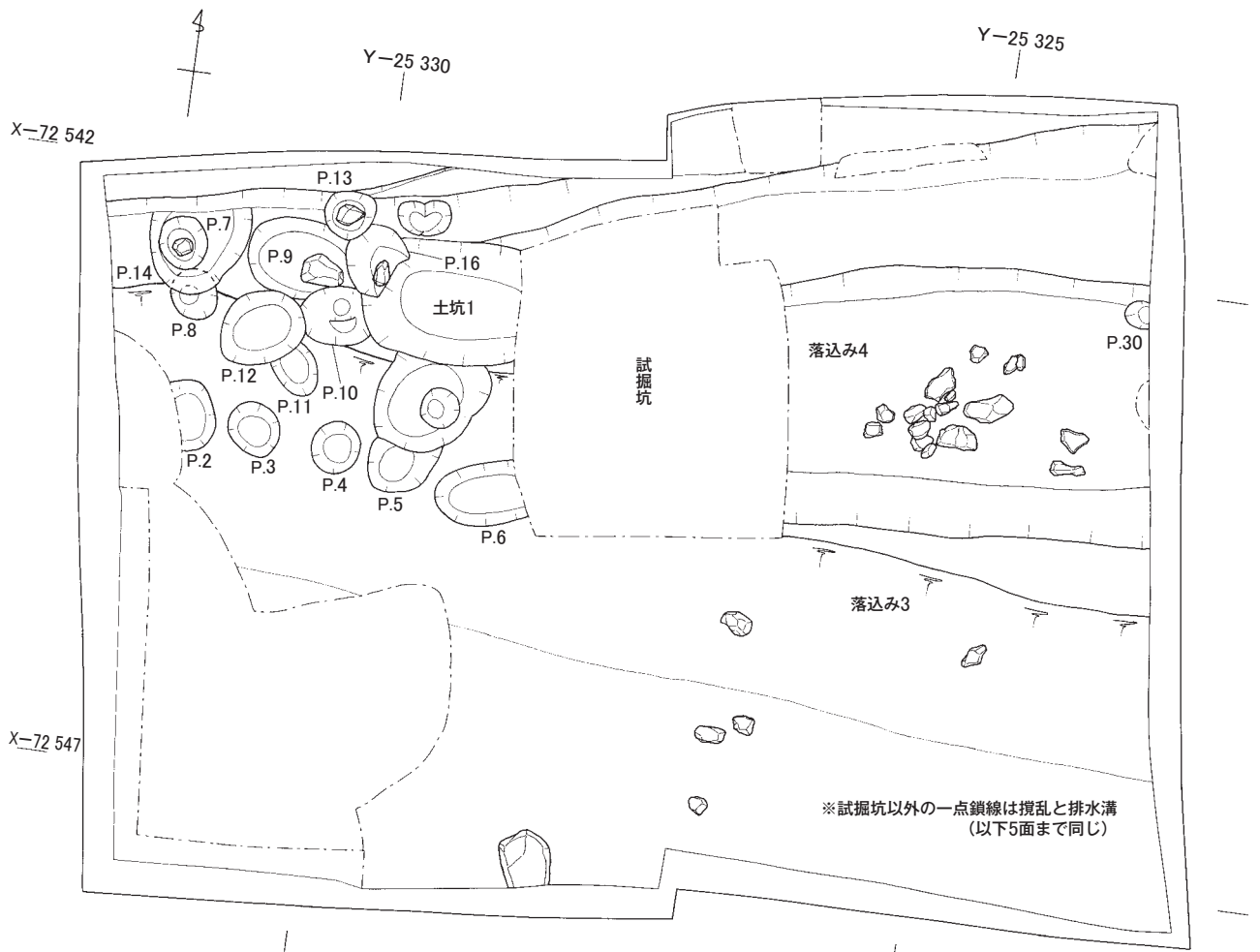
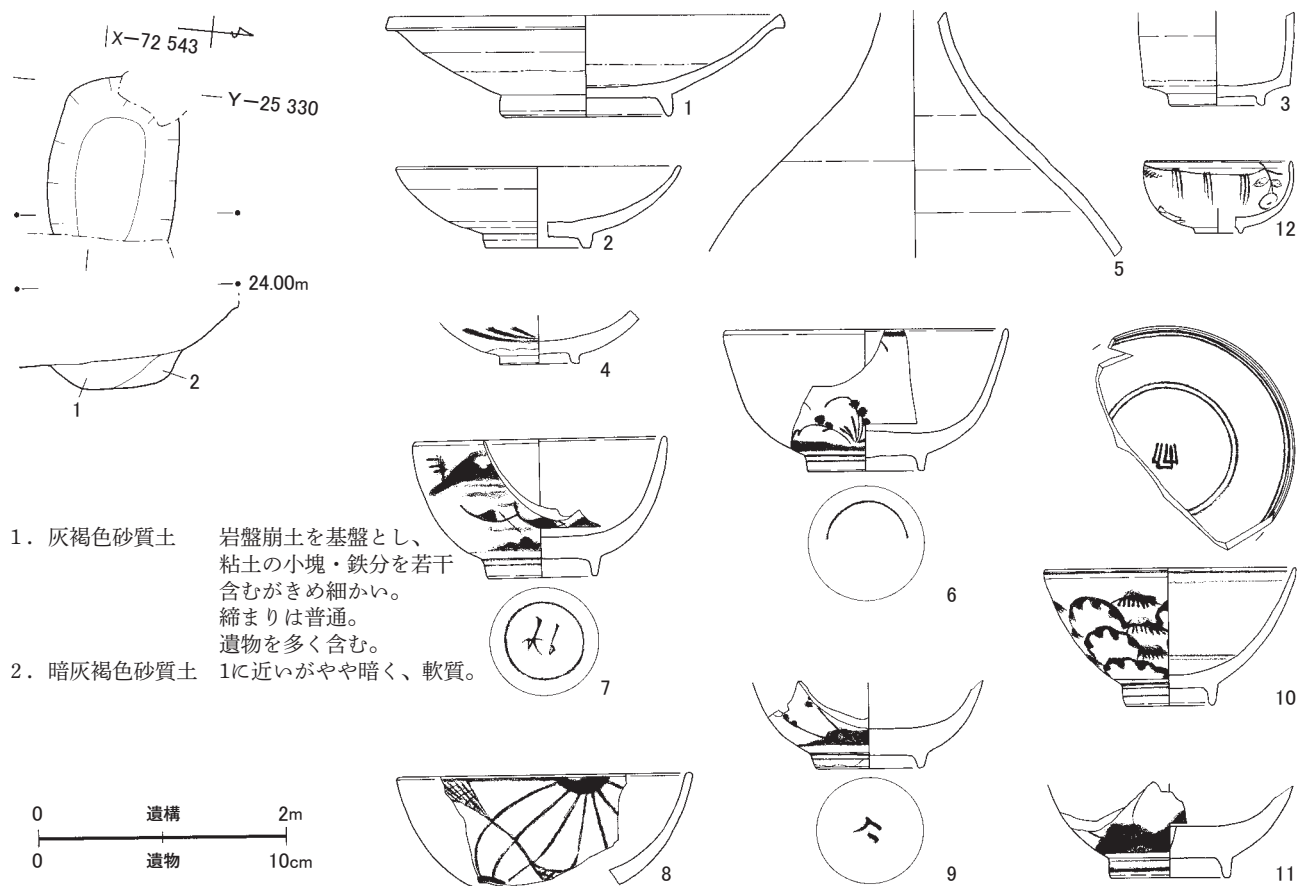


図5 1面遺構全図，同遺構・同上包含層出土遺物



1. 灰褐色砂質土 岩盤崩土を基盤とし、粘土の小塊・鉄分を若干含むがきめ細かい。縮まりは普通。遺物を多く含む。
2. 暗灰褐色砂質土 1に近いがやや暗く、軟質。

図6 土坑1, 同出土遺物

落込み4 (図5・7)

概要：山裾の平坦部に開けられた細長い大型の穴 位置：X - 72 541.96 ~ - 72 543.80 Y (- 25 323.39) ~ (- 25 326.68) 規模：長さ(304)cm×幅225cm×深さ30cm 底面標高：226.2cm 平面形：長方形か 断面形：浅い逆台形 主軸方位：(N - 84° - E) 充填土：図4に記載 重複関係：P.30に切られる 出土遺物(図7)：瀬戸美濃か碗(7)・瀬戸美濃大窯播鉢(8)・肥前系磁器小杯(9)・肥前系磁器碗(10・11) 遺物年代：8の播鉢のように大窯期のものも含むが、主体は18世紀前半。 特記事項：半人頭大~人頭大凝灰岩と遺物を多く含むが、性格は不明。土坑1と一連である可能性もある。

1面出土遺物(図5・7)

P.2出土遺物：砥石(5-1) P.5出土遺物：関西系陶器小碗(2) P.6出土遺物：瀬戸美濃陶器灯明皿(3) P.8出土遺物：堺播鉢(4) P.9出土遺物：瀬戸美濃陶器碗(5)・肥前系磁器茶呑碗(6)・砥石中砥(7) P.13出土遺物：土師器皿口クロ種小型(8)・肥前系磁器くらわんか碗(9) P.14出土遺物：肥前系磁器広東碗(10) I区1面上出土遺物：肥前系磁器茶呑碗(11) 遺物年代：肥前系磁器は18世紀後半~19世紀初頭が主体。瀬戸美濃灯明皿は18世紀後半~19世紀前半。

II区1面上出土遺物(図7)：瓦器筒形製品(1)・瀬戸美濃灯明皿(2)・瀬戸美濃腰鍔碗(3)・瀬戸美濃灯明受皿(3) 遺物年代：2と4の灯明皿は18世紀後半~19世紀前半、3の腰鍔碗は18世紀後半のもの 特記事項：全体として江戸後期の様相を呈する。

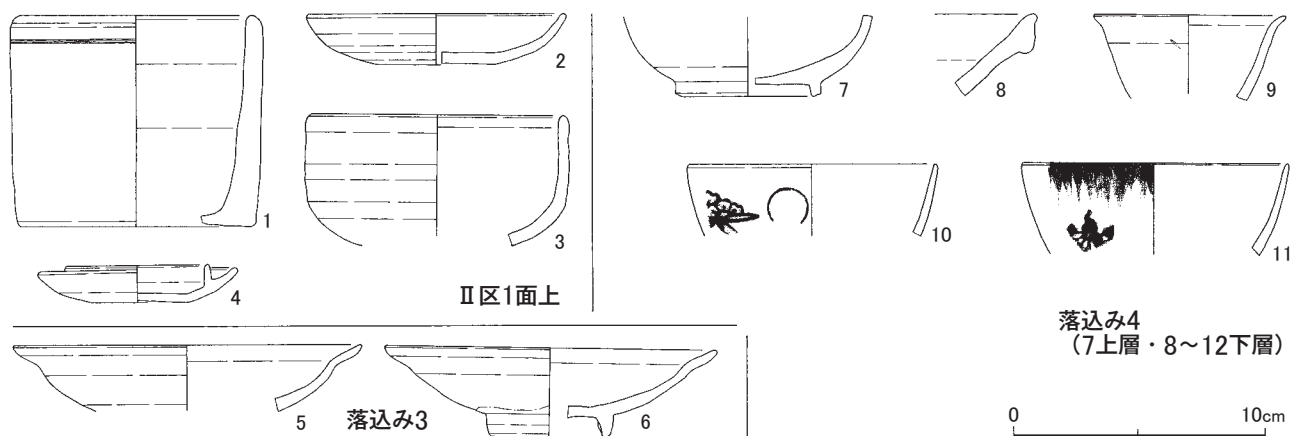


図7 II区1面上・同落としみ出土遺物

2. 2面

溝3 (図8)

概要:山裾の岩盤その表面の土との境目に検出された断面V字形の溝状の窪み。II区のみで検出された。
位置: X - 72 541.60 ~ - 72 542.60 Y (- 25 323.62) ~ (- 25 326.68) **規模:**長さ (3.08) m × 幅 55cm × 深さ 24cm **底面標高:** 22.4m **平面形:** 直線 **断面形:** V字形 **主軸方位:** (N - 102° - W) **充填土:** 図4に記載 **特記事項:** II区のみで検出され、試掘坑中で消滅してI区では確認できなかった。岩盤から土が剥がれた際にできた地割れの一つである可能性もある。

遺物集中1 (図8・9)

概要:北西部の高位面に凝灰岩群中に陶磁器が混入 **位置:** X - 72 542.35 ~ - 72 544.30 Y - 25 329.47 (集石東端) ~ (- 25 332.18) **規模:**東西 (220) cm × 南北 195cm **底面標高:** 22.7m (北端) ~ 22.35 m (南端) **出土遺物 (図9):**瀬戸美濃陶器灯明皿 (1)・瀬戸美濃陶器鎧湯呑 (2)・産地不明陶器蓋 (3)・瀬戸美濃陶器灯明受皿 (4)・瀬戸美濃陶器香炉 (5)・瀬戸美濃陶器蓋 (6)・瀬戸美濃陶器搦鉢 (7)・肥前系陶器小型壺 (8)・瀬戸美濃陶器袋物 (9・10)・肥前系磁器くらわんか碗 (11・12)・肥前系磁器碗 (13・15)・肥前系磁器広東碗 (14) **遺物年代:** 8の肥前系陶器は17世紀後半のものだが、肥前系磁器は18世紀中葉~19世紀初頭のもものが主体。瀬戸美濃陶器に19世紀前半代のもものが含まれる。 **特記事項:** 1面とさほど変わらない時期に、東南部段下の凝灰岩群とともに何らかの崩落があり、その時に陶磁器が混入していたという状況を示す。ただし混入した原因については、測りがたい。

2面上出土遺物 (図8)

I区1面下~2面上出土遺物:肥前系磁器小碗 (1)・瀬戸美濃陶器広東碗 (2)・片刃ビシャン (3) **遺物年代:** 1の肥前系磁器は18世紀後半、2の瀬戸美濃陶器は19世紀前半 **特記事項:** 3は粗く割った石の表面を細かく整える鉄製の工具で、この地区で石の切り出しがおこなわれていた可能性を示す。

I区北西部1面下~2面上出土遺物:瀬戸美濃陶器碗 (4)・肥前系陶器皿 (5)・瀬戸美濃輪禿皿 (6) **遺物年代:** 瀬戸美濃陶器のうち4の碗は18世紀後半~19世紀前半、6の皿は18世紀後半、5の肥前系陶器は18世紀前半。

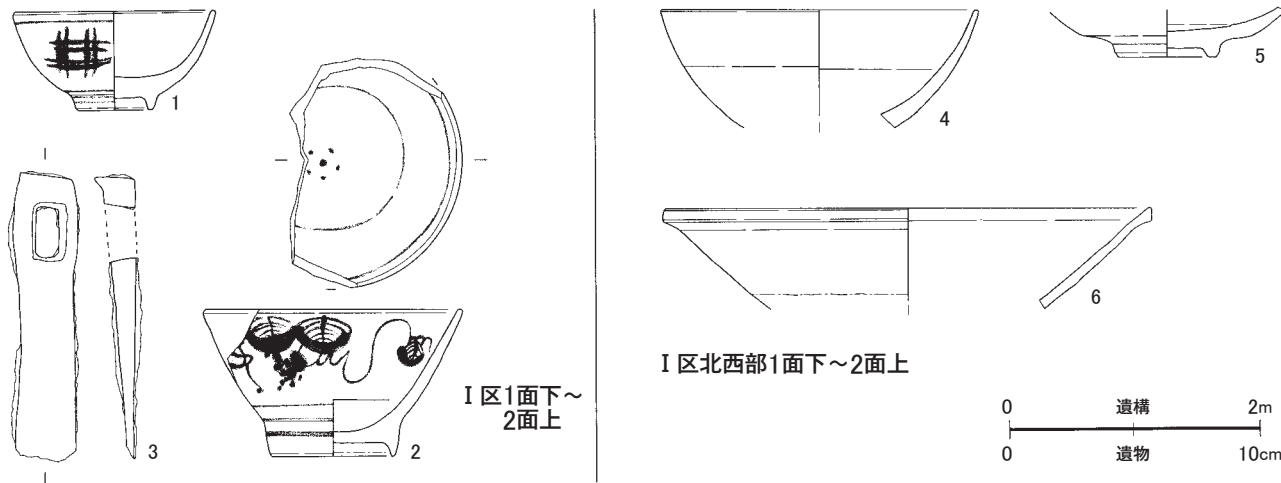
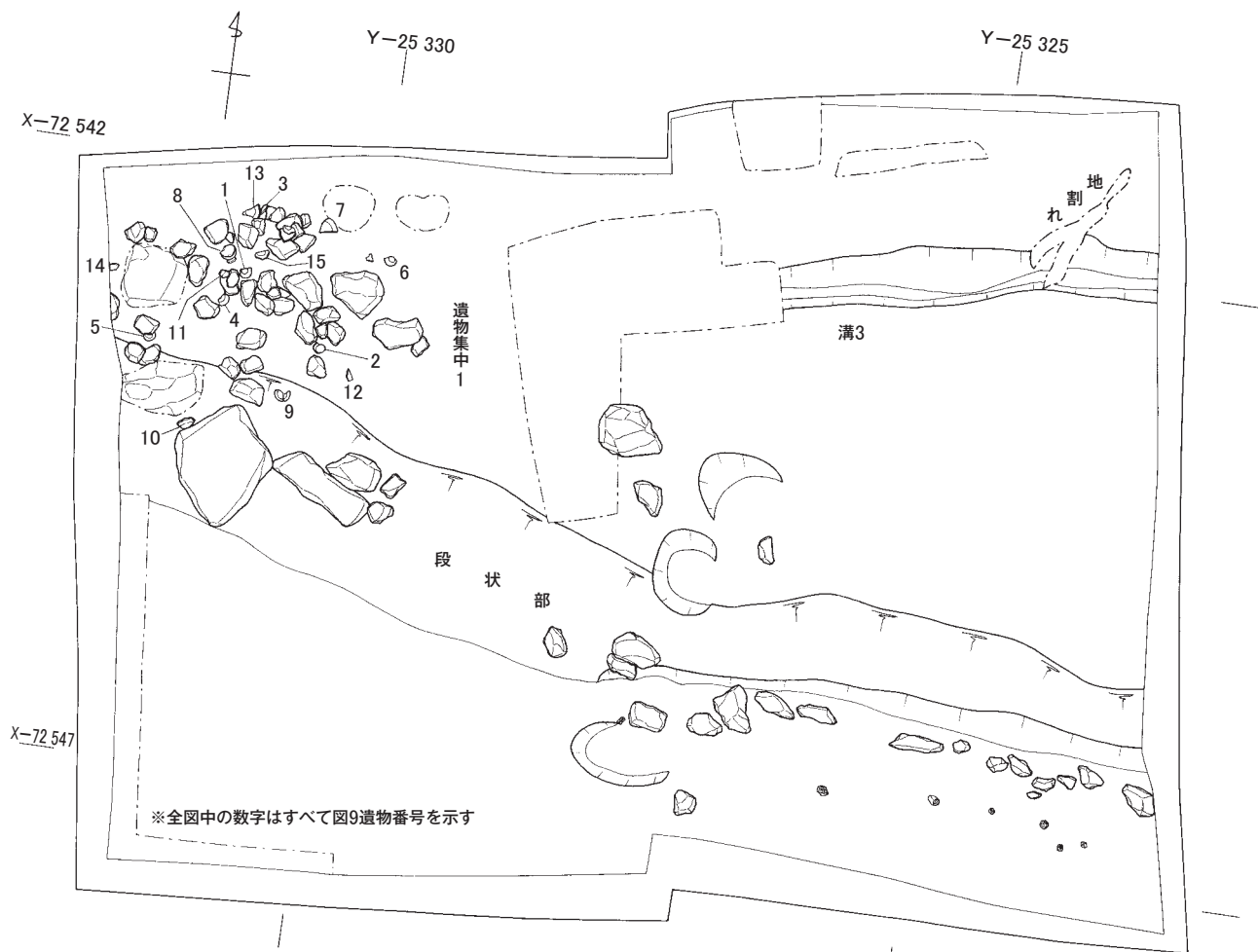


図8 2面遺構全図，同上包含層出土遺物

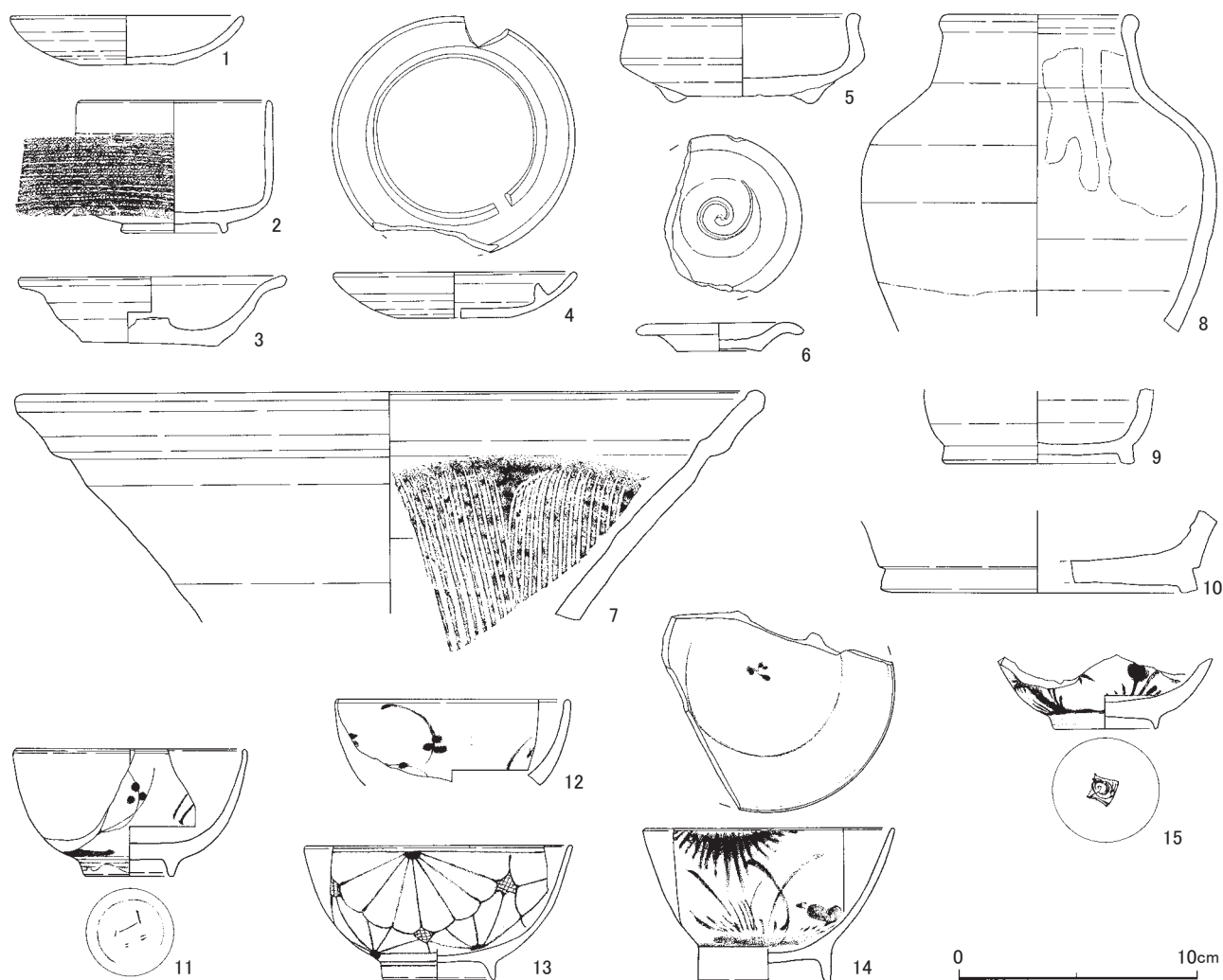


図9 遺物集中1出土遺物

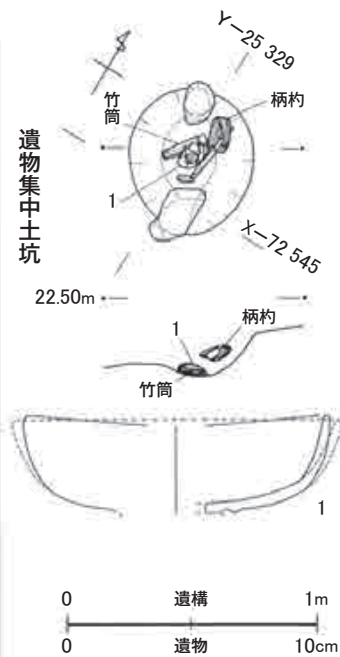
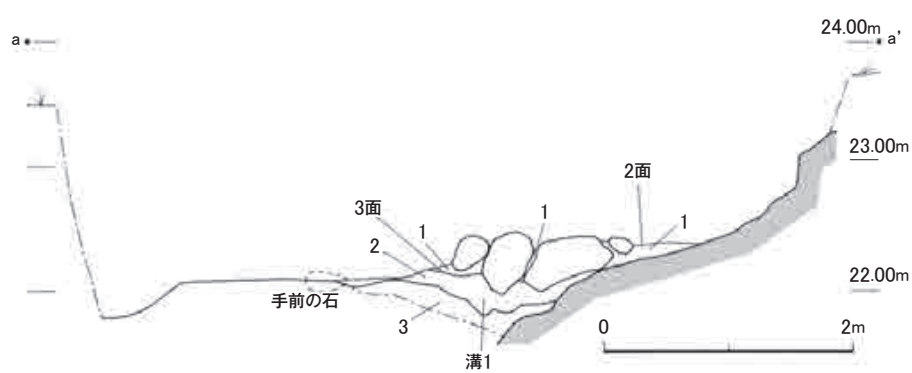
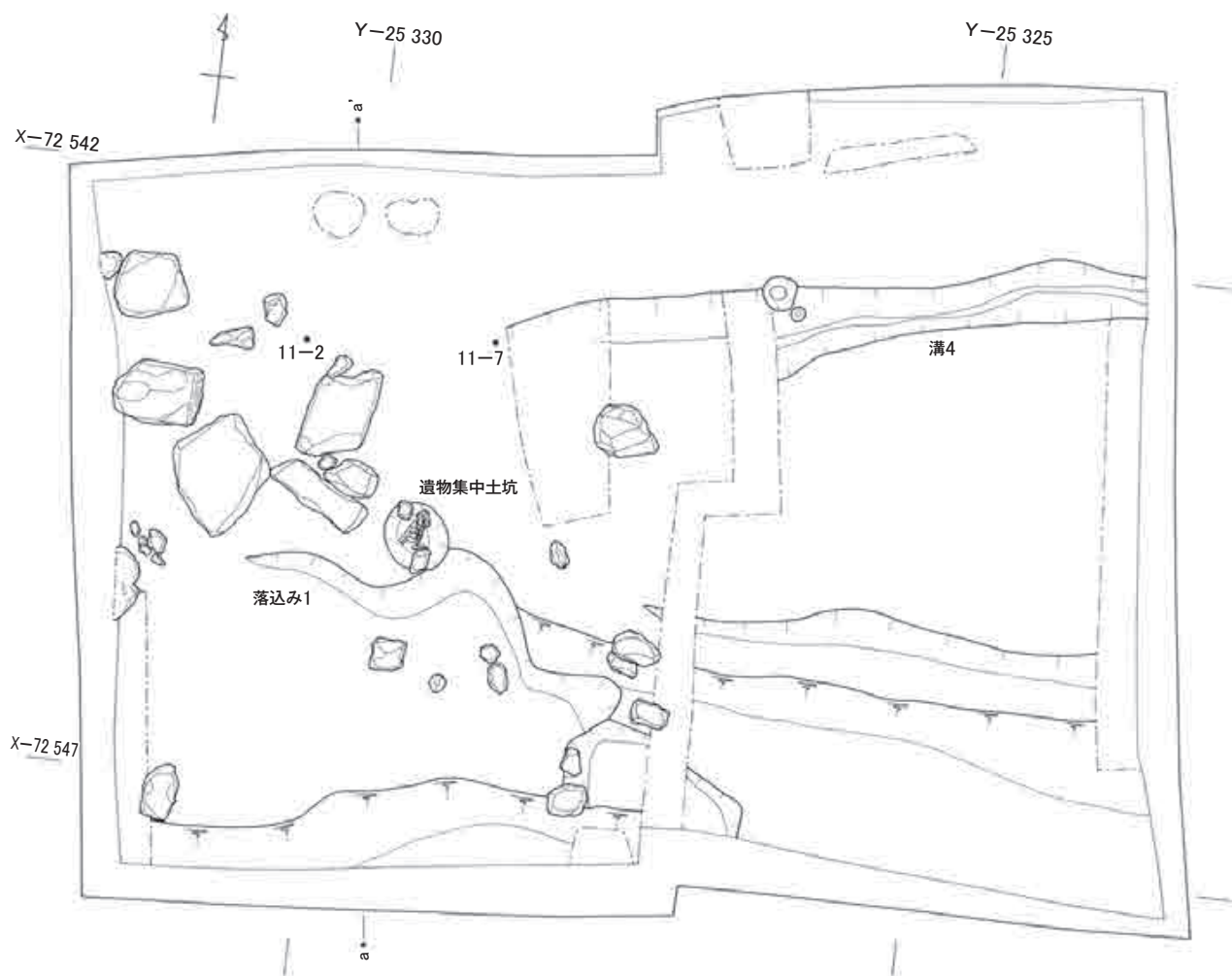
3.3面

溝4 (図10)

概要：山裾の岩盤とその表面に堆積した土との境目に形成された断面V字形の溝状の窪み 位置：X - 72 541.92 ~ - 72 540.80 Y (- 25 323.70) ~ (- 25 328.80) 規模：長さ (525) cm × 幅 75cm × 深さ 24cm 底面標高：22.38m 平面形：直線，西に向かって幅が広がる 断面形：V字形 主軸方位：(N - 103° - W) 充填土：図4に記載 特記事項：II区のみで検出され、これも試掘坑中で消滅する。山裾の岩盤から土が剥がれた際にできた地割れの一つである可能性がある。

大型凝灰岩集中部 (図10)

概要：大型凝灰岩が数点北西平坦部を中心に集まっている 位置：X - 72 542.74 ~ - 72 545.80 Y - 25 327.45 ~ (- 25 332.20) 規模：東西 (4.9) m × 南北 3.05cm 底面標高：22.25m (高位面) ~ 21.95 m (低位面) 特記事項：集中部分周辺にも大型凝灰岩が散見される。崩落によるものか、切り出されたものか不明だが、2面上出土遺物中に石切りに関係する工具 (図8-3「片刃ビシャン」) が出土していることから、後者の可能性がある。



- 1. 暗灰褐色砂質土 岩盤崩土を基本とし、青灰色泥岩細片を含む。木片散見。
- 2. 灰褐色粘質土 少量の炭化物を含む。締まりやや弱い（溝1）。
- 3. 灰黄褐色粘質土 青灰色の砂（岩盤崩土）を大量に含む（4面構成土）。

図10 3面遺構全図，土層断面・遺構

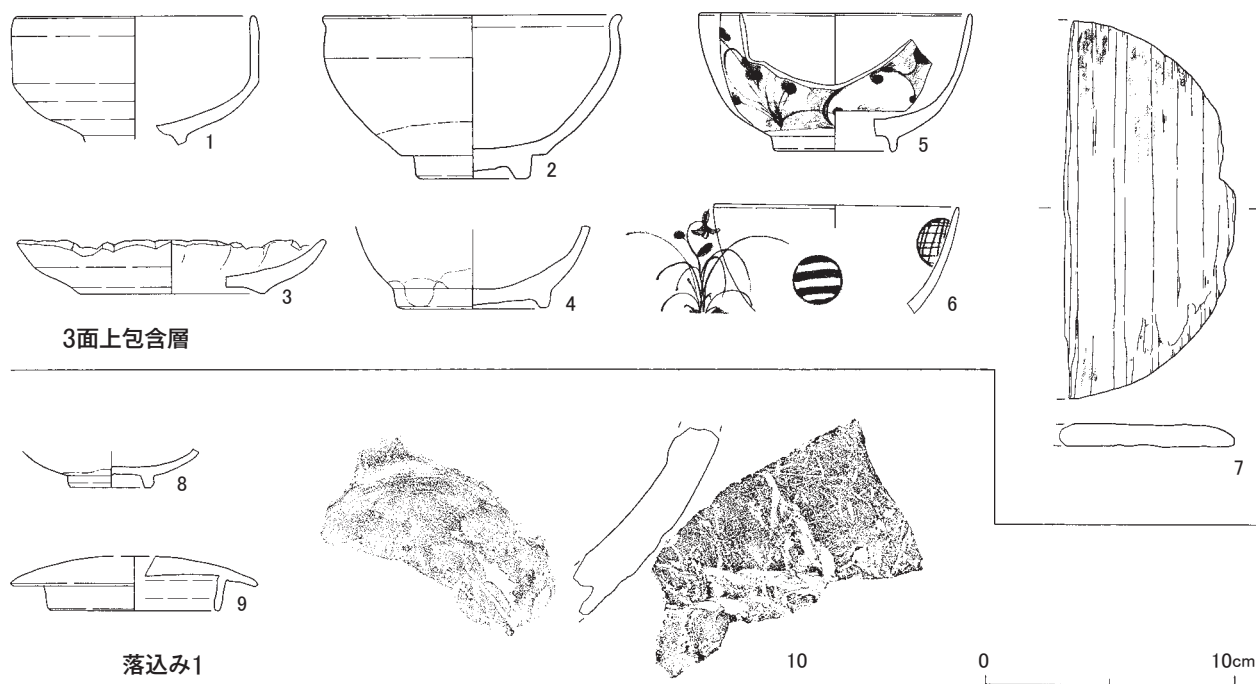


図11 3面上包含層・落込み1出土遺物

遺物集中土坑(図10)

概要：曲物の柄杓・漆器椀・竹筒等の入った円形土坑 位置：X - 72 544.37 ~ - 72 545.13 Y - 25 28.77 ~ - 25 329.23 規模：長さ56cm×幅50cm 深さ17cm 底面標高：63cm 平面形：円形 断面形：皿形 主軸方位：(N - 26° - W) 充填土：灰褐色弱粘質土 出土遺物：漆器椀(1)・曲物柄杓(復元不可のため図化不能)・竹筒(復元不可のため図化不能) 特記事項：柄杓や竹筒については材質が脆弱なため復元できなかったが、碗とともに一つの穴と一緒に埋められているので、液体とその補給に関連した道具が集められているといえるかもしれない。

落込み1(図10・11)

概要：I区中央やや西域から東南角に向かって落ちる段差 出土遺物(図11)：関西系陶器碗(8)・関西系陶器土瓶蓋(9)・産地不明陶器(10) 遺物年代：8は18世紀後半か、9は19世紀代 特記事項：人為的なものではなく、山裾に形成された自然の傾斜が部分的にやや急になったものと判断した。

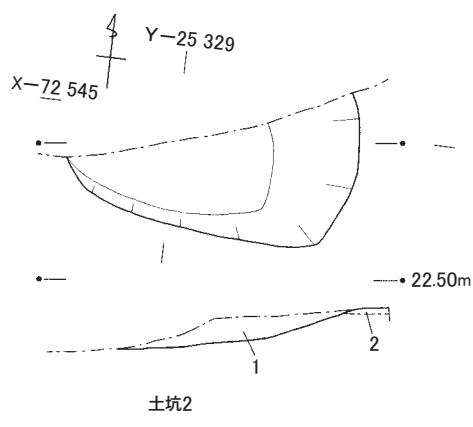
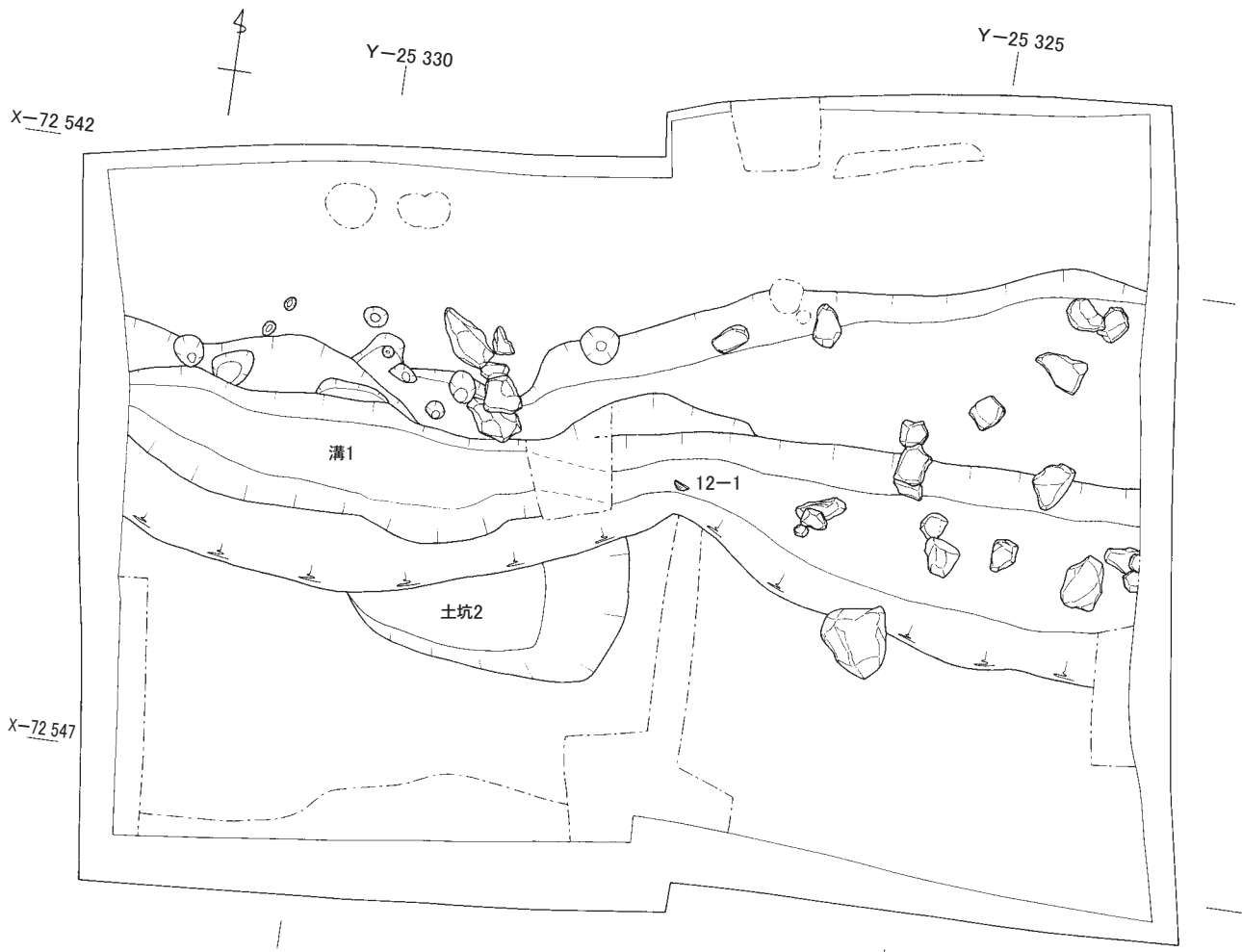
3面上包含層出土遺物(図11)

瀬戸美濃陶器せんじ(1)・瀬戸美濃陶器天目碗(2)・瀬戸美濃陶器稜花皿(3)・瀬戸美濃陶器袋物(4)・肥前系磁器くらわんか碗(5)・肥前系磁器丸碗(6)・曲物底(7) 遺物年代：瀬戸美濃陶器は17世紀初頭から18世紀後半~19世紀初頭のもので出土。肥前系磁器は17世紀末~18世紀中葉のもので出土。

4.4面

溝1(図12)

概要：山裾の岩盤とその表面に堆積した土との境目に形成された断面V字形の溝状の窪み 位置：X - 72 541.90 ~ - 72 545.40 Y (- 25 323.45) ~ (- 25 332.03) 規模：長さ(8.25)m×幅3.5m×深さ37cm 底面標高：21.68m 平面形：不定形、東に向かって幅が広がる 断面形：不定逆台形~V字形 主軸方位：(N - (92)° - W) 充填土：図4に記載 出土遺物：曲物底(1) 特記事項：山裾の排水溝の可能性はあるが、平面形・断面形とも不安定で、岩盤から土が剥がれた際にできた地割れの一種である



- 1. 灰茶褐色弱粘質土 若干の炭化物・遺物片を含む。縮まり弱い。
- 2. 黒灰色粘質土 半卵大～拳大泥岩片を含むが、炭化物・遺物などは見当たらない。縮まりが強い。岩盤上の自然堆積層。

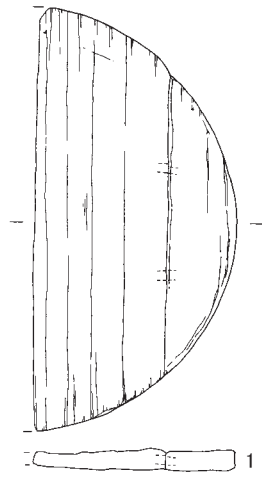
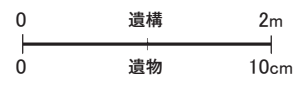


図12 4面遺構全図, 土坑2・4面出土遺物

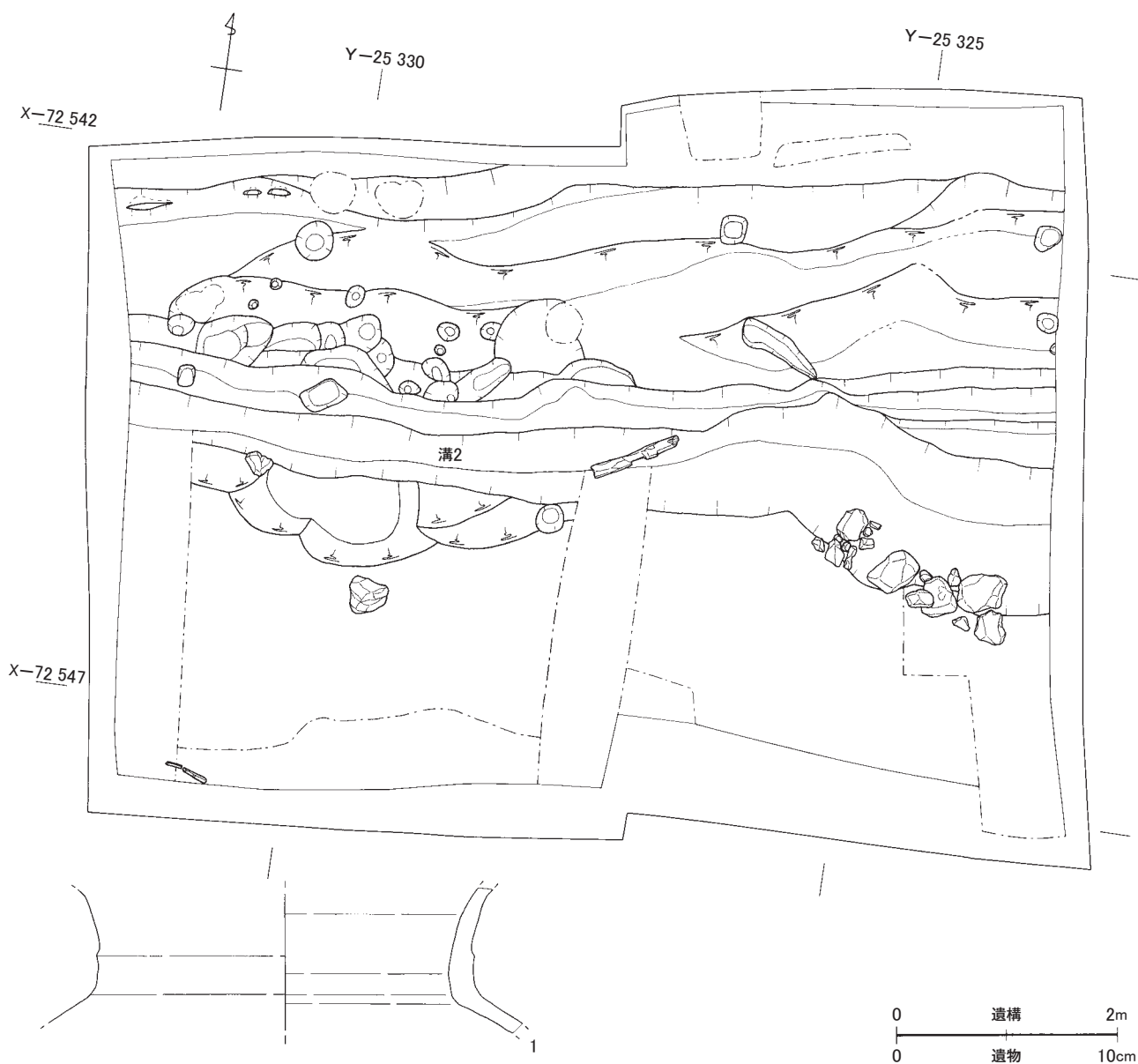


図13 5面遺構全図, 溝2出土遺物

可能性もある。

土坑2 (図12)

概要: 岩盤際の溝に接した浅い土坑 位置: X - 72 544.67 ~ (- 72 545.95) Y (- 25 327.54) ~ (- 25 339.85) 規模: 長さ (225) cm × (80) cm × 深さ 30cm 底面標高: 21.95m 平面形: 隅丸長方形 断面形: 皿形 主軸方位: (N - 88° - W) 充填土: 図12参照 重複関係: 溝1と接するが、切合いは確認できず 出土遺物: 図化可能なものなし 特記事項: 落込み角度がきわめて浅く、人為によるものかどうか不明

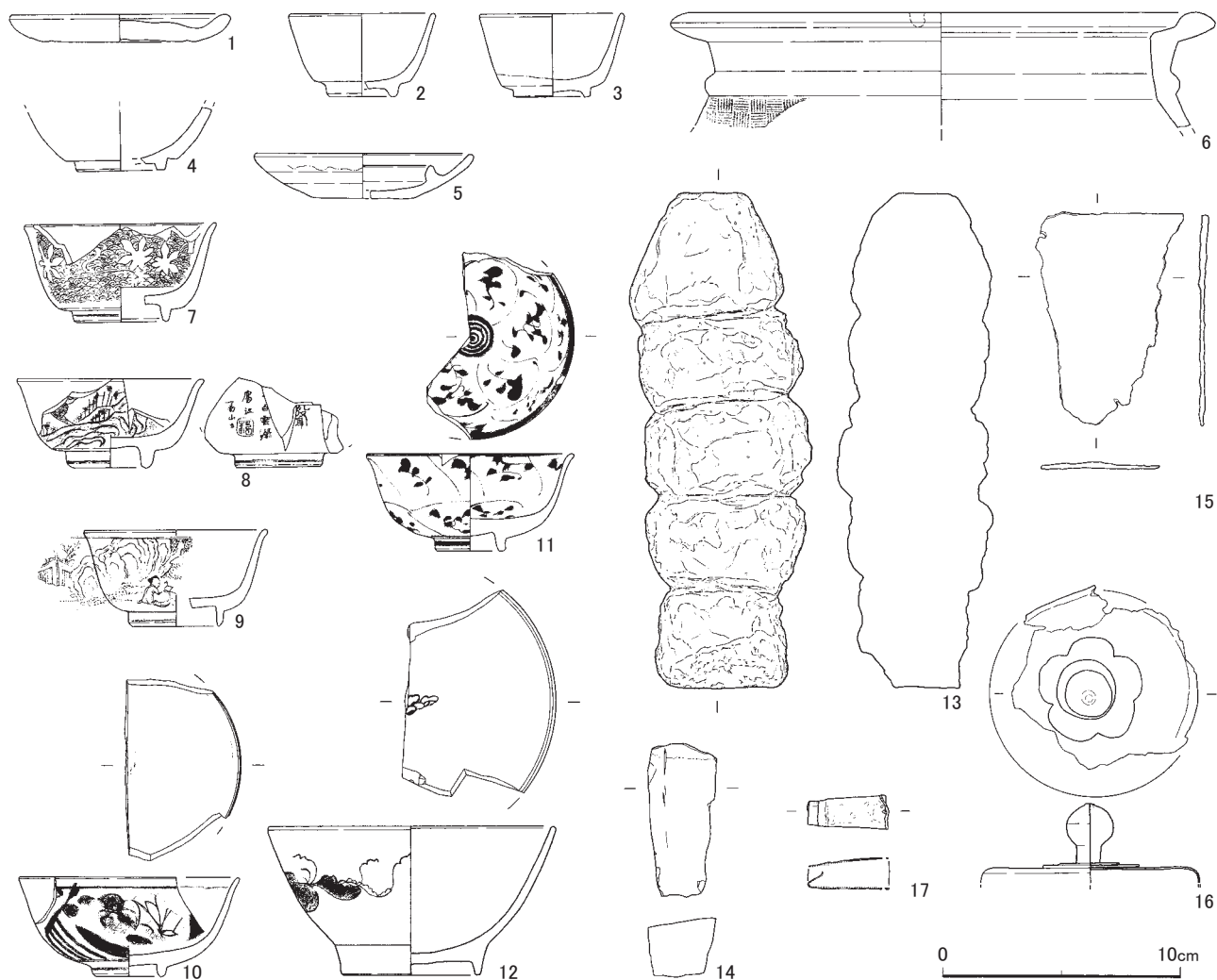


図14 表採および攪乱坑等からの採集品

5. 5面

溝2 (図13)

概要：山裾の岩盤とその表面に堆積した土との境目に形成された断面V字形の溝状の窪み 位置：X - 72 543.82 ~ - 72 545.30 Y (- 25 323.30) ~ (- 25 332.25) 規模：長さ (8.22) m × 幅141cm × 深さ73cm 底面標高：21.32m 平面形：不定形，東に向かって幅が広がる 断面形：V字形 主軸方位：N - 91° - W (西側3分の2) / N - 70° - W (東側3分の1) 充填土：図4に記載 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：山裾の排水溝の可能性はあるが、平面形・断面形とも不安定で、岩盤から土が剥がれた際にできたものである可能性もある。

5面出土遺物 (図13)：土師器甕 (1)

6. 表採および攪乱坑からの採集品 (図14)

土師器皿ロクロ種小型 (1)・関西系陶器小碗 (2・4)・関西系陶器小杯 (3)・瀬戸美濃陶器灯明受皿 (5)・瓦器火鉢 (6)・瀬戸美濃磁器湯呑碗 (7 ~ 11)・肥前系磁器広東碗 (12)・石製一石五輪塔 (13)・砥石中砥 (14)・鉄鍋 (15)・金銅製仏具蓋 (16)・金銅製筒形製品 (17)

(馬淵)

表1 出土遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	P.2	砥石	遺存長(7.2)cm 幅4.55cm 残存厚(0.9)cm 黄灰白色 側面に切出し痕 砥面1面 上野産砥沢砥 仕上砥になると思われるが砥面が剥離しているため不明
2	P.5	関西系陶器 小碗	口径(6.7)cm 回転ロクロ成形 胎土は黄灰色で良土 釉薬は内面～外面中部まで茶褐色の鉄釉 18cか?
3	P.6	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径(8.3)cm 回転ロクロ成形 胎土は灰白色で良土 釉薬は茶褐色の鉄釉が薄く施釉 18c後～19c前
4	P.8	堺 播鉢	底部片 輪積成形 胎土は赤橙色で長石・礫・白色粒子を含む 緻密 ヨコナデ 外面は二次焼成で煤付着 底部に離れ砂 内面に6条の櫛目 内面は使用により磨耗 18c頃
5	P.9	瀬戸美濃陶器 碗	底径(3.05)cm 右回転ロクロ成形 胎土は灰白色で良土 削り出し高台、露胎 釉薬は淡水青色で透明、気泡 施釉やや厚い 外面下部も一部露胎 18c
6	P.9	肥前系磁器 茶呑碗	底径(3.7)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 削り出し高台 染付 手描き 外面に竹、下部に圏線 内底部に二重圏線、五弁花 高台に圏線 18c後半
7	P.9	砥石 中砥	長7.9cm 幅2.35cm 厚1.7cm 黄灰白色 砥面4面 上野砥(小日向)
8	P.13	土師器皿 R種小型	口径(8.95)cm 底径(4.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 口縁部シメナデ 胎土は淡橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子を含む 近世
9	P.13	肥前系磁器 くらわんか碗	口径(9.6)cm 底径(4.2)cm 器高5.0cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面草花 高台外側二重圏線、中央に大明年製 波佐見系 18c後半
10	P.14	肥前系磁器 広東碗	口径(12.25)cm 底径(5.55)cm 器高7.1cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は精良堅緻 染付 内面上下部に圏線、底面に寿 外面に振子花 高台上部に釉切れ 焼接ぎあり 高台外側二重圏線、内面に上絵文字「山ノ内かくや」とあり、焼接ぎ職人による署名か? 有田か 1780～1810年
11	I区 1面上	肥前系磁器 茶呑碗	口径(7.0)cm 底径(3.2)cm 器高5.65cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 染付 コンニャク印判 外面に竹、外底面に折松葉・雨龍 内面口縁下三重圏線、底面圏線、中央に五弁花 18c後半
図6-1	土坑1	瀬戸美濃陶器 輪舎皿	口径(15.6)cm 底径6.5cm 器高4.05cm 右回転ロクロ成形 体部口縁下より回転ヘラ削り 付高台 胎土は灰白色で白色粒子を含む良土 釉薬は透明で薄い灰緑色、貫入 外面中央～高台露胎 内底面は蛇の目軸剥ぎ 連房式登窯編年第8小期のものに器形似 18c後半か
2	土坑1	肥前系陶器 皿	口径(11.3)cm 底径(4.2)cm 器高3.3cm 回転ロクロ成形 外面下位回転ヘラ削り 削り出し高台 胎土は淡橙灰白色の良土 内面は半透明で黄灰色の銅緑釉、外面中は透明釉で施釉 内面一部青灰色 内底面蛇の目軸剥ぎ 嬉野市内野山 18c前半
3	土坑1	瀬戸美濃陶器 袋物か	底径(3.5)cm 右回転ロクロ成形 付高台か 胎土は橙白色で良土 釉薬は透明で薄緑灰色、外面の施釉 18c代か
4	土坑1	瀬戸美濃陶器 小碗	底径(3.2)cm 回転ロクロ成形 付高台 胎土は橙白色でやや粗土 釉薬は薄黄灰色、貫入 外面に朱・薄緑の上絵、一部剥れている 高台露胎 18c代
5	土坑1	備前か 船徳利	胴部片 回転ロクロ成形 胎土は赤橙色で良土 胴部ハケナデ 内外面に鉄泥がかかる 外面は暗茶褐色の鉄系釉薬、ぼぼ剥れている 17c後半～18cか?
6	土坑1	肥前系磁器 碗	口径(11.2)cm 底径(4.6)cm 器高5.7cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面草花文 高台外側に二重圏線、内面に圏線 18c前半
7	土坑1	肥前系磁器 くらわんか碗	口径(9.9)cm 底径(4.4)cm 器高5.58cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面に船・山水画 高台外側二重圏線、内面に圏線・大明年製の崩れたもの 波佐見系 18c第2～3
8	土坑1	肥前系磁器 碗	口径(11.6)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 染付 外面は菊花重ねの間に格子 18c第4 上質
9	土坑1	肥前系磁器 くらわんか碗	底径(4.2)cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は灰白色で精良堅緻 染付 外面に雪の輪 高台側面に圏線、中央に大明年製 高台端部に重焼きの際の砂付着 波佐見系 18c後半
10	土坑1	肥前系磁器 小広東碗	口径(9.9)cm 底径(3.45)cm 器高5.6cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面は雪の輪・雪持ち笹 内面口縁下に二重圏線 内底面に二重圏線・源氏香 高台側面に二重圏線 波佐見ではない 1770年代
11	土坑1	肥前系磁器 くらわんか碗	底径(4.65)cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 高台中央に大明年製、側面に二重圏線 波佐見系 18c後半
12	土坑1	肥前系磁器 小杯	口径(6.55)cm 底径(1.8)cm 器高2.9cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 色絵 外面に赤上絵、しめ縄・羽子板 18c
図7-1	II区 1面上	瓦器 筒形製品	口径(9.2)cm 底径(9.3)cm 器高8.5cm 輪積成形 ヨコナデ 黒色処理 胎土は雲母・白色粒子・赤色粒子を含む 在地産
2	II区 1面上	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径(10.2)cm 底径(4.8)cm 器高2.05cm 回転ロクロ成形 外底部回転ヘラ削り 胎土は灰色で良土 茶褐色の鉄釉がかかる 内外底部に重焼き痕 18c後～19c前
3	II区 1面上	瀬戸美濃陶器 腰鏝碗	口径(10.0)cm 回転ロクロ成形 胎土は灰白色で良土 釉薬は内面～外面口縁下まで透明で薄灰緑色の灰釉、内面に貫入 外面下部は茶褐色の鉄釉 18c後
4	II区 1面上	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径7.8cm 底径4.0cm 器高1.5cm 右回転ロクロ成形 外底部・外面下部回転ヘラ削り 胎土は灰色で良土 釉薬は茶褐色の鉄釉 釉を指で広げた痕跡あり 内外底部に重焼き痕 18c後～19c前
5	落込み3	肥前系磁器 折縁皿	口径(13.9)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 釉薬は不透明で淡緑乳白色の青磁釉 17c後半 安価製品 波佐見
6	落込み3	肥前系磁器 折縁皿	口径(13.2)cm 底径(4.7)cm 器高3.6cm 左回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 釉薬は不透明で淡緑乳白色の白磁釉、青磁の可能性もあり 内底面は蛇の目軸剥ぎ 高台内面に重焼きの際の砂付着 安価製品 波佐見 17c後半
7	落込み4	瀬戸美濃か 陶器碗	底径(5.3)cm 回転ロクロ成形 削り出し高台、露胎 胎土は黄灰色で良土 釉薬は透明で黄灰白色、貫入あり 外面に模様は見当たらないが具須絵があるか 京焼風陶器 17c後半～18c初
8	落込み4	瀬戸美濃大窯 播鉢	口縁部片 輪積成形 ヨコナデ 胎土は橙灰白色 器表は暗褐色の鉄釉でザラついている 大窯第2段階あたりか
9	落込み4	肥前系磁器 小杯	口径(7.5)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 染付 外面は蘭のような植物文 17c後半

表2 出土遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
10	落込み4	肥前系磁器碗	口径(9.8)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 染付 釉薬に気泡多い コンニャク印判 外面に花・丸文 18c前
11	落込み4	肥前系磁器碗	口径(10.5)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 染付 外面にコンニャク印判で植物文、手描きで雨降文 有田 18c前半～享保くらいまで
図8-1	I区 1面下～2面上	肥前系磁器小碗	口径(7.9)cm 底径(2.95)cm 器高4.0cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 削り出し高台 染付 高台側面に二重圏線 外面上下に圏線、間に文 18c後半
2	I区 1面下～2面上	瀬戸美濃陶器 広東碗	口径(10.15)cm 底径(4.8)cm 器高5.9cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は灰白色で良土 呉須絵 内面上下に圏線、底面に五弁花 高台側面に圏線 19c前
3	I区 1面下～2面上	片刃ピシヤン	長11.65cm 幅2.9cm 厚1.2高cm 切り出した石を整形する道具 カタハとも
4	I区北西部 1面下～2面上	瀬戸美濃陶器碗	口径(12.6)cm 左回転ロクロ成形 体部外面下半回転ヘラ削りか 胎土は灰白色で良土 釉薬は透明で薄淡緑灰色の灰釉、貫入あり、施釉薄い 18c後～19c前か
5	I区北西部 1面下～2面上	肥前系陶器皿	底径(3.9)cm 回転ロクロ成形 体部下半回転ヘラ削り 削り出し高台 胎土は灰白色で精良土 釉薬は半透明で緑灰色の銅緑釉、一部青乳白色 内底面は蛇の目釉剥ぎ 高台露胎、重焼きの際の砂付着 嬉野市内野山 18c前半
6	I区北西部 1面下～2面上	瀬戸美濃陶器 輪禿皿	口径(19.3)cm 回転ロクロ成形 胎土は灰白色で良土 釉薬は透明で淡薄水青灰白色、貫入あり、内部中～外部中まで施釉 18c後半か
図9-1	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径(9.7)cm 底径(4.0)cm 器高2.1cm 回転ロクロ成形 外底部回転ヘラ削り 胎土は灰色で良土 釉薬は茶褐色の鉄釉 内底部に重焼き痕 18c後～19c前
2	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 鋳湯呑碗	口径(8.0)cm 底径(4.2)cm 器高5.7cm 回転ロクロ成形 付高台 胎土は灰白色で良土 内面～外面口縁下部まで黒釉、鉄泥塗る 回転施文具により施文 茶のみ用 19c前～中葉
3	遺物集中1	産地不明陶器 蓋	口径(11.1)cm 底径(5.7)cm 器高2.8cm 左回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で白色粒子を含む 内底面が隆起 鉄泥塗る 志戸呂から関東にかけての窯業地の製品 19c
4	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 灯明受皿	口径10.0cm 底径4.9cm 器高1.9cm 回転ロクロ成形 外底部・体部外面下位回転ヘラ削り 胎土は灰白色で良土 釉薬は茶褐色の鉄釉 18c後～19c前
5	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 香炉	口径(9.7)cm 底径(5.9)cm 器高3.5cm 回転ロクロ成形 胎土は黄灰白色で良土 黒褐釉 内面下部～底部露胎 三脚 キセル灰落としに転用か 17～18c
6	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 蓋	口径(6.0)cm 底径3.6cm 器高1.2cm 右回転ロクロ成形 外底部回転糸切り、露胎 胎土は橙灰白色で黒色粒子・赤色粒子を含む 上面は鉄釉、渦巻き文 肩衝小壺の蓋 17c中葉～18c代
7	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 擂鉢	口径(31.0)cm 輪積成形 胎土は黄灰白色で白色粒子・赤色粒子・長石を含む 内面に13条の櫛目 茶褐色の鉄釉 連房式登窯の第6小期 18c前半
8	遺物集中1	肥前系陶器 小型壺	口径(7.7)cm 回転ロクロ整形 胎土は淡橙色で白色粒子を含む良土 内外面に鉄泥 外面上部に化粧土・下部に鉄泥をハケ塗り後、上部に不透明で淡青緑の緑釉(銅)・下部に透明釉を施釉 内面は灰釉、上部は灰釉と鉄泥が重なり褐色になっている 唐津焼 17c後半
9	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 袋物	底径(7.8)cm 回転ロクロ成形 外底部回転ヘラ削りのち回転ナデ 付高台、露胎 胎土は黄灰白色で白色粒子を含む良土 釉は暗茶褐色の鉄釉 内底面に自然降灰 17c後～18c代
10	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 袋物	底径(12.3)cm 輪積成形のち回転ロクロ整形 外底部回転ナデ 付高台、露胎 胎土は橙灰白色で長石・白色粒子・礫を含む 内面に茶褐色の鉄釉 18c代か
11	遺物集中1	肥前系磁器 くらわんか碗	口径(9.7)cm 底径(3.7)cm 器高5.6cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面に雪の輪 高台内に文か 側面に二重圏線 18c第2～3 波佐見系
12	遺物集中1	肥前系磁器 くらわんか碗	口径(9.6)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 染付 外面に蚊屋吊草か・花卉か 波佐見系 18c中～末
13	遺物集中1	肥前系磁器 碗	口径11.2cm 底径4.7cm 器高5.7cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 内底面に目痕3ヶ所(脚付ハマ溶着痕) 染付 外面は菊詰 高台側面二重圏線 1780～90年頃
14	遺物集中1	肥前系磁器 広東碗	口径(10.4)cm 底径(5.0)cm 器高6.5cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面に竹・鳥か 内面上下部圏線 内底面小花 1820が下限か
15	遺物集中1	肥前系磁器 碗	底径(4.1)cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 嬉野辺りの可能性もある 染付 器表に気泡多い 外面に竹・草花文・雪持ち笹 高台側面に二重圏線、中央に渦福 18c前
図10-1	遺物集中 土坑	漆器 椀	口径(11.9)cm 底径(4.3)cm 器高4.0cm
図11-1	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 せんじ	口径(9.4)cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 胎土は灰白色で良土 茶褐色の褐釉と薄緑灰色の灰釉の掛け分け 18c中頃～後半
2	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 天目碗	口径10.8cm 底径4.0cm 器高6.55cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 胎土は黄灰白色で良土 内面～外面中部まで施釉 17c後半～18c初頭か
3	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 稜花皿	口径(12.1)cm 底径(7.3)cm 器高2.2cm 胎土は橙灰白色 釉薬は半透明で灰白色の長石釉、気泡・貫入あり、施釉厚い 大窯第4末～登窯第1小期くらいのものか 17c初頭
4	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 袋物	底径(5.4)cm 回転ロクロ成形 付高台、露胎 胎土は黄灰白色 釉は暗茶褐色の鉄釉 一部高台まで釉垂れ 18c後～19c初か
5	3面 包含層	肥前系磁器 くらわんか碗	口径(10.8)cm 底径(4.7)cm 器高5.5cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面に梅・雪の輪 高台側面に二重圏線 波佐見系 18c第2～3
6	3面 包含層	肥前系磁器 丸碗	口径(9.8)cm 回転ロクロ成形 素地は白色で精良堅緻 口鏝 染付 外面に丸文・蘭か 1680～18c初頭 1面落込み4と接合
7	3面 包含層	曲物底	径(17.2)cm 厚0.9cm
8	落ち込み1	関西系陶器 碗	底径3.25cm 回転ロクロ成形 削り出し高台、露胎 胎土は黄灰白色で良土 釉薬は透明で黄灰色、貫入あり 18c後か
9	落ち込み1	関西系陶器 土瓶蓋	最大径(9.9)cm 底径(6.7)cm 回転ロクロ成形 胎土は橙灰白色 内面は露胎 釉薬は不透明で淡青緑の銅緑釉、一部白くなっている 19c
10	落ち込み1	産地不明 陶器	胴部片 胎土は灰色で長石・白色粒子を含む 大型の袋物のような器形になるか

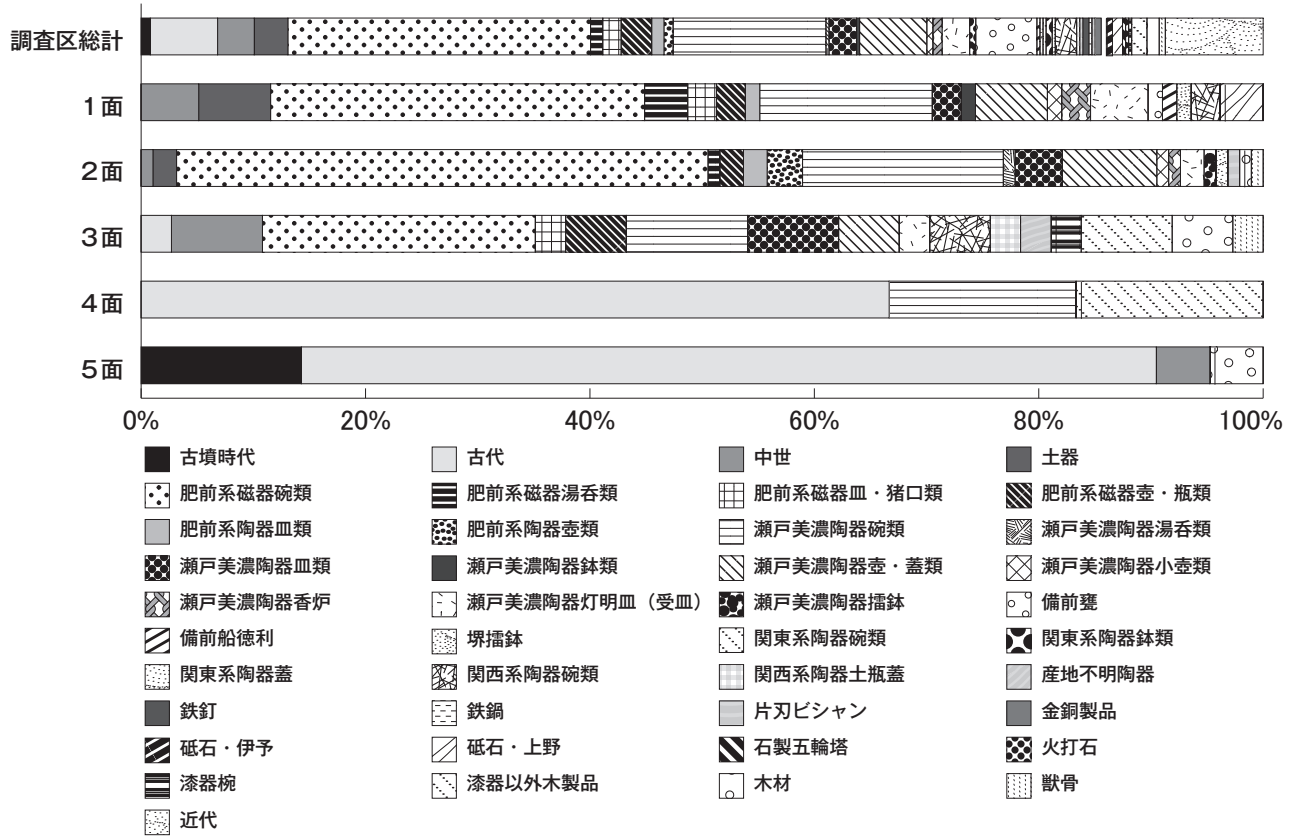
表3 出土遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図12-1	溝1	曲物底	径(15.2)cm 厚0.9cm 竹ないし木製釘により板と板をつないだ痕跡、修理痕の可能性も、蓋の可能性もある
図13-1	溝2	土師器 甕	肩部片 輪積成形 内面ヨコナデ 外面調整明瞭に見えず 胎土は淡橙色で雲母・長石・赤色粒子・礫・白色粒子を含む 古墳時代中期
図14-1	表採	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(5.0)cm 器高1.2cm 回転ロクロ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	攪乱	関西系陶器 小碗	口径(6.1)cm 底径(2.8)cm 器高3.55cm 回転ロクロ成形 削り出し高台、露胎 胎土は橙灰白色で精良土 釉薬は透明で淡黄灰色、貫入あり 18c代
3	攪乱	関西系陶器 小杯	口径6.0cm 底径2.25cm 器高3.55cm 右回転ロクロ成形 削り出し高台、露胎 胎土は橙灰白色で精良土 釉薬は透明で淡黄灰色、貫入あり 18c代
4	攪乱	関西系陶器 小碗	器高(3.6)cm 回転ロクロ成形 削り出し高台、露胎 胎土は黄白色で精良土 釉薬は透明で乳白色、貫入あり 18c後半
5	攪乱	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径(9.15)cm 底径(4.2)cm 器高1.9cm 回転ロクロ成形 外底部回転ヘラ削り 胎土は灰色で精良土 釉薬は茶褐色の鉄釉 外面に重焼き痕 18c後～19c前
6	攪乱	瓦器 火鉢	口径(21.6)cm 輪積成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で白色粒子を含む良土 黒色処理 外面胴部に押印 在地
7	攪乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径(8.05)cm 底径(3.8)cm 器高4.2cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 外面に葉・青海波 高台内外に圏線 銅版転写 明治末～大正
8	攪乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径(7.75)cm 底径(3.0)cm 器高3.8cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 高台内外に圏線 銅版転写 明治
9	攪乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径(7.7)cm 底径(3.7)cm 器高4.1cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 高台内外に圏線 銅版転写 明治末～大正
10	攪乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径(9.35)cm 底径(2.75)cm 器高4.25cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 銅版転写 外面に花草か 内面口縁下部に圏線 高台側面に圏線 明治
11	攪乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径(6.8)cm 底径(2.8)cm 器高4.15cm 回転ロクロ成形 削り出し高台、圏線 銅版転写 内外面に唐草 内底面に円圏 口縁下部に圏線 外底面に二重圏線 明治
12	攪乱	肥前系磁器 広東碗	口径(12.0)cm 底径(5.6)cm 器高6.4cm 回転ロクロ成形 削り出し高台 素地は白色で精良堅緻 染付 外面に瓢箪・蔓草 内底面に雲 広東碗では古手(高台広く、高い) 長崎県内の窯の可能性あり 1780～1810
13	攪乱	石製 一石五輪塔	長21.1cm 最大幅7.4cm 最大厚6.7cm
14	攪乱	砥石 中砥	遺存長(6.5)cm 遺存幅(2.9)cm 厚2.5cm 黄灰色 砥面2面 上野砥(小日向)
15	攪乱	鉄鍋	遺存長(9.0)cm 遺存幅(4.9)cm 厚0.3cm
16	攪乱	金銅製 仏具蓋	口径(9.3)cm ツマミ最大径2.1cm ツマミ高2.45cm
17	攪乱	金銅製 筒形製品	遺存長(3.5)cm 最大径1.6cm

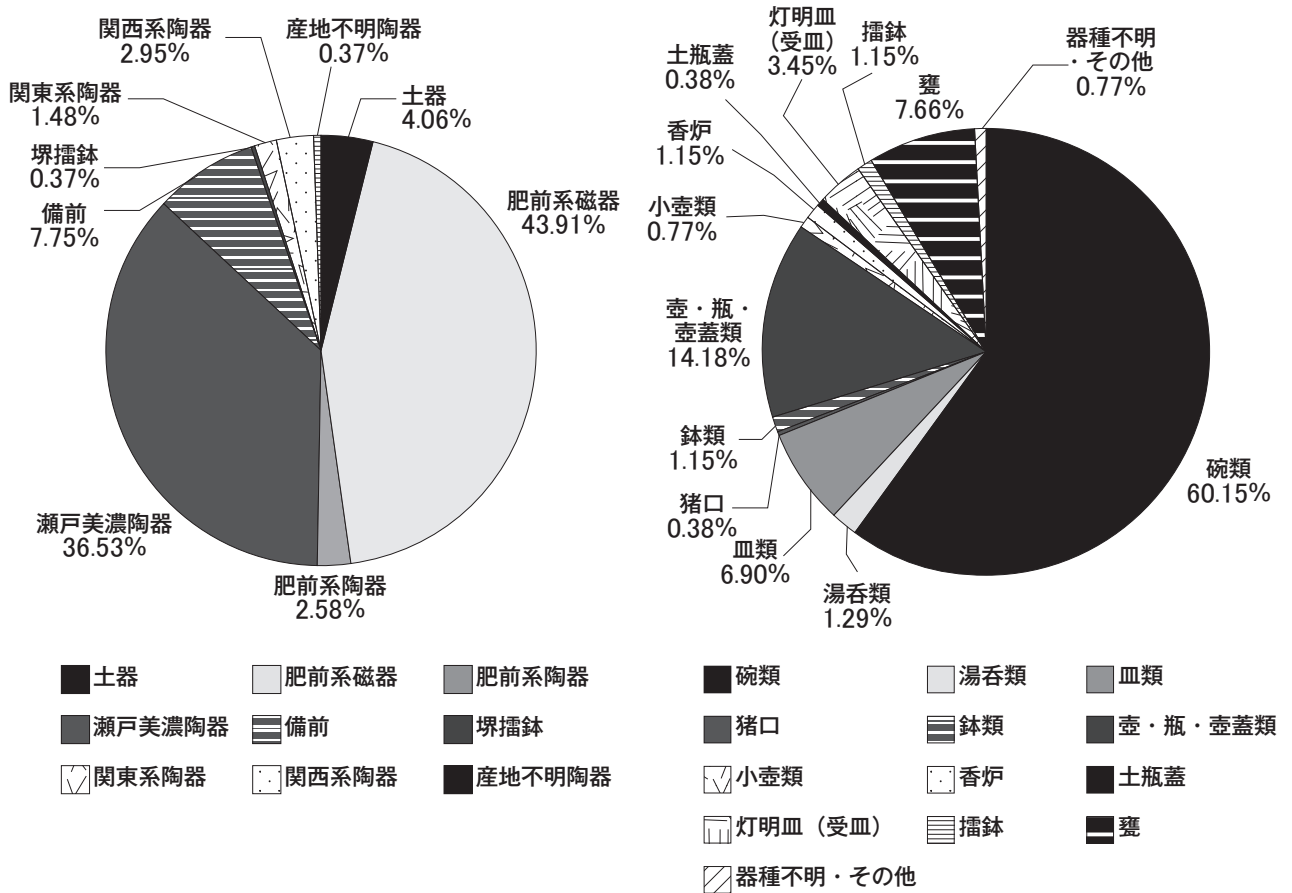
表4 遺物計量表(1)

				1面		2面		3面		4面		5面		総計	
古代以前	古墳土師器			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	14.29%	3	0.82%
	古代土師器			0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	4	66.67%	15	71.43%	21	5.72%
	須恵器			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	4.76%	1	0.27%
中世	土器	土師器皿	R種	1	1.28%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
	国産陶器	渥美・湖西	壺	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			磨耗陶片(甕)	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		常滑	甕	0	0.00%	0	0.00%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%
		瀬戸大窯	播鉢	1	1.28%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
	備前	播鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	4.76%	1	0.27%	
土器	土師器皿	R種	4	5.13%	2	2.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	9	2.45%	
	瓦質土器	火鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
肥前系	磁器	碗類	24	30.77%	39	41.05%	9	24.32%	0	0.00%	0	0.00%	88	23.98%	
		小杯類	2	2.56%	6	6.32%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	11	3.00%	
		湯呑類	3	3.85%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%	
		皿類	2	2.56%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	5	1.36%	
		壺類	1	1.28%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	1.63%	
		猪口	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
		瓶類	1	1.28%	1	1.05%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%	
	陶器	皿類	1	1.28%	2	2.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%	
		壺類	0	0.00%	3	3.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%	
		瀬戸美濃陶器	碗類	12	15.38%	17	17.89%	4	10.81%	1	16.67%	0	0.00%	50	13.62%
			湯呑類	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			皿類	2	2.56%	4	4.21%	3	8.11%	0	0.00%	0	0.00%	9	2.45%
			鉢類	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			壺類	4	5.13%	6	6.32%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	19	5.18%
小壺類	1		1.28%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%		
蓋	1		1.28%	2	2.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%		
備前	香炉	2	2.56%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%		
	灯明皿(受皿)	4	5.13%	2	2.11%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	9	2.45%		
	播鉢	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%		
	甕	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	20	5.45%		
	船徳利	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%		
	堺	播鉢	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%		
関東系陶器	鉢類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%		
	蓋	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%		
	碗類	1	1.28%	0	0.00%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%		
関西系陶器	小碗類	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%		
	土瓶蓋	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%		
産地不明	陶器	器種不明	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
金属製品	鉄	釘	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%	
		鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
	銅	片刃ビシャン	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
		金銅製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%	
石製品	砥石	伊子(仕上げ砥)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
		伊子(中砥)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
	その他	上野	3	3.85%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	1.36%	
		石製五輪塔	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
木製品	漆器	チャート(火打石)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
		碗	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
	漆器以外木製品	曲物	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	1	16.67%	0	0.00%	2	0.54%	
		柄杓	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
木材	竹筒	竹筒	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
		不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
	不明	板材	0	0.00%	0	0.00%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%	
		竹材	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
自然遺物	骨	角柱	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	4.76%	1	0.27%	
		獣骨	0	0.00%	1	1.05%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%	
近代	土器	土器質	碓炉	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			植木鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		瓦質土器	不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
	土製品	瓦	筒形製品	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
			人形	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	瀬戸美濃	型紙	平瓦	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
			皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			小杯	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		銅版転写	瓶類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			急須・土瓶	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			水滴	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	1.36%
	手描き	碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	
小杯		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%		
産地不明	磁器	器種不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%	
益子	土瓶	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	7	1.91%		
合計				78	100%	95	100%	37	100%	6	100%	21	100%	367	100%

表5 遺物計量表(2)



出土遺物種別構成比



近世土器・陶磁器産地別構成比

近世土器・陶磁器器種別構成比

第四章 変遷と年代—まとめ

安全面への配慮から調査は5面以下に及んでいないが、以下には平坦面がなく、また遺物や炭化物も含まれていなかったため遺構はないものと判断した。

1. 遺跡の変遷と年代

1期

第5面がこの地点の人的活動の面として最も早い時期となる。生活面らしい平坦面の形成はみられるものの、明瞭な遺構は観察できなかった。出土遺物は古墳時代の土師器1点のみで、詳細な年代は不明だが、以後の面の人的営為との連続性から、江戸中期以降のいずれかの時期と考えたい。

2期

第4面が相当するが、明確に遺構と認められるものを欠き、また出土遺物も木製曲物底のみなので、年代的決め手を得られない。ただし、後続の面との連続性から、これも江戸中期以降とみられる。

3期

平坦面上に大型の凝灰岩が散乱している。人為によるものか、自然の崩落によるものかは不明であるが、次代2面出土遺物中に石割りに使う工具が出土しているが、本調査地点の西側におけるやぐらの調査の際に石切跡が検出されており（鈴木ほか2000）、この石切跡と関連する可能性も考えられる。岩塊の脇には柄杓と竹筒、漆椀などがまとまって穴の中に入っており、水分補給に関係する何らの意味合いを受け取れる。包含層からの出土遺物には17世紀代まで遡りうるものもあるが、19世紀代のものも含まれており、18世紀中葉以降19世紀初頭と考えられる。

4期

2面が相当する。この面の時期になると多くの遺物に恵まれるようになる。面上には前代と同じように凝灰岩が散乱しており、連続性がうかがえる。またこの岩塊群中には多くの遺物が含まれており、近くに生活の場があることがうかがえる。年代は19世紀前半頃であろう。

5期

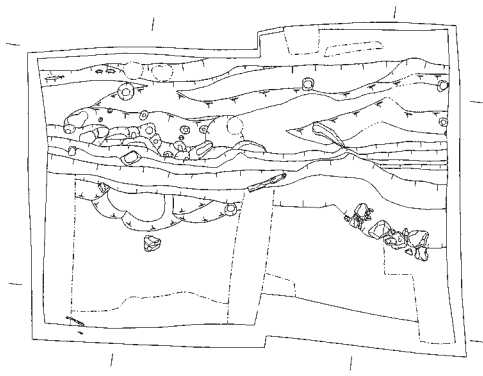
1面の時期が相当するが、遺構として明確に認められるものはそれほど多くない。年代は19世紀前半～中頃、すなわち江戸後期であろう。

2. まとめ

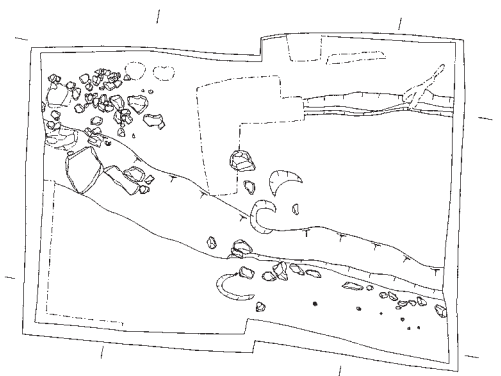
この地点での人的営為は決して濃密ではない。生活が始まるのは江戸中期以降、18世紀中葉以降とみていい。これは背後の山の中腹にある事業主T家の歴代墓地の墓碑年代と、ほぼ符合している。ということは、この地点での人の居住はT家によって始まったとみていいのではないか。ただ、本調査区において建物跡は明瞭に確認できなかった。

中世以前に関しては、少数ながら遺物が確認されたが、遺構は深掘りの確認坑においても確認できなかった。古墳中期の土師器や中世遺物の出土については、周辺の福泉遺跡や、福泉やぐらとの関わりが考えられるが調査事例が少ないため詳細は不明である。

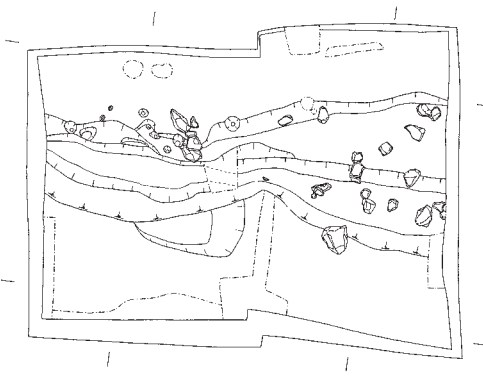
(馬淵・沖元)



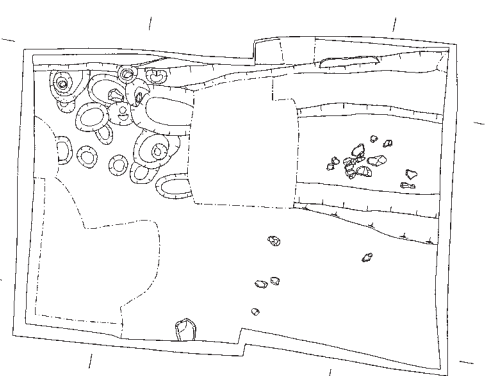
I期 (5面)



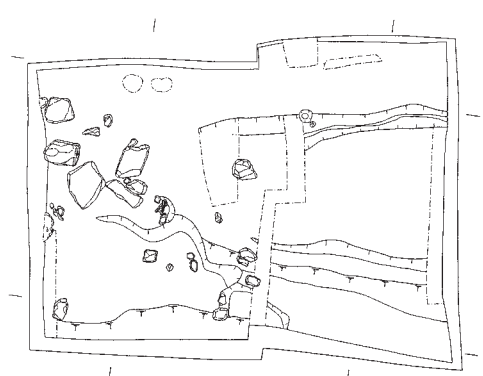
IV期 (2面)



II期 (4面)



V期 (1面)



III期 (3面)

图15 遺構変遷図



1-1. 調査地点遠景 (▼の下)



1-2. 調査地点北側 山腹近世墓所



1-3. 近世墓銘 (享保八年)



2-1. I区1面全景(東から)



2-2. I区1面全景(西から)



2-3. II区1面落込み4(西から)



2-4. II区1面全景(南から)

図版3



3-1. I区2面全景(西から)



3-2. II区2面全景(東から)



3-3. I区2面 遺物集中1(南から)



3-4. I区2面 遺物集中1・壺(図9-8)出土状況(南から)



4-1. I区3面全景(南から)



4-2. I区3面全景(西から)



4-3. II区3面全景(南から)



4-4. II区3面全景(東から)



5-1. I区3面 岩検出状況(南から)



5-2. I区3面 岩検出状況拡大
(南西から)



5-3. I区3面 遺物集中土坑(南から)



6-1. I区4面全景(南から)



6-2. I区4面全景(西から)



6-3. II区4面全景(南から)



6-4. II区4面全景(東から)



7-1. I区5面全景(西から)



7-2. I区5面全景(西から)



7-3. II区5面全景(南から)



7-4. II区5面全景(東から)



8-1. II区最終深掘り坑(南から)



8-2. II区東壁土層



9-1. I区東壁土層



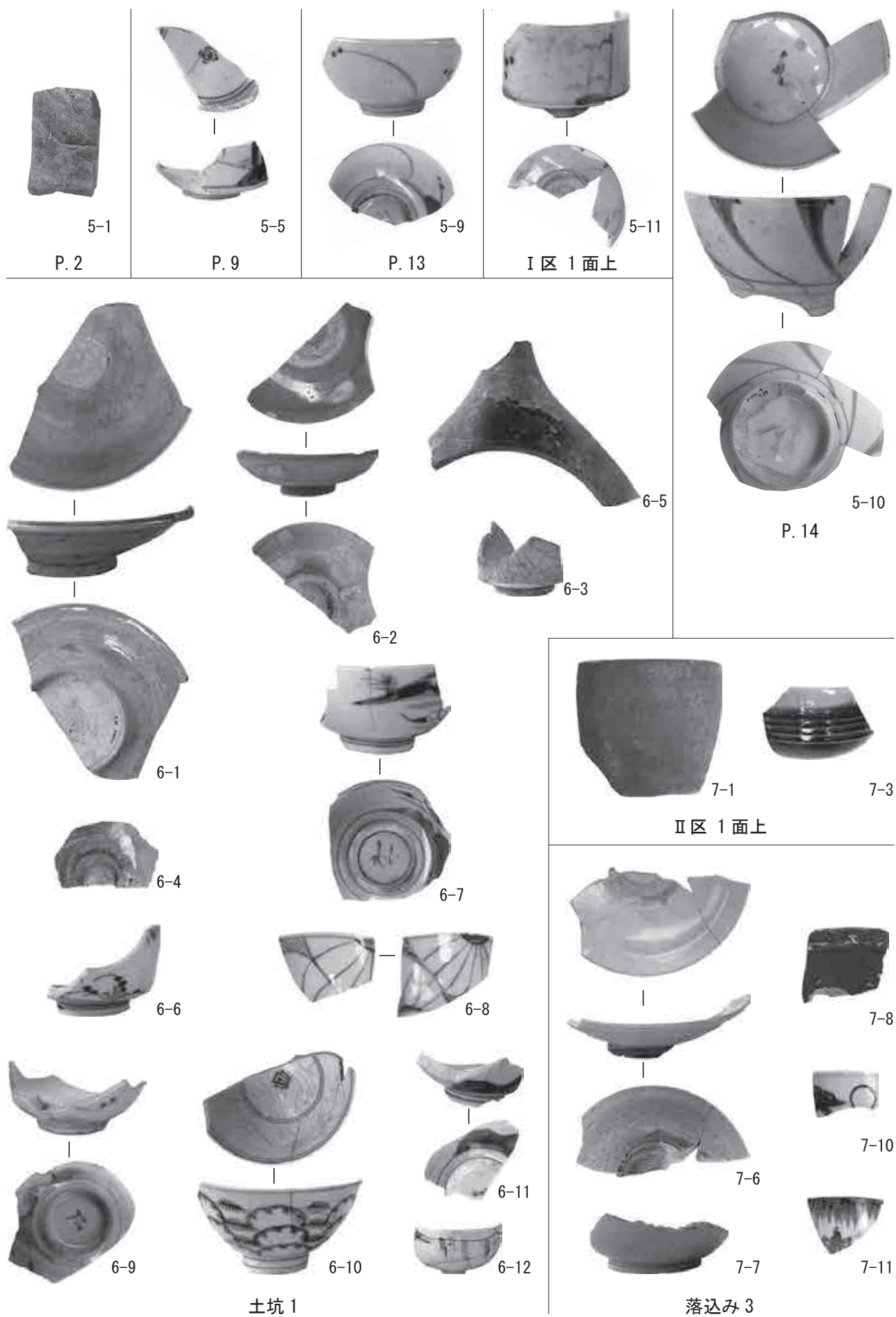
9-2. I区東壁土層

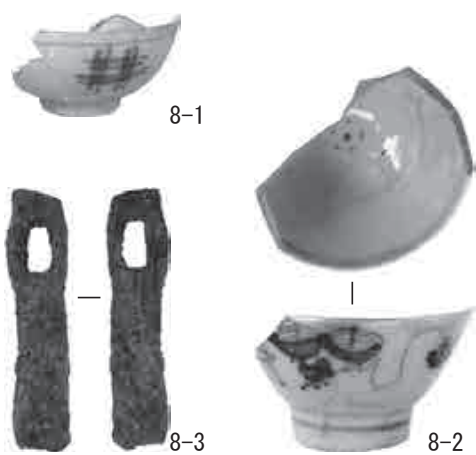


10-1. I区西壁土层

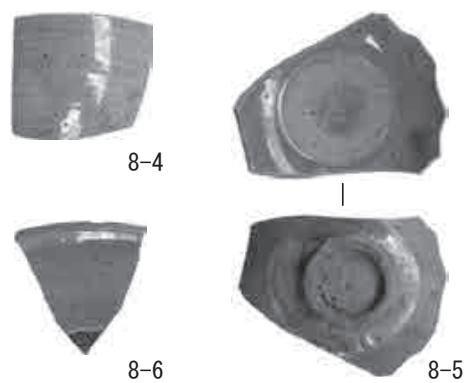


10-2. I区西壁土层

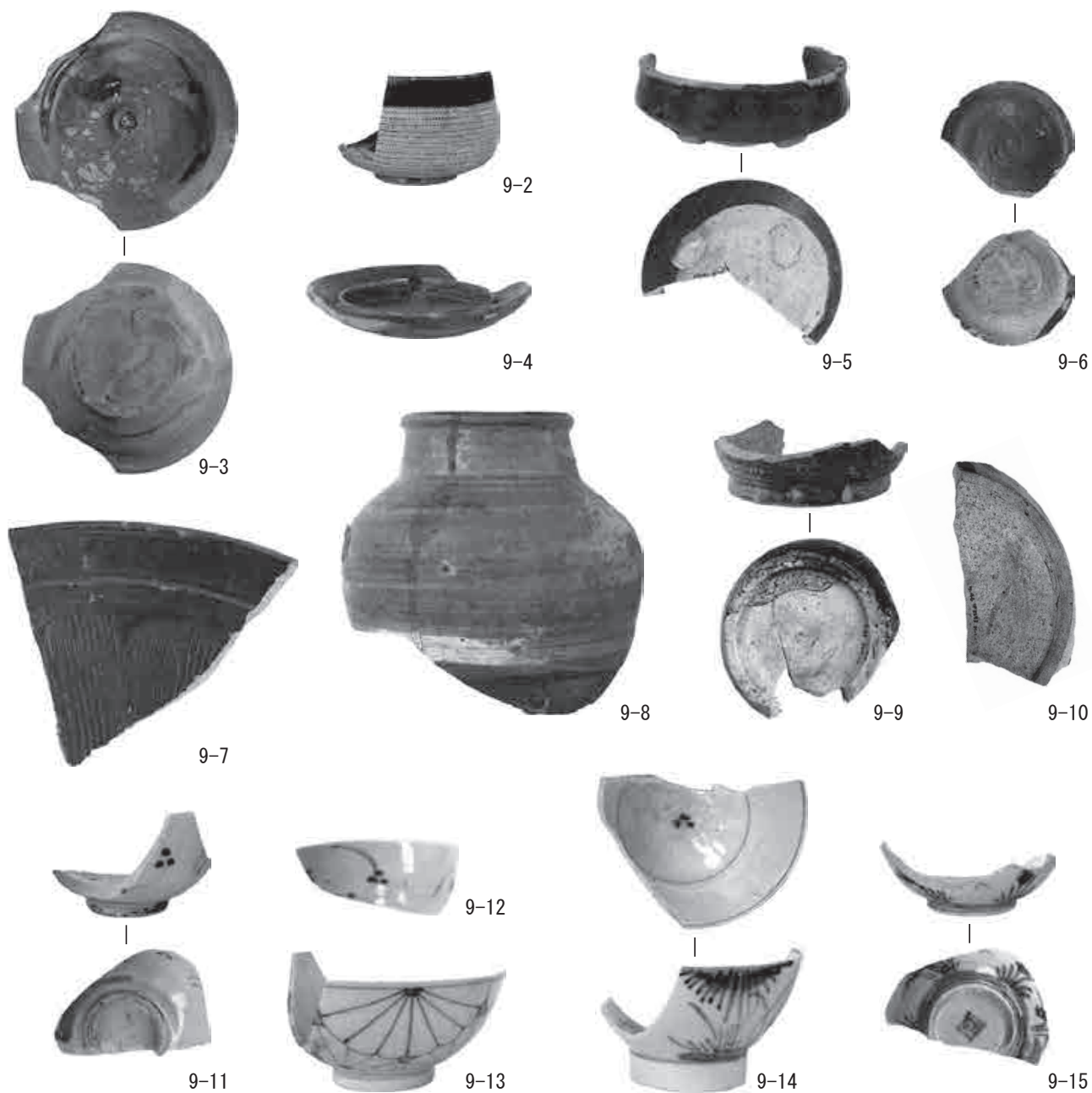




I 区 1 面下~ 2 面上

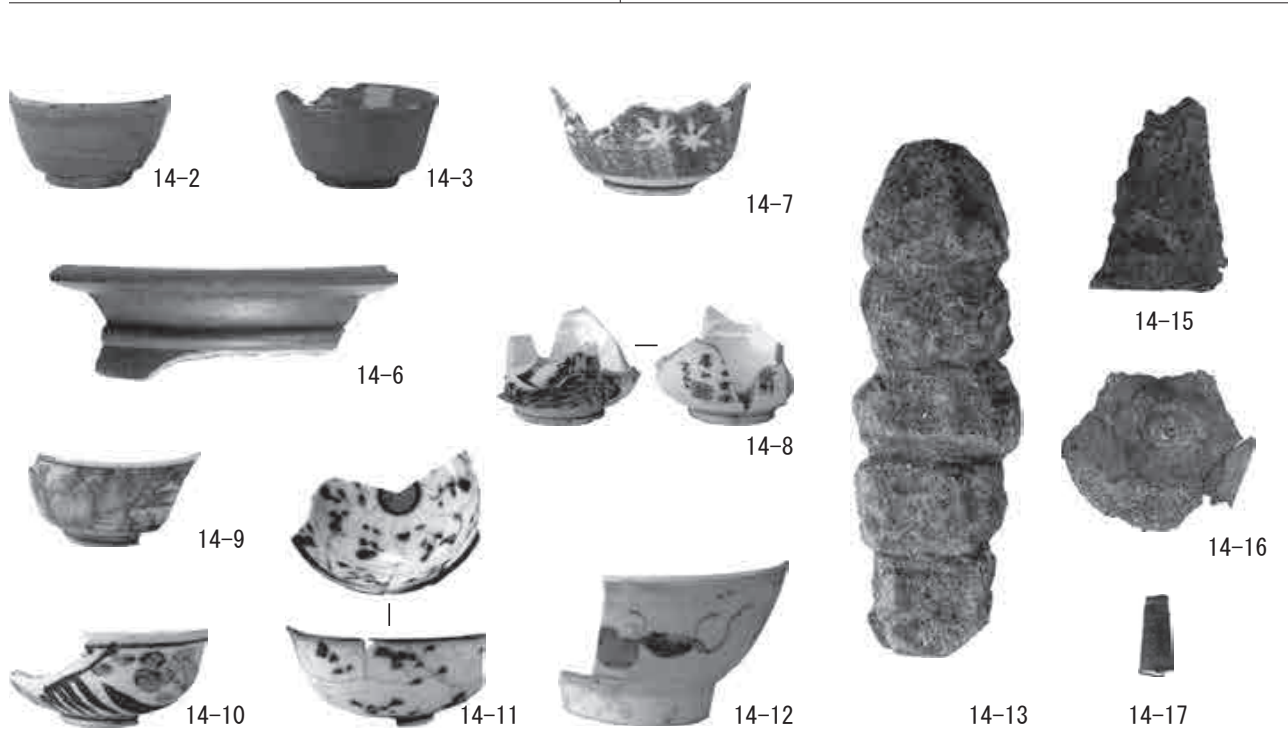
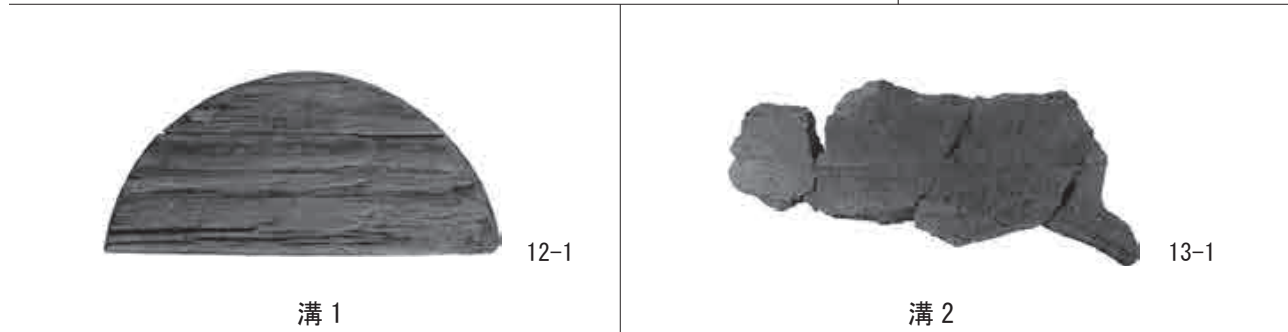
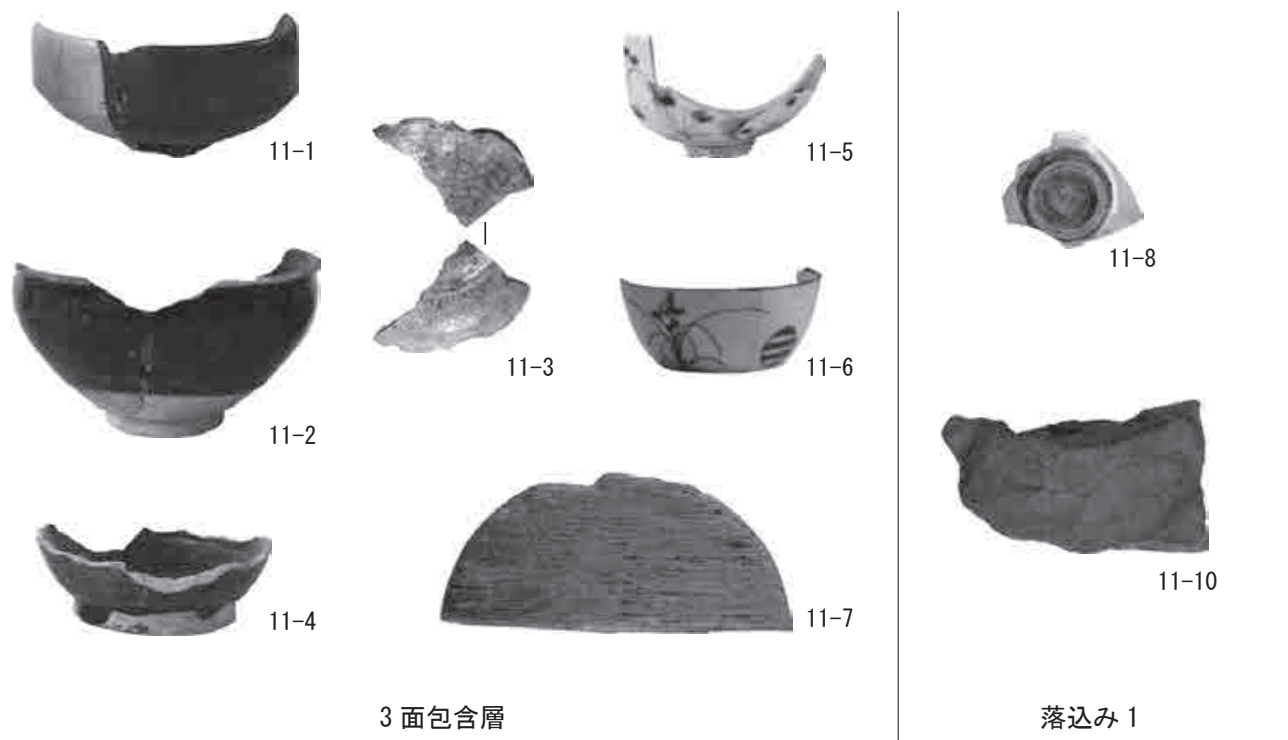


I 区 西北部 1 面下~ 2 面上



遺物集中 1

图版 13



攪乱

坂ノ下遺跡 (No.217)

坂ノ下 50 番 3 外地点

例 言

1. 本報は、鎌倉市坂の下50番3外地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は2008年8月13日から9月19日、調査対象面積は48.00㎡である。出土遺物・図面・写真等、調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。

調査の主体	鎌倉市教育委員会
調査担当	森孝子
現地調査参加者	渡辺美佐子・倉方尚子、安達越郎・片山直文・倉澤六郎・沼上三代治 (社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
資料整理参加者	松吉里永子・赤堀祐子

4. 本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

遺構図	1/60・1/40
遺物実測図	1/3

5. 整理作業は以下の分担で行なった。

遺構図版	森・赤堀
遺物図版	中世：松吉、古代：赤堀
観察表作成	中世：松吉、古代：赤堀
写真撮影	遺構：森、遺物：赤堀

6. 本書の執筆・編集は以下の分担で行なった。

第1章、第2章 第1節	森・赤堀
第4章 第1節	松吉
上記以外	赤堀
編集	松吉・赤堀

7. 現地調査・資料整理において以下の方々からご助言・ご協力を賜った。お名前を記して感謝致します。(敬称略・順不同)

樋泉岳二・萬年一剛・上本進二・松島義章・原廣志・馬淵和雄・福田誠・伊丹まどか・汐見一夫・押木弘巳・山口正紀・田畑衣理・沖元道

目次

本文目次

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	317
第1節 遺跡の位置と歴史の概要	
第2節 周辺の調査 (図1、表1)	
第二章 調査の概要	321
第1節 調査の経過	
第2節 グリッド設定・国土座標との合成 (図2)	
第3節 調査地の堆積土層 (図3)	
第三章 発見された遺構	325
第1節 中世第1面 (図4)	
第2節 中世第2面 (図5～6、表2)	
第3節 中世第3面 (図7～11、表3～5)	
第4節 古代の遺構確認調査 (図12)	
第四章 発見された遺物	334
第1節 中世の遺物 (図13～18、表7)	
第2節 自然遺物	
第3節 古代の遺物 (図19、表9)	
第五章 まとめ	351
第1節 中世	
第2節 古代	

挿図目次

図1 本調査地点と周辺の遺跡	318	図11 第3面ピット	331
図2 グリッド設定図	322	図12 古代遺構配置図	333
図3 調査地の堆積土層	324	図13 第1面出土遺物	334
図4 第1面遺構配置図	325	図14 第2面出土遺物	335
図5 第2面遺構配置図	326	図15 土坑1出土遺物	337
図6 土坑1、P1～3	327	図16 第3面出土遺物	338
図7 第3面遺構配置図	328	図17 第3面構成土出土遺物	339
図8 建物1	329	図18 表土・攪乱出土遺物、調査区内採集遺物	340
図9 柱穴列1	330	図19 古代の遺物	342
図10 溝1	331		

表 目 次

表 1 周辺の調査	319	表 6 軽石計測表	341
表 2 第 2 面ピット表	327	表 7 中世遺物観察表	344
表 3 建物 1 柱穴表	331	表 8 古代遺物観察表	348
表 4 柱穴列 1 柱穴表	331	表 9 中世遺物集計表	352
表 5 第 3 面ピット表	332		

図 版 目 次

図版 1	353	図版 5	357
A. 調査前状況（北東から）		A. 古代遺構確認面（北から）	
B. 表土掘削終了後（北西から）		B. 調査区南壁土層（北から）	
図版 2	354	図版 6	358
A. 中世第 1 面（南東から）		中世の遺物	
B. 2 面土坑 1（東から）		図版 7	359
C. 中世第 2 面（北東から）		中近世の遺物、古代の遺物	
図版 3	355	図版 8	360
A. 中世第 3 面（北から）		出土木製品・軽石・骨・果核	
B. 3 面溝 1（西から）		図版 9	361
C. 3 面上出土獣骨		出土骨	
図版 4	356	図版 10	362
A. 3 面建物 1（南から）		出土骨	
B. 建物 1 P 6（東から）			
C. 建物 1 P 8（東から）			

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と歴史の概要

本調査地は鎌倉市坂ノ下50番3外に位置し、坂ノ下遺跡内に包括されている。遺跡周辺には著名な神社仏閣が多く所在する。調査地北方約150mにある長谷寺は草創年次不詳であるが、文永元年(1264)七月十五日と銘文にある梵鐘が資料として最古であり、少なくとも鎌倉時代中期には成立していたと考えられている。調査地西方110mには鎌倉権五郎景政の廟社であるという御霊神社がある。遺跡北西の甘縄神明社は吾妻鏡に伊勢別宮とあるほか、源頼朝、政子、実朝が参詣したとの条、頼朝社殿修復の条があり、頼朝のころすでに在ったことが明らかである。鎌倉市史総説編では、鎌倉権五郎景政が大庭御厨の寄進主であることや、甘縄神明社の存在などから、周辺が大庭御厨の内であった可能性を指摘し、『吾妻鏡』治承四年十月十一日の記事を引いて、「北条政子が伊豆国の阿岐戸郷から鎌倉に入る前日、日和がよろしくないというので稲瀬川辺の民屋に止宿した」とあるのは、稲瀬川付近が鎌倉のうちでないことを記しており、この地が大庭御厨のうちであったことを物語っているとしている。

遺跡西方は切通を経て極楽寺に達する。極楽寺は忍性により開山された正元元年(1259)創建の真言律宗の古刹である。「坂ノ下」の地名は極楽寺坂の下に在るので、その名がおこったとされている。極楽寺の切通は忍性により開鑿されたといわれているが、確実な資料はない。『吾妻鏡』建長四年(1252)の記事で宗尊親王(鎌倉幕府第6代将軍)が稲村ヶ崎経由で鎌倉入りしていることから、切通の開鑿はそれ以後と考えられる。極楽寺の切通に関する史料の初見は貞和五年・正平四年(1349)頃刊行された『梅松論』の元弘三年(1333)の記事で、「(前略)其手引退て霊山の頂に陣を取。同十八日より廿二日に至るまで。山内小袋坂極楽寺の切通以下鎌倉中の口々。合戦のときのこえ矢さけび人馬の足音暫も止時なし。」である。

切通について直接語ったものではないが、極楽寺寺僧澄名が忍性没後七年後の延慶三年(1310)に記した『忍性菩薩行状略領』には永仁六年(1298)に「建立坂下馬病屋」とあり、元徳元年(1329)作という『極楽寺縁起』にも「構既於前浜坂ノ下村之前也、而飼養老病之牛馬、凡其数一千有余疋也」とあることから、この頃には極楽寺坂の切通があり、「坂ノ下」の地名があったと考えられる。極楽寺に残る古絵図はその図柄から室町末期ないし江戸初期のものであろうといわれるものだが、往時、塔頭四十九院を擁した七堂伽藍の寺容を伝えるもので、伽藍の周囲には忍性の慈善救済活動を示す、病宿・癩宿・療病院・施薬悲田院が描かれ、切通を経た西側には坂下馬病屋も見える。

中世の極楽寺坂切通は今日のように深く掘削されておらず、成就院の門前あたりを通っていたという。中世後期から近世にかけて切通に係わる工事等の記録はなく、切り下げ工事についての確実な記録は、大正十年に国の事業として行われたもの以降であるが、切通が姿を変えて現在に至っていることがわかる。『としよりのはなし』(鎌倉市教育委員会 1990年)の「坂ノ下」の項には時期は不明だが、「極楽寺坂がひろげられるについて、元のお堂(虚空蔵堂)がこわされちまって、大安斎の山を少しけずって、いまのお堂を建てた。」との記述がみえる。また、関東大震災のおりには崖面が崩落し交通が遮断されたことや、第二次世界大戦時には切通両側崖面に壕が掘られたことなどの記録がある。

近世以降の坂ノ下は16世紀末に徳川領となってからは天領、幕末になって大名に預けられて明治に及んでいる。万治二年(1659)の『金兼藁』には「坂下 山海村里之商賈、成市地也日極楽寺市、以有易無皆利奔、山王海産市声喧、若教孟母居斯処、樵叟漁翁豈耐厚煩」とあり、坂ノ下の繁栄ぶりが伺われる。また、鎌倉の村々の年貢を江戸に運送する際には坂下村から船で送るのが例であったという。(宝暦十年



図1 本調査地点と周辺の遺跡

(1760) 五月「相模国鎌倉分村柄書上帳」)

調査地東100mには四条山収玄寺がある。寺地は日蓮に深く帰依した四条金吾頼基の邸跡と伝えられ、『風土記候』には「今田畝トナル」とある。寺史は未詳だが、頼基の邸跡に妙詣尼のたてた収玄庵というお堂があったとされ、江戸後期には「相州鎌倉長谷村 収玄庵」として版本の四条金吾夫妻像が作成されるなど、相応に信仰されていたことが伺われる。ここに本堂を建立し寺に改めたのは大正12年で、施主は光則寺の三十一世日慈である。

表1 周辺の調査

	遺跡名 (県遺跡 No.)	地点	文献
1	坂ノ下遺跡 (No.217)	坂ノ下 50 番 3 外地点	本報収録
2		坂ノ下 53 番 3 の一部地点	汐見一夫・田畑衣理 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21』
3		坂ノ下 184 番 11 地点	熊谷満・降矢順子 2011『坂ノ下遺跡発掘調査報告書』
4	長谷観音堂周辺遺跡 (No.296)	長谷三丁目 7 番 5 地点	長澤保崇・田畑衣理 2008『長谷観音堂周辺遺跡 (No.296) 発掘調査報告書』
5		長谷三丁目 41 番イ地点	瀬田哲夫 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』
6		長谷三丁目 39 番 4 外地点	宗墓秀明・宗墓富貴子 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11』
7		長谷三丁目 658 番 1 地点	服部清道・玉林美男 1985『海光山慈照院長谷寺観音堂新築に関わる埋蔵文化財の調査』
8		長谷三丁目 81 番 (1 次・2 次)	1995 年調査 未報告
9			
10	由比ガ浜南遺跡 (No.315)	長谷二丁目 85 番 1 地点	櫻井真貴ほか 2004『かながわ考古学財団調査報告 164 由比ガ浜南遺跡』
11		長谷二丁目 122 番 9・10 地点	1989 年調査 未報告
12	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	長谷三丁目 633-2 の一部 他 7 筆番地点	瀬田哲夫 2007『長谷小路周辺遺跡 (NO.236) 発掘調査報告書』
13		長谷三丁目 641 番地点	2004 年調査 未報告
14		長谷一丁目 284 番 1 地点	玉林美男 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』
15		長谷一丁目 33 番 3 外地点	伊丹まどか 1998『長谷小路周辺遺跡 13』 伊丹まどか 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15』
16		長谷二丁目 252 番 1 地点	菊川英政 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
17		甘縄神社遺跡群 (No.177)	長谷一丁目 271-1 他 4 筆地点
18		長谷一丁目 271 番 10 地点	木村美代治・佐藤仁彦 1995『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書』
19		長谷一丁目 236 番 1 地点	1991 年調査 未報告
20		長谷一丁目 227 番地点	鎌倉市教育委員会 1983『伝安達泰盛邸跡』『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』
21		長谷一丁目 227 番 25 地点	馬淵和雄 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23』
22		長谷一丁目 227 番 24 地点	福田誠 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29』
23		長谷一丁目 262 番 14・15 地点	2010 年調査調査 未報告
24	桑ヶ谷療病院跡 (No.294)	長谷一丁目 630 番 17 地点	木村美代治・田代郁夫 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
25		長谷一丁目 630 番 1 地点	田代郁夫・原廣志 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
26		長谷三丁目 629 番 20 外地点	継実 1991『桑ヶ谷療病院跡の調査』『鎌倉考古 NO.20』
27	高德院周辺遺跡 (No.327)	長谷一丁目 290 番 1 地点	齋木秀雄・宗墓秀明 1989『長谷一丁目 290-1 地点遺跡』

第2節 周辺の調査 (図1、表1)

坂ノ下遺跡内での発掘調査の事例は少なく、中世以前のこの地の様子を伺えるまとまった成果は報告されていない。これまでに行なわれた調査は、本格的な発掘調査が2箇所(図1-地点2・3)、確認調査が3箇所(図1-▲印)である。

地点2では現地地表下約2m、最深部で海拔3.5mまで調査されたが、明確な中世遺構面あるいは遺構は見されていない。出土した遺物は貝・骨といった自然遺物が半数以上を占め、土器・陶磁器類は、ほとんどが小破片で、年代は近世を中心として15世紀後半から19世紀前半までのものとされている。

地点3では15世紀以降の中世期の痕跡は、江戸時代以降の耕作による削平のため存在はわからないとされている。耕作土下の調査では14世紀中葉から後半頃の遺物包含層下、海拔4.2m付近で13世紀末から14世紀前半頃の生活面が確認され、2基の土坑と、かわらけ溜まりが検出されている。それより下層は中世基盤層と考えられる砂層まで、中世の生活面と同様の時期の遺物を含む砂質土が70cmの厚さで堆積しており、土木工事による埋め立て土の可能性があるとされている。また、古代については、中世基盤層から7世紀後半から8世紀代にかけての土師器・須恵器が出土しており、遺構の検出はなかったも

のの海浜部における該期の活動を示す資料となっている。

確認調査では、地点Aで地表下約50cm前後から170cm前後の中世基盤層まで2～3時期の遺構面を確認、14世紀代を中心とした遺物が出土しているとされるが、他の2地点では近現代の攪乱層が深くまで及んでおり、遺物もほとんど出土していないとされている。(文献：地点2発掘調査報告書)

近隣遺跡の調査では本遺跡東側、海寄り地域の由比ガ浜南遺跡内の地点10で、木柵を伴う井戸址、集石状遺構、土坑などが、海拔3m～2mあたりに海側に傾斜して堆積する遺物包含層下層で確認されている。包含層中の遺物の年代は13世紀中葉から14世紀にかけてを主体とするとされており、発見された遺構群の年代も概ね一致するとされている。

北側の長谷観音堂周辺遺跡では、6箇所調査が行なわれている。

地点4では13世紀後葉から14世紀前半頃を中心と考えられる遺構が発見されている。確認された中世生活面は中世地山上面のみであるが、より上位の中世面は中世以降の削平により消失している可能性が考えられるとされている。

地点6では、関東大震災のあとかたづけが行なわれたゴミ穴、震災以前の幕末から明治にかけての建物跡、江戸前期から幕末までの水田跡など近世から近代にかけての遺構・遺物が多く発見されている。中世では稲瀬川の支流であった可能性のある河川跡が発見され、西隣の地点5の調査成果を合わせ、この時期の長谷寺前が西から東の川に向かい傾斜しており、そこに建てられた建物などの遺構は河川の流路と地勢に従ったものであったようだとし、現在の長谷寺参道との軸方向の違いを図示している。古代以前では地点5で竪穴住居址の可能性を持つものなど、比較的規模の大きい遺構の発見や、弥生式土器(宮ノ台式期以降)や、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代の遺物の出土が報告されている。

地点7は長谷寺境内の調査で、銅製観音菩薩像の出土や、納骨壺の発見など中世期の長谷寺における埋葬・信仰に関する資料が得られている。

地点8・9は1995年に調査が行われ、大型の掘柱建物址など中世期の遺構・遺物が多く検出されたほか、古代では水場の祭祀遺構等が発見されている。

【引用・参考文献】

- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
高柳光寿・貫達人 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
平凡社 1984「神奈川県地名」『日本歴史地名体系14』平凡社
鎌倉市教育委員会編 1990『としよりのはなし』
三浦勝男 1968『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第十五集 鎌倉国宝館

第二章 調査の概要

第1節 調査の経過

本調査は個人住宅建設に伴う事前調査として、2008年4月23日～24日の確認調査の結果に基づいて実施された。表土掘削は重機を使用して2008年8月8日・11日に行ない、廃土は場外に搬出した。発掘調査は8月13日に開始した。調査地は地下水位が高く、掘削調査に際しては湧水の対策が必要になったため、調査区壁下に排水溝を設置、釜場を設けて電動ポンプにより湧水を排出した。調査が進み調査区が深くなるに従い量を増す湧水には、排水溝、釜場を繰り返し掘り下げることで対処した。発掘調査中に掘り上げられる土の置き場は、調査地西側の一角を土嚢で囲い確保した。

調査では第1面から第3面まで3時期の中世面で遺構調査を行なった。検出された遺構は溝1条、土坑1基、建物1棟及び建物の一部と思われる柱穴列1列の他、ピット106口である。中世面の調査後は黒色粘質土層まで掘り下げ、古代の遺構確認調査を行なった。古代の調査では小円形のプランを20箇所を確認したが、調査対象となる深度に達していたため平面プランの記録作業のみを行なうにとどめた。その後、調査区壁の土層の記録作業を行ない発掘調査を終了。測量杭、土嚢の撤去、器材の搬出等を行ない9月19日に全ての作業を終了した。

遺物は、かわらけなどの土器・土製品、常滑・瀬戸などの陶器類、舶載磁器、石製品、木製品など中世期の遺物、及び土師器、須恵器、灰釉陶器などの古墳時代、奈良・平安時代の遺物のほか、軽石、獣骨が出土しており、総量はテン箱にして約5箱である。

以下に経過を記す。

2008年8月08日～11日	バックホーによる表土掘削。現地表（海拔5.3m）下60cmを目安として一気に掘り下げる。以下人力による発掘調査を実施する。
8月13日	器材搬入。
8月18日	中世第1面の調査開始。湧水対策のため排水溝を設置。
8月20日	中世第1面の写真撮影、測量作業。
8月21日	中世第2面へ面下げ開始。
8月26日	中世第2面西半の土丹地形ならびに遺構を確認。
8月28日	中世第2面の写真撮影、測量作業。鎌倉市3級基準点をトラバース。
8月29日	中世第3面へ面下げ開始。
9月02日	礎板を伴う柱穴検出。
9月05日	中世第3面の写真撮影、測量作業。
9月09日	古代遺構確認面へ面下げ開始。
9月11日	古代遺構確認面の写真撮影、測量作業。掘削深度（現地表下160cm）に達したため掘削作業終了。
9月12日	調査区南壁、西壁、北壁の土層図作成。
9月19日	調査終了。器材撤収。

第2節 グリッド設定・国土座標との合成 (図2)

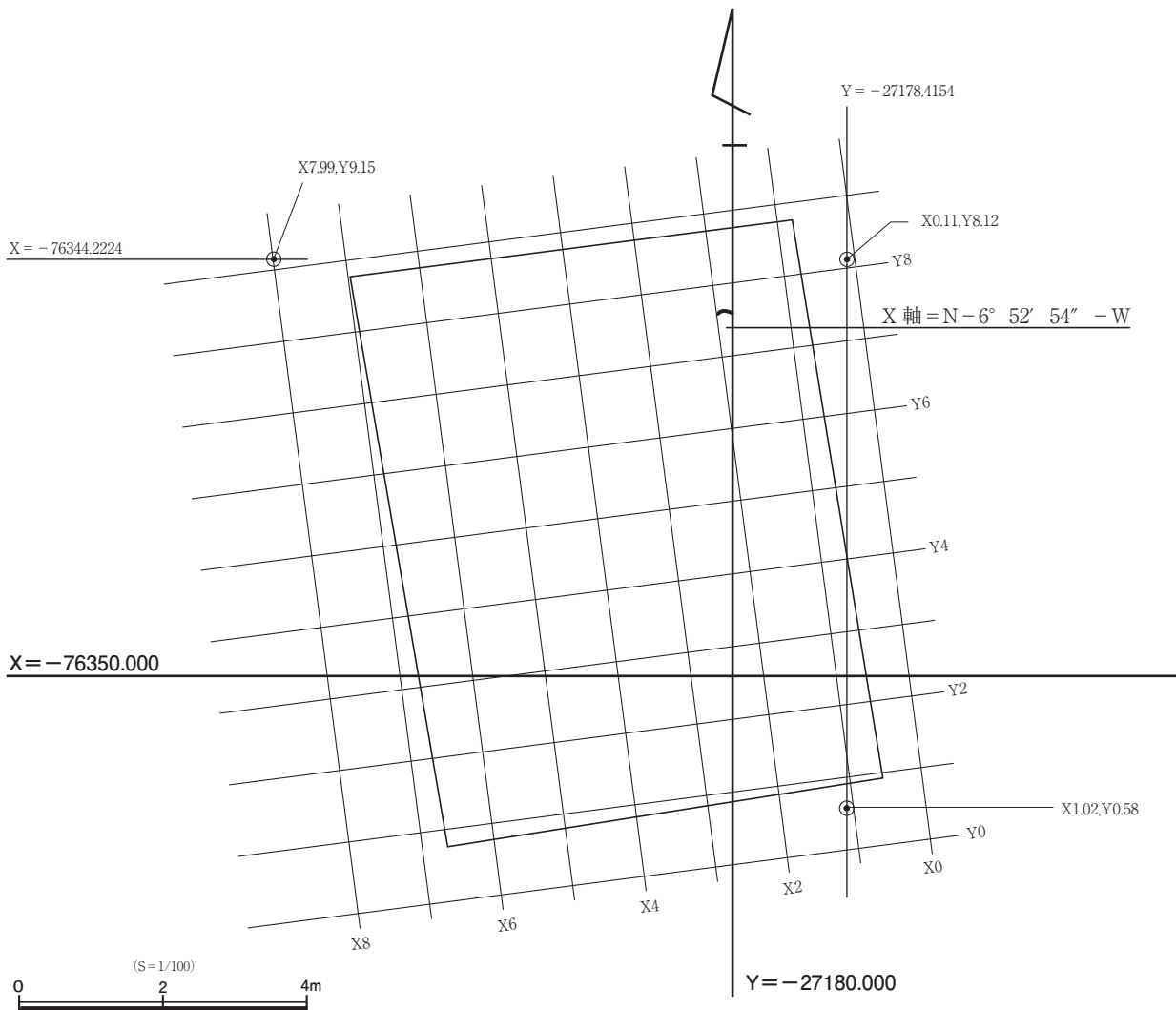


図2 グリッド設定図

測量は任意の調査グリッドを設定して行った。調査地内の南東隅に基準点(X0,Y0)を設置、南北方向をX軸、東西方向をY軸として、それぞれ北側・西側に向かい数値を増すグリッドを設定、測量の基準とした。国土座標値の移動は、トータルステーションを使用して調査員が行なった。測量作業には旧測地系(=日本測地系)の座標値を使用し、後日、測量成果を新測地系(=世界測地系)の座標数値に変換した。作業は鎌倉市4級基準点F083・F084の2点を使い以下の手順で行なった。トータルステーションをF083設置し、F084を既知点として、調査グリッドの国土座標値を測量した。調査地内で国土座標(旧測地系)のX=-76701上とY=-26885上にある点をそれぞれ求め、合成点として調査グリッドの数値を記録した。合成点の新測地系(世界測地系)へ変換後の数値はXが-76344.2224、Yが-27178.4154である。

図2に調査グリッドと国土座標(新測地系)との関係を提示した。X7.99,Y9.15が国土座標のX=-76344.2224上にあり、X1.02,Y0.58とX0.11,Y8.12が国土座標のY=-27178.4154上にある。調査グリッドのX軸は真北より6° 52' 54\"/>

第3節 調査地の堆積土層（図3）

遺跡の堆積土層は調査区の北壁・西壁・南壁で採取した。湧水処理のため調査区の壁下に排水溝を設けたため、図示した調査区壁の堆積土層は平面調査の検出状況とは合致していない。平面図には土層採集位置と中世1面（2面ほぼ重なる）・3面（4面ほぼ重なる）で平面的な調査が行なわれた範囲を図示した。1層は近現代の堆積土層である。2層は細かい土丹粒子を含む粘質土層で中世の遺物を包含している。3層は土丹粒子を混ぜ合わせた粘質土による地形層で、中世第1面を構成する。4層・4'層は灰茶色の砂質を帯びた土に土丹粒子を混ぜ合わせた層で、上面が中世の第2生活面となる。調査区南西側は土丹粒子を主体とする4層を基盤とする土丹地形面となるが、調査区の北側・東側は土丹粒子の量が少なく（4'層）比較的軟弱である。6層・7層は土壌化の進んだ砂質土層で、中世期の遺物を包含している。6層上面が中世の第3生活面である。5層は6層と同質の茶色砂質土を基調とし、土丹粒子などの含有物は4層のものに類似している。現地調査では遺構覆土として扱ったが、人為的な掘り込みというより、6層上面に4層の影響が及んだ自然的要因による浅い起伏の可能性が高いものと思われる。8層・9層は土壌化した粘質土層で古代の遺物を包含している。北壁土層(A-A')の8'層・8"層は8層と同質であるが、粘性やしまりなどに多少変化が見られ、少量の土丹粒子を含んでいる。8層から9層への変化は漸移的で、下位の9層ほど粘性・しまりが強い。調査では9層上面で、古代の遺構確認を行なった。9層下は排水処理の為に深掘した調査区北東隅と南西隅で、砂層が検出されている。北西隅は現地表下約1.8m（海拔約3.4m）で白色砂と青灰色砂が混在する層、南西隅は現地表下、約1.7mで青灰色砂層（海拔約3.5m）に達する。

土層説明

1層 表土層	現代の盛り土。上位は土丹版築、下位は黄茶色砂質土。
2層 灰茶色粘質土層	中世の遺物包含層。細かい土丹粒子を10%含む。
3層 灰茶色粘質土層	中世第1面構成土。細かい土丹粒子を30%含む。
4層 土丹地形層	中世第2面構成土。灰茶色弱砂質土に土丹粒子を70%含む。
5層 茶色砂質土層	6層を基調に土丹粒子・遺物片を多めに含む。
6層 茶色砂質土層	中世第3面構成土。土丹・炭をまばらに含む。粘性ややあり。しまりあり。
7層 灰茶色砂質土層	中世第3面構成土。土丹粒子・玉石を少量含む。6層より粘性が強く、しまりに欠ける。
8層 黒褐色粘質土層	暗灰青色砂をブロック状に含む。粘性・しまり強い。
9層 黒褐色粘質土層	古代遺構確認面。8層より粘性・しまりが強い。

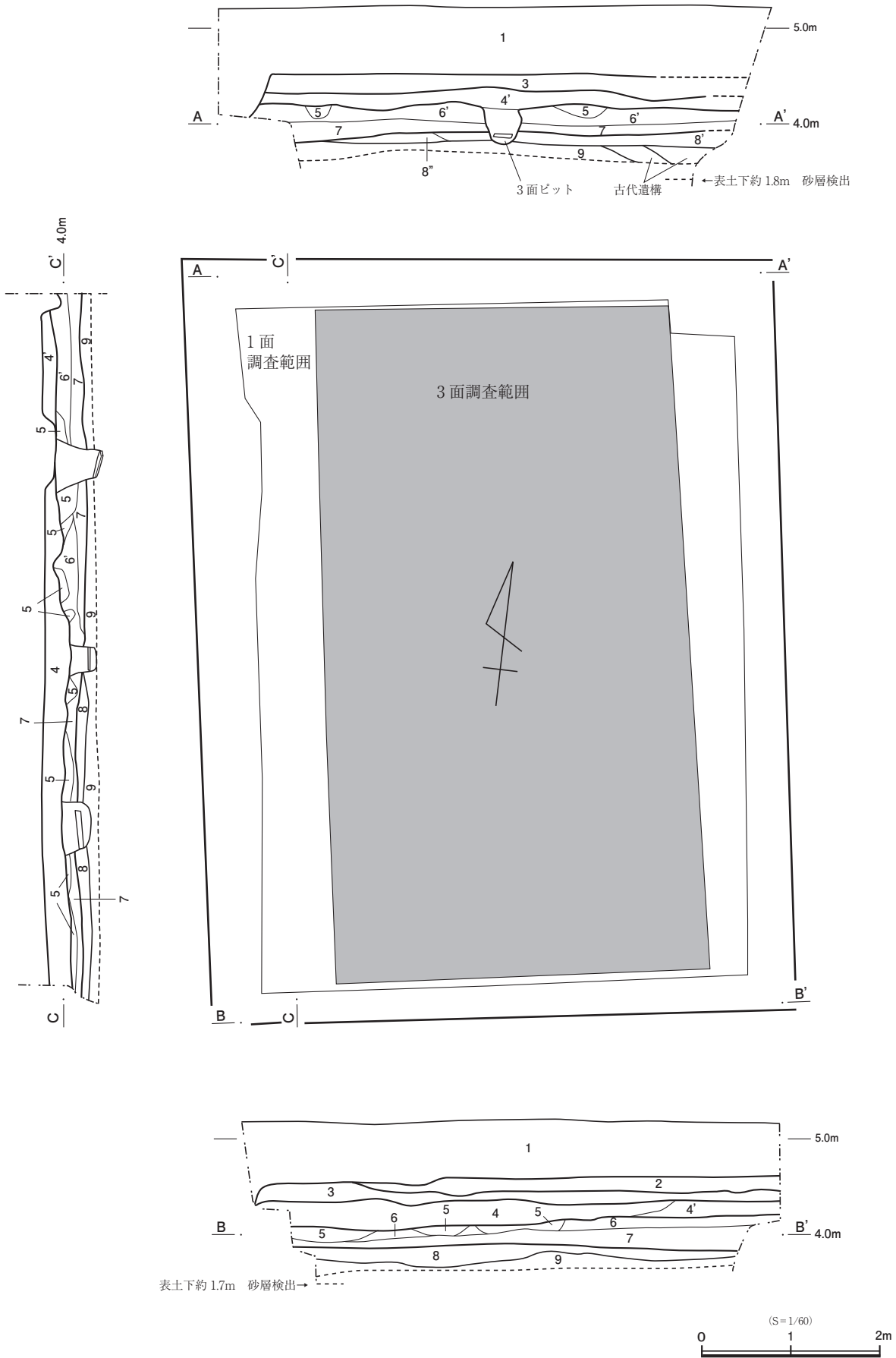


図3 調査地の堆積土層

第三章 発見された遺構

第1節 中世第1面 (図4)

中世の遺物包含層 (図3 B-B'2層) 下で検出された細かい土丹をつき固めた地形面である。海拔4.5～4.6mに位置し、良くしまっている。この面で確認された掘り込みはいずれも近現代のもので、中世の遺構は検出されていない。調査区壁の堆積土層 (図3) を見る通り、調査区南壁付近には本面上に遺物包含層 (図3-2層) が存在しているが、調査区北壁付近では遺物包含層の堆積はなく、本面は近現代層直下での検出となる。遺物包含層が存在しない部分では、生活面が近現代の造成により削平されている可能性もあり、中世期の遺構も失われているかもしれない。

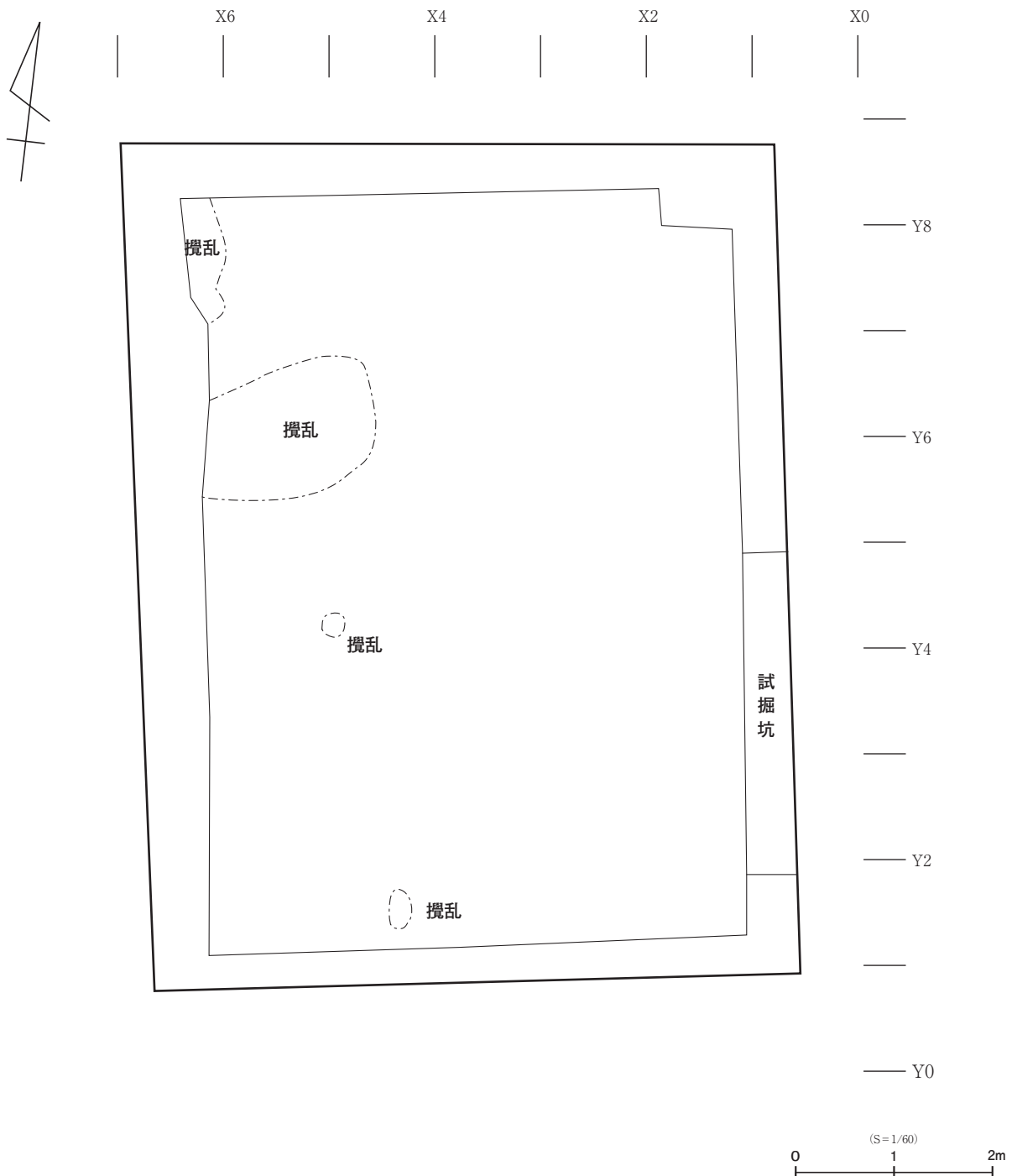


図4 第1面遺構配置図

第2節 中世第2面 (図5～6、表2)

海拔4.3～4.4mに位置する。調査区の南西側は細かい土丹をつき固めた層 (図3-4層) により構成される土丹地形面 (図中トーン部分) となるが、調査区の北側・東側は整地層 (図3-4'層) の土丹の量がまばらで、砂質土を主体とするやや軟弱な面となる。土坑1基、ピットが18口検出されている。

土坑1 (図7)

調査区北東側で検出、東側は調査区外に延びる。規模は長軸が129cmまで、短軸は100cmで、深さは35cmである。下端は整った方形を呈し、底面は平坦で標高3.98mを測る。

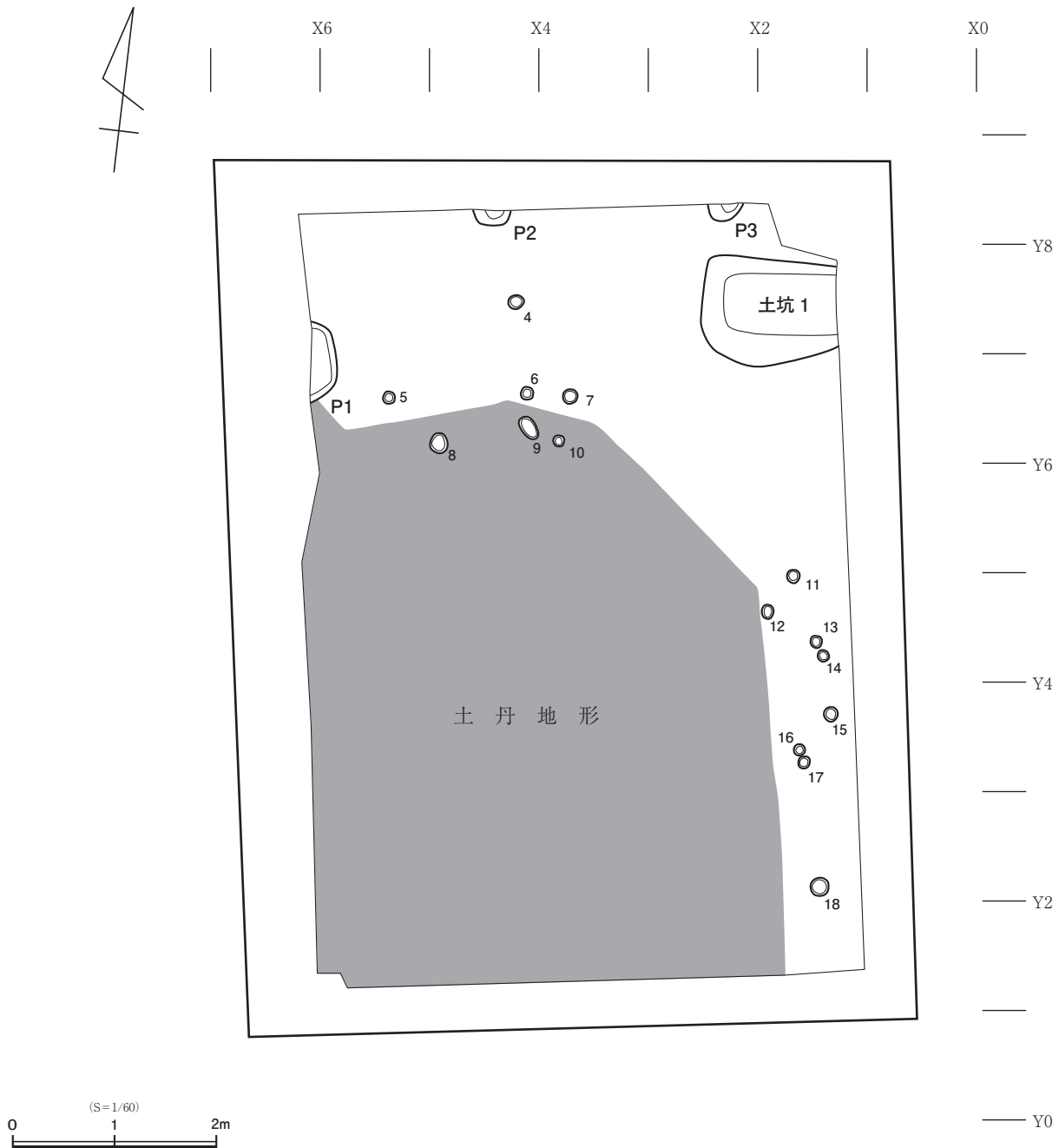


図5 第2面遺構配置図

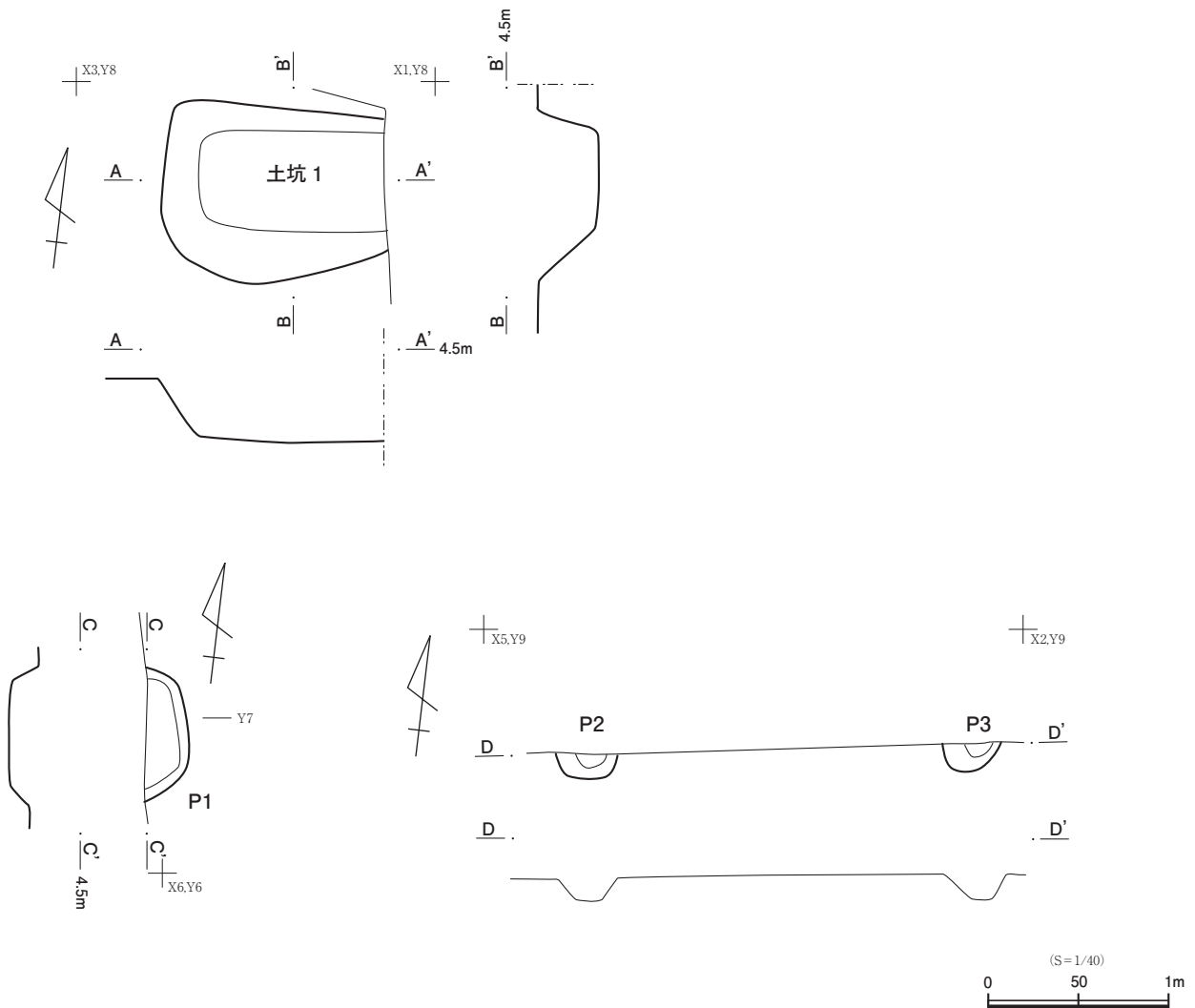


図6 土坑1、P1～3

表2 第2面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	73～×25～×15	4.11	P 10	9 × 8 × 5	4.27
P 2	34～×14～×13	4.16	P 11	12 ×12 × 3	4.28
P 3	32～×15～×14	4.18	P 12	13 × 9 × 4	4.28
P 4	13 ×12 × 4	4.27	P 13	10 ×10 × 5	4.26
P 5	8 × 8 × 2	4.21	P 14	9 × 9 × 3	4.27
P 6	10 ×10 × 3	4.29	P 15	12 ×12 × 3	4.24
P 7	12 ×12 × 3	4.29	P 16	10 × 9 × 3	4.27
P 8	18 ×16 ×11	4.16	P 17	10 ×10 × 4	4.27
P 9	22 ×13 × 3	4.29	P 18	16 ×15 × 3	4.27

ピット (図8・表2)

ピットは18口検出された。P1は規模が大きく、土坑の可能性もある。P2・P3は柱穴となり得る規模を持っている。調査区際で2口のみを検出のため、セット関係が成り立つものかどうかはわからないが、P2・P3間は掘り込みの中心での距離が220cm、並びの方向はN-83°-Eと3面検出の遺構に近い軸方向を示している。P2・P3については建物の一部である可能性を提示しておく。その他のピットは深さ5cm以下で、径20cmに満たない規模のものが多く、人為的な掘り込みと言えるかどうかかわからない。個々ピットの詳細は2面ピット表を参照されたい。

第3節 中世第3面 (図7～11、表3～5)

海拔4.0～4.2mに位置する。土壌化の進んだ茶色砂質土(図3-6・7層)を基盤とする生活面である。溝1条、建物1棟、柱穴列1列、ピット87口が検出された。その他、調査区南東側X3,Y3付近で馬の右上肢骨がまとまった状態で検出されている。(写真図版3-C)

建物1 (図8 表3)

9口のピットにより構成される南北3間、東西2間以上の建物である。北東側の2口、北西側の1口は調査区外のため検出されていない。P5は下の面(古代遺構確認面)で確認されたプラン(109)であるが、本址ピットの掘り込みを見逃したものと思われる。P7は柱穴といえる規模を持たず本址に含めるには

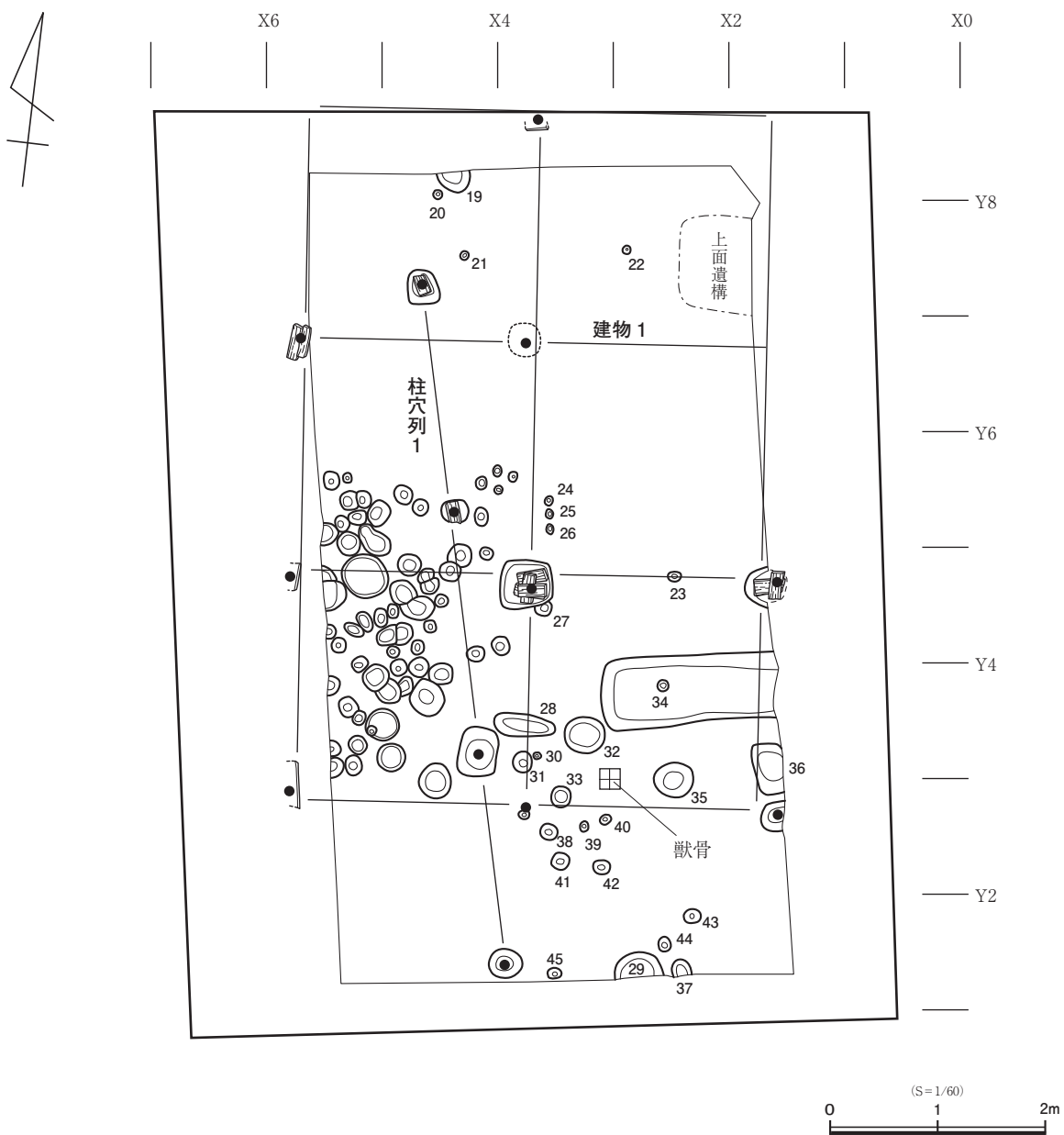


図7 第3面遺構配置図

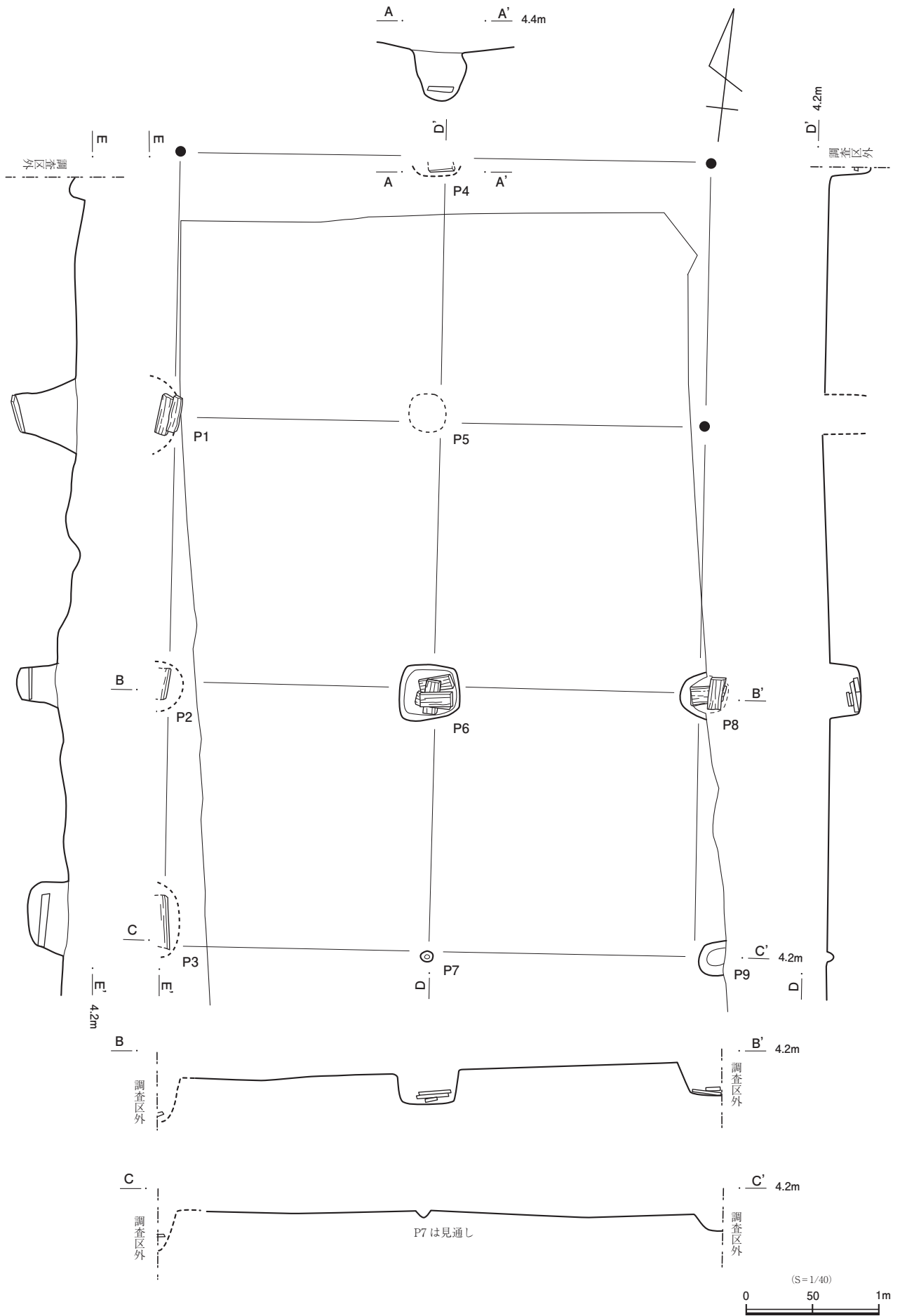


図8 建物1

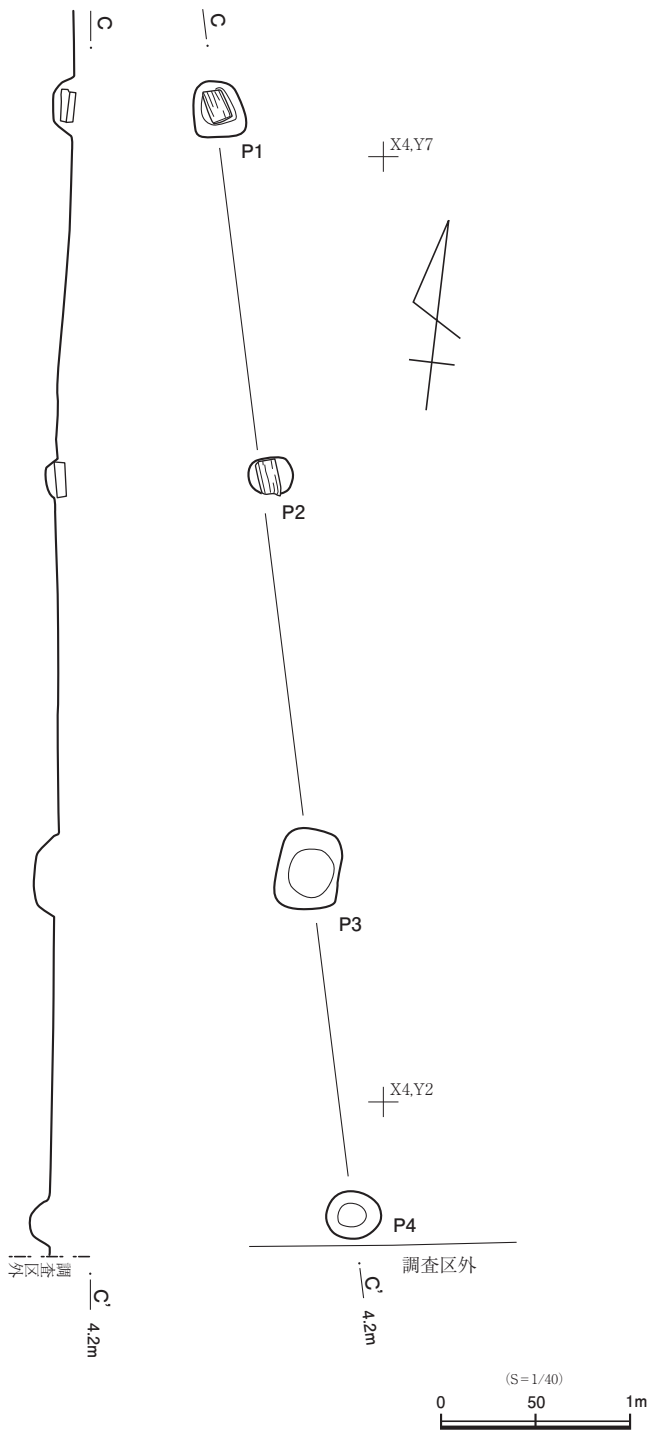


図9 柱穴列1

溝1 (図10)

調査区東壁際で検出、東側は調査区外に延びる。軸方向は $N - 81^{\circ} - E$ で、長さは158cmまで、幅は上端で59～63cmである。確認面からの深さは10cmだが、調査区壁の土層では21cmの掘り込みを確認できる。底面高は4.00m前後で一定している。

不安が残るが、周辺で他に該当するピットが見当たらない。建物の軸方向は $N - 6^{\circ} - W$ で、柱間距離はややばらつきがあるものの200cmを規格としていると思われる。礎板は西列P1～P3のものが揃って長軸を南北方向に向けて設置されており、建物の構造を知る手がかりになるかもしれない。覆土はいずれのピットも、粘性のある灰茶色から暗茶色土を基調とする単層で、柱痕は検出されていない。柱材を抜き取ったのち、一気に埋め戻されたものと思われる。礎板が検出され土層断面の記録の残るP1～P4については、礎板下に掘り方埋め土が遺存しているものと思われるが、抜き取り痕覆土との変化が乏しく分層がかなわなかった。柱穴の規模、礎板の寸法など個々のピットの詳細は建物1柱穴表を参照されたい。

柱穴列1 (図9・表4)

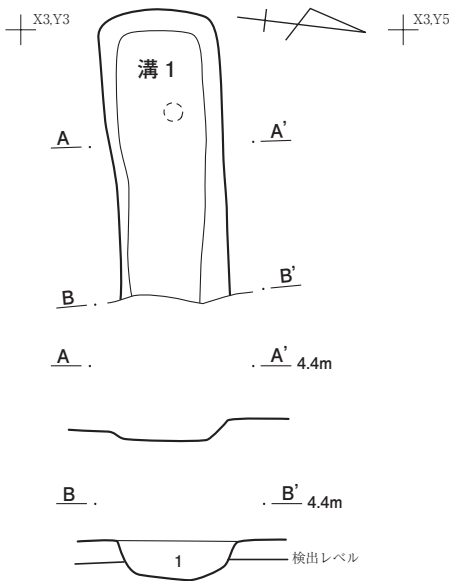
4口のピットにより構成される。列の東側では本址に含められる配置を持つピットは見出せないが、北側・南側・西側は調査区外にセット関係の成り立つピットが存在している可能性がある。本址は南北3間以上の規模を持つ建物の東列部分と思われる。列の軸方向は $N - 14^{\circ} - W$ を指し、柱間はP2～P3間が広く、P3～P4間が狭いもの、P1からP4までのおよそ600cmを3等分した200cmを規格にしていると思われる。柱穴の規模、礎板の寸法など個々のピットの詳細は柱穴列1柱穴表に記した。

表3 建物1柱穴表

No.	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P1	58 × ? × 52	3.57 (礎板上 3.70)
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。礎板2枚並ぶ。	
P2	34 × ? × 31	3.66 (礎板上 3.74)
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。	
P3	58 × ? × 32	3.72 (礎板上 3.87)
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。	
P4	34 × ? × 40	3.80 (礎板上 3.93)
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。	
P5	(30) × (29) × 32~	3.76 以下
	調査4面で確認。4面P109と同一。	
P6	46 × 33 × 24	3.81 (礎板上 3.94)
	礎板4枚重なる。	
	礎板実測値 (上から①~④)	
	①26.0 × 11.0 × 厚さ 1.7 cm	
	②28.0 × 10.5 × 厚さ 3.6 cm	
P7	8 × 7 × 3	3.97
	P8	35 × 35 × 26
礎板2枚重なる。礎板実測値：上 25.0 × 9.0 × 厚さ 3.0 cm 下 25.0 × 11.5 × 厚さ 2.5 cm		
P9	25 × 20 × 12	3.89

表4 柱穴列1柱穴表

No.	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P1	40 × 37 × 10	4.01 (礎板上 4.10)
	礎板2枚重なる。礎板実測値：上 16.0 × 9.0 × 厚さ 3.0 cm 下 18.0 × 10.0 × 厚さ 3.0 cm	
P2	24 × 20 × 5	3.97 (礎板上 4.06)
	礎板実測値：19.5 × 9.5 × 厚さ 6.0 cm	
P3	43 × 32 × 12	3.90
P4	29 × 24 × 9	3.89



溝1 土層説明

1層 暗茶褐色粘質土 1~5cm大の土丹粒子、かわらけ片・炭化物を含む。しまりあり。

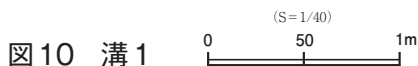


図10 溝1

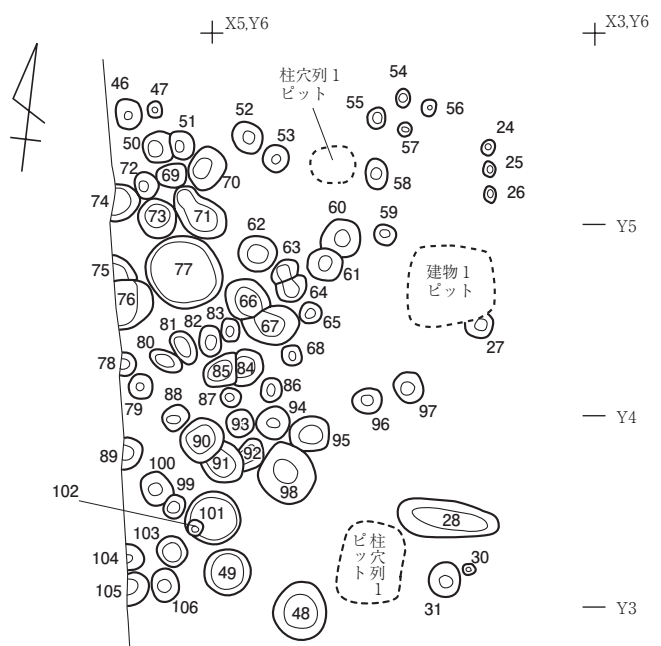
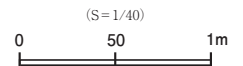


図11 第3面ピット



ピット (図8・11、表5)

建物を構成するもの以外に、87口のピットが検出されている。ピットが集中して検出された調査区西側、X3~5、Y4~5付近については、中世第3面遺構配置図 (図8) の他にスケールを換えた別図 (図11) を設けて示した。検出されたピットは深さが10cm以下や5cmに満たないものなどもあり、人為的な

掘り込みかわからないものも含まれている。意図的に掘り込まれた穴と捉えるより、建物の占有地内のある部分に検出される凹みの集合として考えるべきものかもしれない。個々のピットの詳細は3面ピット表を参照されたい。

表5 第3面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)	遺構名	長径 × 短径 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P 19	30~×18~×19	3.91	P 63	16 ×10~× 6	3.95
P 20	8 × 8 × 8	4.02	P 64	17 ×12~× 3	3.98
P 21	8 × 7 × 7	4.04	P 65	12 ×12 × 4	3.98
P 22	7 × 7 × 4	4.09	P 66	23~×21~× 8	3.92
P 23	12 × 8 × 6	4.05	P 67	30 ×22 × 8	3.92
P 24	8 × 7 × 3	4.03	P 68	11 ×11 × 6	3.94
P 25	8 × 6 × 3	4.03	P 69	16 ×13 × ?	-
P 26	8 × 6 × 3	4.03	P 70	23 ×19 × 5	3.95
P 27	14 ×13~× 6	3.97	P 71	33 ×20 × 7	3.93
P 28	54 ×19 × 9	3.94	P 72	14 ×12 × 6	3.93
P 29	42~×22~×12	3.90	P 73	21 ×20 × 8	3.91
P 30	6 × 6 × 4	3.98	P 74	20~×14~× 6	3.93
P 31	18 ×16 × 5	3.97	P 75	14~×12~× 6	3.93
P 32	34 ×30 ×17	3.87	P 76	26~×20~× 6	3.93
P 33	17 ×17 × 5	3.97	P 77	41 ×37 × 4	3.95
P 34	10 ×10 × (15)	3.93	P 78	12~× 8~× 6	3.94
P 35	35 ×30 ×13	3.85	P 79	14 ×12 × 5	3.95
P 36	45 ×26~×21	3.83	P 80	18 ×10 × 5	3.95
P 37	17~×14~× 4	3.96	P 81	18 ×12 × 8	3.92
P 38	14 ×14 × 4	3.97	P 82	17 ×13 × 6	3.94
P 39	9 × 7 × 5	3.97	P 83	13 ×10 × ?	-
P 40	9 × 7 ×10	3.92	P 84	20 ×14~× 3	3.97
P 41	15 ×14 × 3	3.98	P 85	17~×17~× 3	3.97
P 42	15 ×13 × 8	3.92	P 86	14 ×12 × 3	3.98
P 43	12 ×12 × 3	4.29	P 87	11 ×11 × 3	3.98
P 44	13 ×10 × 4	3.95	P 88	14 ×12 × 4	3.96
P 45	12 × 9 × 8	3.91	P 89	17~×10~× 7	3.93
P 46	16 ×14 × 4	3.93	P 90	22 ×21 × 8	3.92
P 47	9 × 8 × 3	3.94	P 91	20~×20 × 3	3.97
P 48	30 ×27 × 4	3.96	P 92	14~×15 × 3	3.97
P 49	24 ×22 × 3	3.97	P 93	14 ×14 × 4	3.96
P 50	18 ×17~× 4	3.90	P 94	17 ×16 × 4	3.96
P 51	16 ×12~× 5	3.89	P 95	21 ×18 × 7	3.94
P 52	18 ×16 × 2	3.97	P 96	15 ×14 × 2	4.00
P 53	14 ×14 × 5	3.96	P 97	16 ×14 × 7	3.95
P 54	10 × 7 × 3	4.02	P 98	32 ×28 ×11	3.89
P 55	12 ×10 × 5	3.99	P 99	12 ×11 × 3	3.97
P 56	8 × 7 × 3	4.01	P100	17~×16 × 8	3.92
P 57	7 × 7 × 3	4.01	P101	30 ×28 × 3	3.97
P 58	16 ×12 × 7	3.95	P102	8 × 8 × 8	3.92
P 59	11 ×10 × 5	3.96	P103	16 ×15 × ?	-
P 60	20~×20 × 7	3.94	P104	13~×10~× 5	3.95
P 61	18~×18 × 4	3.99	P105	18~×12~× 3	3.97
P 62	20 ×19 × 6	3.95	P106	17 ×14 × 4	3.96

第4節 古代の遺構確認調査 (図12)

古代の遺構確認調査は黒褐色粘質土 (図3-9層) 上で行なった。20箇所でピット状の痕跡を検出したが調査対象深度に達したため掘削調査は行わず、平面プランを記録するに留めた。プラン109は中世面で見逃された掘り込みと考えられるもので、建物1の柱穴・P5として中世第3面で報告している。その他プランにも中世面からの掘り込みが含まれているかもしれない。古代の遺構である可能性が高いものとしては、調査区北壁土層で比較的規模の大きい落ち込み (図3・12-10・11層) が確認されている。覆土はいずれもしまりに欠ける黒灰色粘質土で、10層は多くの古代遺物と玉石を含み、11層は径10cmの土丹を含んでいる。

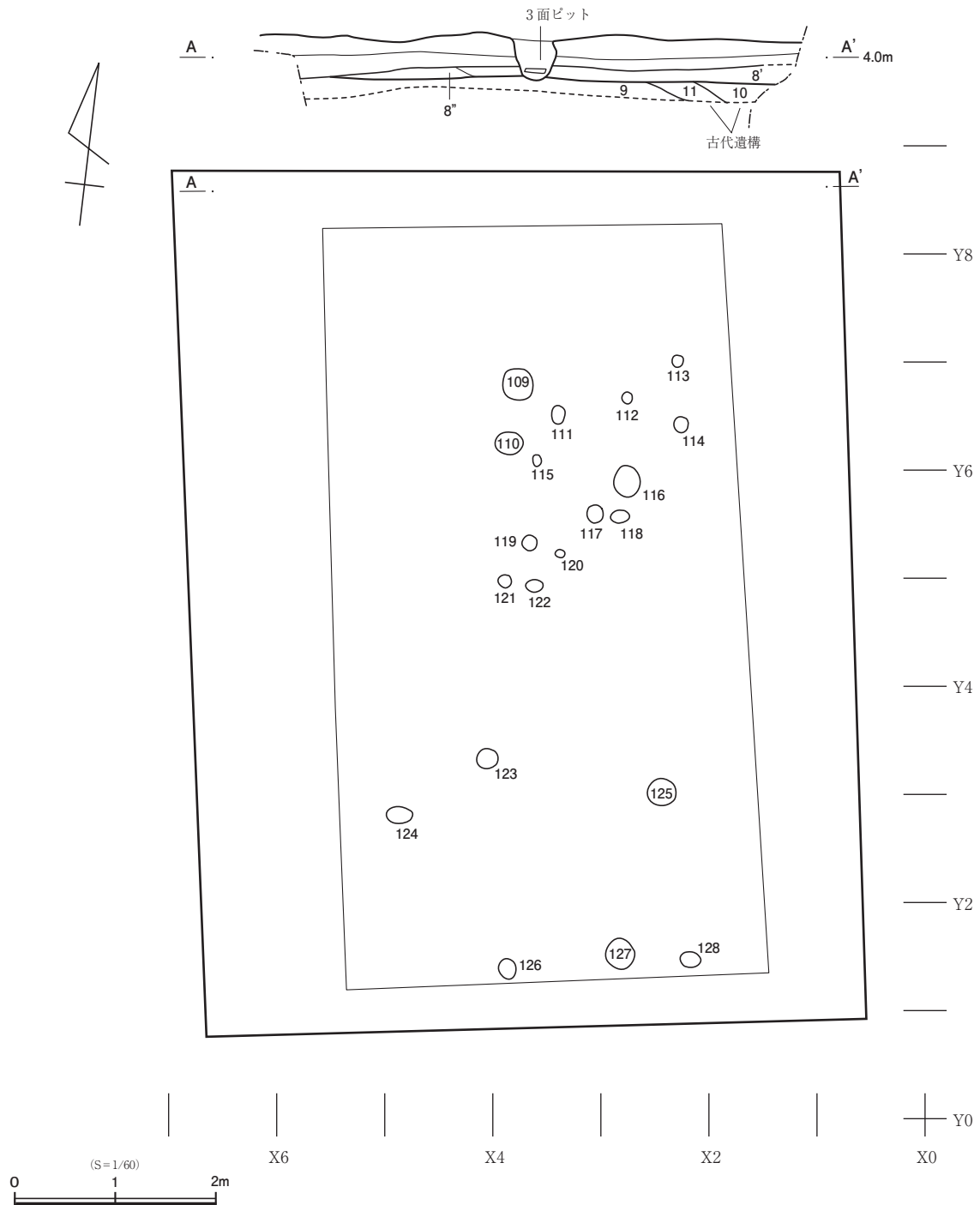


図12 古代遺構配置図

第四章 発見された遺物

第1節 中世の遺物（図13～18、表7）

第1面出土遺物（図13）

図13は、1面上包含層（図3-2層）から出土した遺物である。1は瓦質製品の高台部片である。器表面の摩耗が激しいが、内外面とも磨かれた痕跡がある。小片のため産地の検討は難しいが、胎土がやや粗く、軟質であることから在地で生産された可能性も考えられる。2は常滑窯産の片口鉢I類の口縁部の小片である。3は尾張山茶碗系片口鉢の口縁部の小片である。器壁に粘土紐痕・指頭圧痕がみられる。口唇部は外側端に、粘土紐を玉縁状に貼りつけた後、上端をナデて平坦面を作り出しており、中央が沈線状に凹んでいる。13世紀後葉～14世紀初頭頃の瀬戸窯産の可能性が考えられるが、産地の特定はできない。4は尾張山茶碗系片口鉢の体部の破片である。内面は使用により磨滅している。体部上位は横ナデ、下位は縦位のヘラケズリ調整が行われている。瀬戸窯産で、14世紀以降のものであろう。5は瀬戸窯産の縁釉小皿の口縁部の小片である。ロクロ成形で、口縁部の内面から外面上部に黒黄色不透明の鉄釉が漬け掛けされている。6は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁部の小片である。釉は灰青緑色半透明でやや厚めに施釉されている。

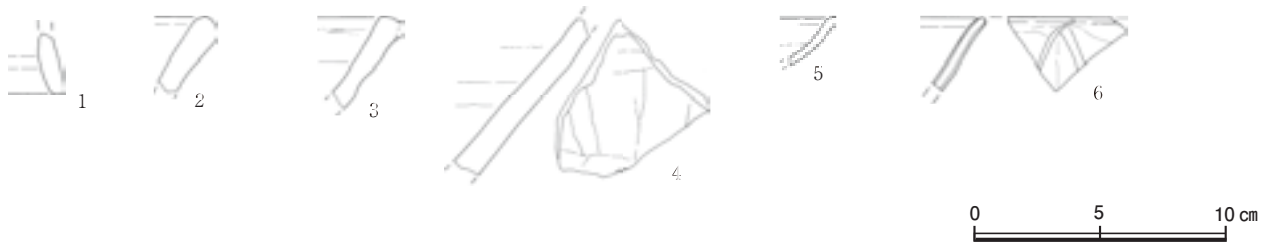


図13 第1面出土遺物

第2面出土遺物（図14）

図14は、2面覆土から出土した遺物である。1はかわらけの小皿である。体部に丸味があり口縁が浅く開いている。2はかわらけの小皿の小片である。口縁は外反気味で、器高が低く、体部が厚手なため底浅である。3はかわらけの小皿の小片である。口縁部に向かい直線的に開いている。体部に比べ、底部の厚みは薄くなる。器高が高い。4はかわらけの小皿の小片である。口唇部に向かって真直ぐ開くも、やや丸味を持つ。器高が高い。5は瀬戸内系瓦器皿で、口縁部と底部の小片である。ロクロ成形で外底回転ヘラ切りである。焼成不良のため内面全体と外面体部上半は炭素吸着が不完全で白桃色を呈する。6は土錘である。丸棒にかわらけと同質の粘土を巻き付け、手で握るなどして成形したと考えられる。棒を抜く際に入ったか、上下端部に沈線が入っている。7は瓦器質火鉢の口縁部の小片である。器表面の破損が激しく、成形・整形について不明である。器表面の一部に灰黒色が残る。8は瓦器質火鉢の脚部である。図14-7と同一個体であろう。内面は、横・斜めのナデが施されている。外面は、タテヘラ磨きが施されている。接地面が磨滅している。9は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。縁帯は2.4cmと狭く、口縁から縁体部に降灰している。10は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。縁帯は3.7cmと広目である。11は常滑窯産の甕の肩部の破片である。外面には方形区画の中に「*」形を配した文様が押印されている。12は常滑窯産の甕の胴部の破片である。内面には平織の布の端切れが付着している。13は研磨痕のある常滑片である。外面は厚く降灰した自然釉が剥離している。全面に擦痕があり、角を使用した痕跡がある。14は常滑窯産の甕の破片である。内外面を敲打されたか、表面がはじけたよ

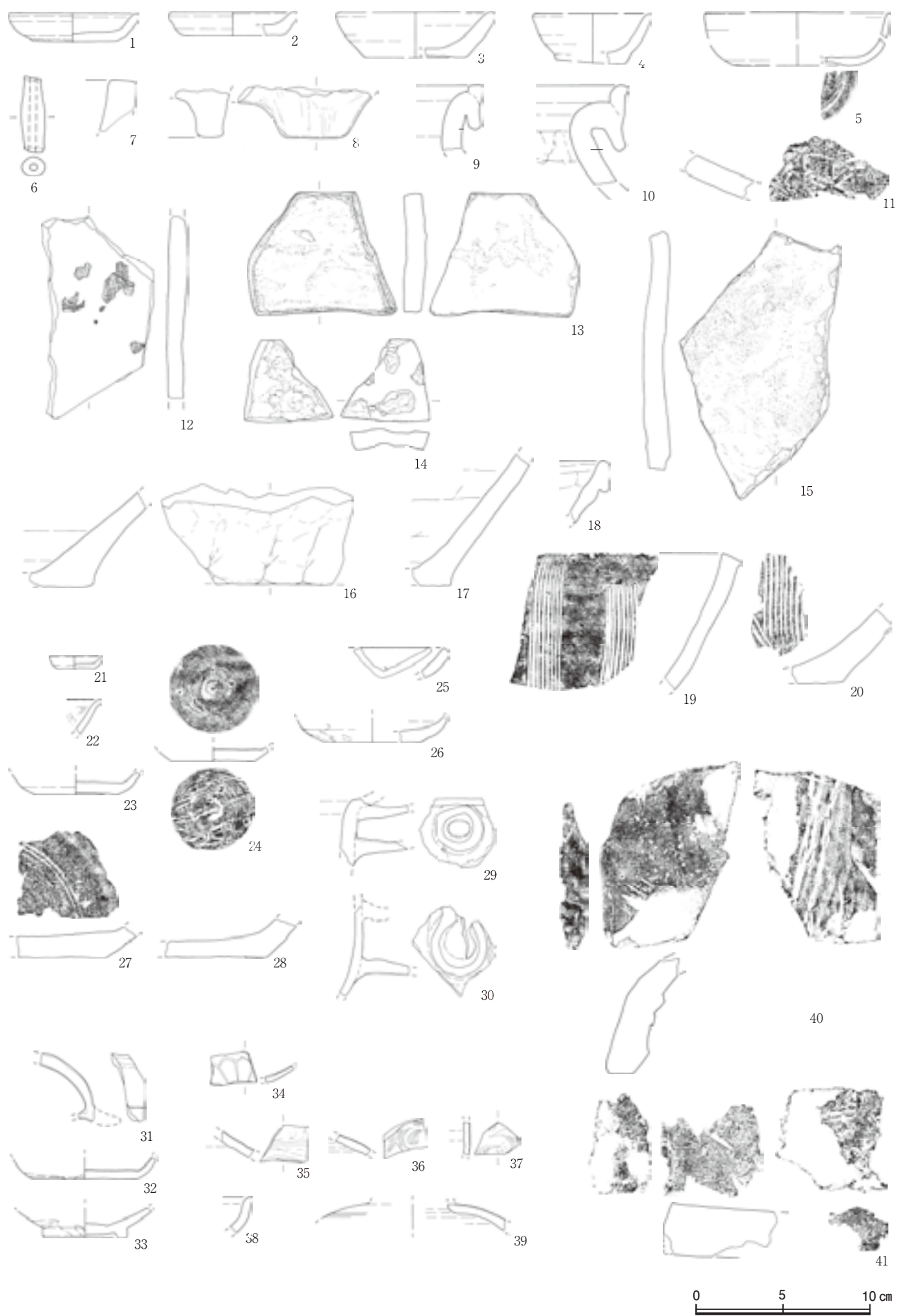
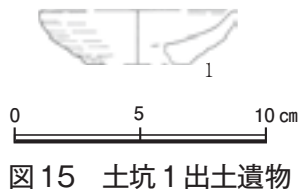


图 14 第 2 面出土遺物

うな痕跡が残っている。15は研磨痕のある常滑片である。内外面に擦痕が認められるが、外面側の方がよく使用されている。外面周縁角に敲打したような痕がみられる。16は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類の底部である。外面底部脇から胴部にかけて強いヘラナデが施されている。底部外面は砂底である。17は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類の底部片である。体部外面ヘラナデ、内面は、ヘラでヨコナデが施されている。内底部に厚く降灰している。使用により、内面が磨滅している。18は東播系鉢の口縁部の小片である。輪積成形、ロクロ回転仕上げが施され、口縁部には縁帯が付けられている。重ね焼きの影響により、縁帯部は灰黒色を呈している。19は備前窯挿鉢の口縁部の小片である。輪積成形で、横方向の回転ナデで形を整えている。内面に8本単位の条線が刻まれている。20は備前窯挿鉢の底部の小片である。輪積成形で、回転ナデで形を整えている。内面に8本以上を単位とする条線が刻まれている。外面底部脇は、指ナデ調整が施されている。条線の凹部は暗灰茶色の自然釉を被っている。21は瀬戸窯産の小型の入子である。ロクロ成形で、外底部はヘラケズリされている。底部を除き灰緑色半透明の自然釉を被っている。22は瀬戸窯産の入子の口縁部の小片である。ロクロ成形である。内面に緑色の自然釉が付着している。釉薬の付着状況から現状よりも広範囲に降灰していたと考えられる。23は瀬戸窯産の入子の底部である。ロクロ成形で、外底に糸切り痕がみられる。内底には軽いナデが施されている。外面に僅かに降灰している。24は瀬戸窯産の入子の底部である。ロクロ成形で、外底部に糸切り痕と板状圧痕がみられる。内底部はナデが施されている。内底に薄く降灰している。25は瀬戸窯産の卸皿の口縁部の小片である。ロクロ成形である。見込みに卸目を1本確認できる。口縁から内面に緑色透明の灰釉が施釉されている。26は瀬戸窯産の縁釉小皿の底部の小片である。ロクロ成形で、外底に糸切り痕がみられる。残存する体部の上端に茶緑色の灰釉が施釉されている。一部、垂れた釉を拭おうとしたような痕跡もみられる。内底面には、窯クソが付着している。27は瀬戸窯産の折縁深皿の底部片である。残存する体部は回転ヘラケズリされている。底部に不定方向のヘラナデの痕跡がみられる。内面は櫛歯状工具による回転を利用した沈線を3条まで確認できる。外面底部脇と内底に淡緑色の灰釉が薄くハケ塗りされている。底部は露胎である。28は瀬戸窯産の折縁深皿の底部片である。外面底部から体部は、回転ヘラケズリ後に回転ヘラナデ調整が行われたようで、器表面が平滑に仕上がっている。29は瀬戸窯産の柄付片口の取手(柄)の破片である。体部ロクロ成形後に、取手を貼り付けている。緑色透明の灰釉が施釉されているが、取手の一部は剥落している。残存する口縁部基部の形態から14世紀前半から中葉頃に生産されたと考えられるが、小片のため断定できない。30は瀬戸窯産の柄付片口の取手(柄)の破片である。体部ロクロ成形後に、取手を貼り付けている。淡茶緑色透明の灰釉が施釉されている。31は龍泉窯青磁で、酒会壺ないし香炉の蓋の破片である。全体に釉が厚く施されている。蓋の鐔の部分が破損しているため、全体像の把握が困難である。32は白磁の口元皿の底部である。白色半透明の釉が薄く施釉されている。33は白磁の口元碗で内底周縁は沈線が巡っている。白青色で半透明の釉が内面から外面高台脇まで薄く施釉されている。34は景德鎮窯青白磁の皿の破片である。内面に花文が型押しされている。釉調は、白青色を呈している。外面下半は露胎である。35は景德鎮窯青白磁梅瓶の部位不明の破片である。文様は不明である。釉調は水青色を呈している。36は景德鎮窯青白磁梅瓶の胴部の破片である。文様は渦巻文である。釉調は、土中で色素沈着ししたか、淡茶色味かかった水青色を呈し、やや光沢がある。37は景德鎮窯青白磁梅瓶の胴部の破片である。文様は渦巻文である。二次焼成を受け失透している。38は建州窯天目茶碗の口縁部の小片である。暗灰色で精良な胎土に茶黒色系の不透明な鉄釉が施釉されている。39は高麗青磁で瓶子の頸部片である。外面に沈線が2条刻まれている。釉調は、灰青色を呈している。40は男瓦の破片である。胎土は灰色を呈し、砂粒・雲母・赤色粒などを含む。凸面に、

縄目叩き痕、ヨコナデの痕跡がある。凹面は、布目痕が明瞭に残る。一部、布目に縮みがみられる。側面側の縁は、ヘラケズリである。鶴岡八幡宮中世最下層出土の瓦と同類の資料である。41は女瓦の破片である。胎土は黒～灰白色を呈し、砂粒・白色粒・小石粒を含む。凹面は、離れ砂と弱い布目の圧痕がある。凸面は、平行状の叩き目が僅かに残る。側面は2段に面取りされている。表面は燻べ焼きにより黒色を呈する。永福寺Ⅱ期所用瓦(1235～1280年頃)の女瓦D類と同類の小片である。



第2面遺構出土遺物(図15)

図15は、土坑1出土遺物である。1はかわらけの小皿の小片である。器壁は、ゆっくり開きながら立ち上がり、口唇は尖る。外面体部はロクロ目が強く残る。

第3面出土遺物(図16)

図16は、3面覆土から出土した遺物である。1はかわらけの大皿の底部で、体部は打ち欠かれているようにみえる。高台状の厚い底部を持ち、底部の回転糸切り痕は比較的幅が広く、内底面は2本の指を使った1回ナデに見える。微砂・金雲母を含む良土で、焼成はやや良好、灰褐色を呈する。形態や調整技法に鎌倉の古手とされる一群と近い特徴がみられるもので、12世紀末まで遡るものかもしれない。2はかわらけの大皿の底部である。全体の器形は不明である。外底の糸切り痕は糸目が細かい。内底に2回以上、横方向のナデが施されている。3はかわらけの小皿の小片である。内底幅広く、器壁はゆっくり開きながら立ち上がり、口唇が尖っている。4はかわらけの小皿の小片である。内底幅広く、器壁はゆっくり開きながら立ち上がり体部中位に稜を持つ。口縁部は、やや外反して、丸く収まる。5はかわらけの小皿の小片である。内底幅広く、体部下位に稜を持ち、器壁は丸味をもって、ゆっくり開きながら立ち上がる。6はかわらけの小皿の底部である。底部が小さい薄手のもので、碗状に均整のとれた器形になると思われる。微砂および赤色粒を多く含み、焼成は良好、明橙褐色を呈する。7はかわらけの底部の小片である。底部の約1/4のみの残存であるが、大皿と考えられる。内底面にはナデが施されておらず、ロクロ目痕が残っている。8は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。自然釉が剥げて、素地がみえている。9は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。縁帯は幅1.8cmと狭い。口縁部に降灰している。10は研磨痕のある常滑窯甕片である。内面の縁边角に擦痕が認められる。11は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類の口縁部の小片である。12は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類の底部の小片である。体部下半は、ヘラケズリで、高台周辺部は高台貼付後ナデ調整が施されている。表面が磨耗している。13は壺の底部の小片である。内面のロクロ目が強く、外面には回転ヘラナデまたはヘラケズリの痕跡がみられる。高台は、付け高台である。内底部のみ僅かに降灰している。小片であるため、産地の特定は難しいが、胎土の特徴などから東遠系の可能性も考えられる。14は東播系鉢の口縁部の小片である。輪積成形で、ロクロ回転仕上げが施されている。口縁部には縁帯が付けられている。重ね焼きの影響により、縁帯部が灰黒黄色を呈している。15は東濃型山茶碗の口縁部の小片である。口縁部は外反し、肥厚している。内面に薄く降灰している。白土原ないし明和窯式の可能性が考えられる。16は東濃型山茶碗の口縁部の小片である。器壁は3mmと薄い。口縁部は締めナデにより外反している。内外面に薄く降灰している。白土原ないし明和窯式の可能性が考えられる。17は瀬戸窯産の入子の口縁部の小片である。ロクロ成形である。口縁部にのみ降灰している。18は瀬戸窯産の輪花型入子の口縁部の小片である。ロクロ成形で、口縁をヘラで押え輪花型にしている。外面のヘラで押された切れ目に、灰緑色透明の自然釉が溜まっている。

19は瀬戸窯産の柄付片口の注口の破片である。注ぎ口を手づくね成形している。黄緑色透明の灰釉が施釉されている。20は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部の小片である。淡青緑色の透明な釉が施釉され、畳付のみ露胎である。割れ口が打ち欠かれたようになっている。21は滑石鍋転用品である。左右端部、表裏面に小刀状痕がみられる。22は鳴滝(奥殿)産の仕上げ砥の断片である。全体、青灰色を呈している。砥面は片面下側のみに残存しており表裏面とも剥離が著しい。上下面、左右側面は成形面で、上面は折りとり痕が残る。下面は2次成形がなされたか、斜めに切り落とされている。23は鳴滝産の仕上砥の断片である。全体、淡褐色を呈している。表面は使用により擦り減って凹んでいる。裏面の一部は、剥離している。左右側面は、成形面と思われる。24は加工痕のある軽石である。人為的な擦痕が認められる。表面、淡灰黄色で、芯は白色である。25は牛または馬の骨の加工骨残片である。刃物痕が複数入っている。26は鹿の角の加工骨残片である。上下端部を刃物で切られている。27は獣種不明の加工骨残片である。表面に刃物痕が多数みられる。

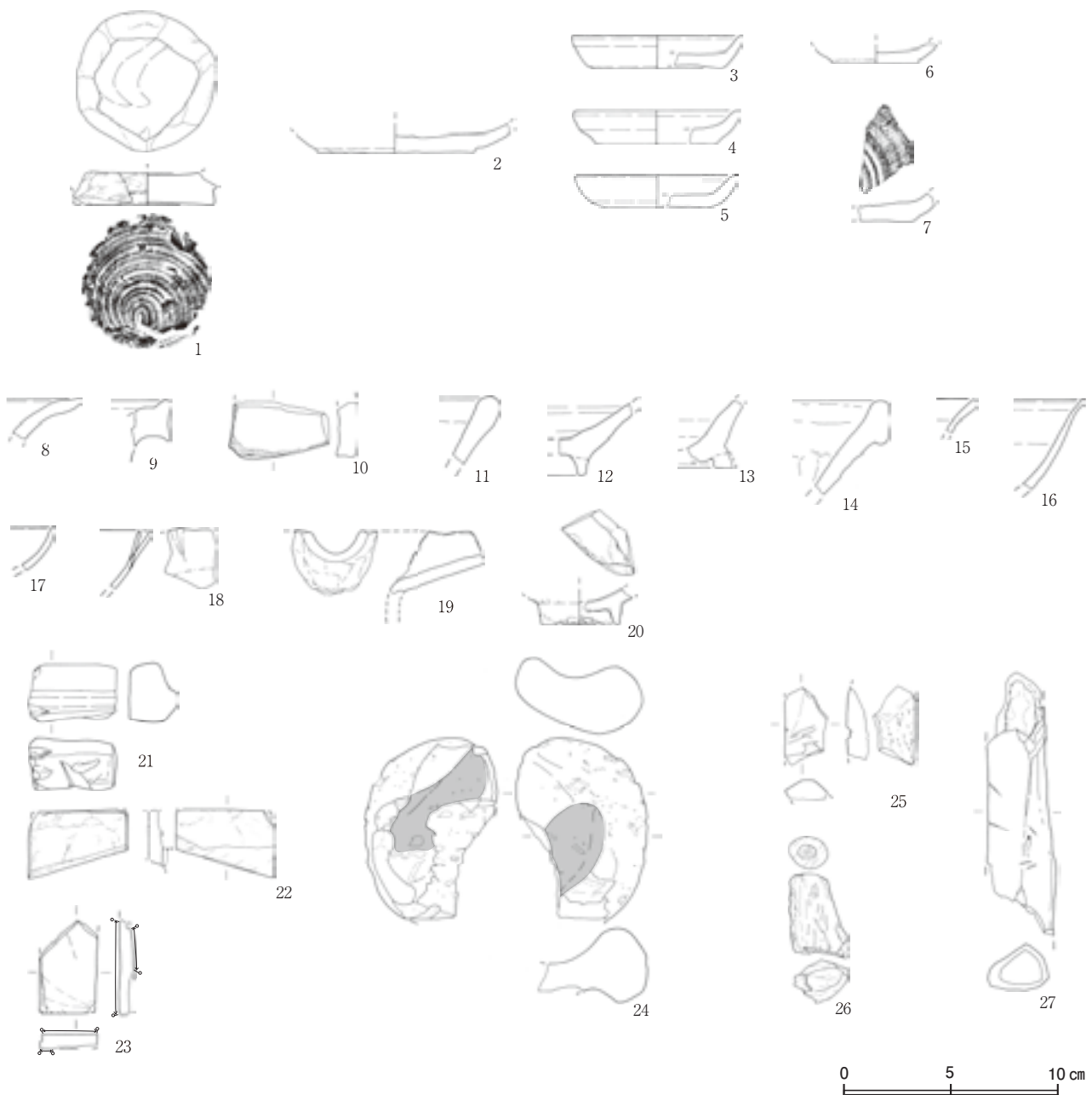


図 16 第3面出土遺物

第3面構成土出土遺物 (図17)

図17は古代の遺構確認面検出までに出土したもので3面構成土中の遺物である。1はかわらけの大皿の小片である。器高が高く、体部に稜を持たず、器壁はやや内湾気味に立ち上がっている。2は木製品で蓋の断片であると考えられる。3は木製品で曲物の蓋。一箇所に幅3mmの桜皮紐が貫通している。4は円板状木製品である。円板の中心に、径1.0cmの穿穴がある。5は部材で用途不明品。下部の片側は欠損するも長い板状を呈するもので、表面は外周に4mm程の縁を残して、浅い凹みが作り出されている。背面は両端の左右対になる位置に、柄穴状の切り込みが入れている。6は部材である。上下端部は切断痕が有る。7は鹿の角の加工骨残片である。上端部に刃物痕がみられる。全体に摩耗が激しい。

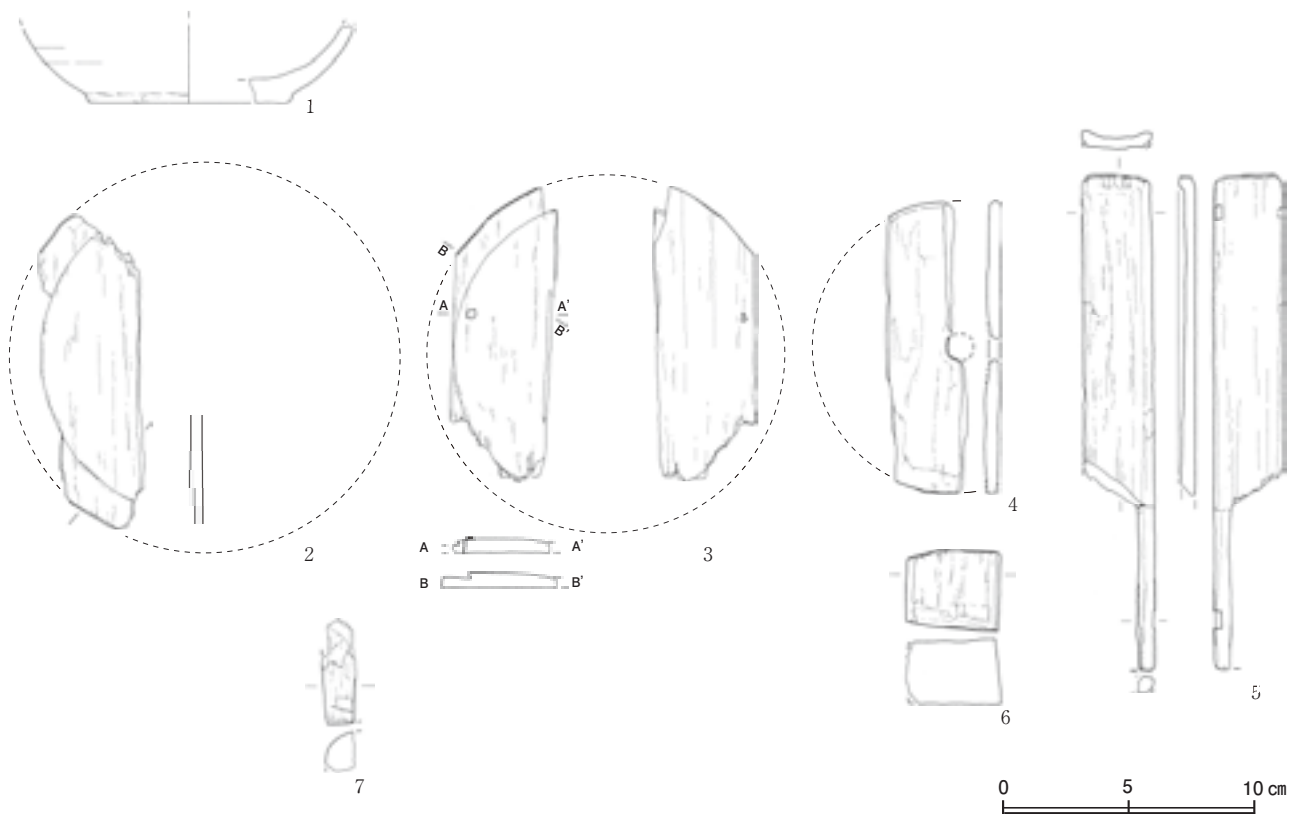


図17 第3面構成土出土遺物

表土・攪乱出土遺物、調査区内採集遺物 (図18)

図18は、表土・攪乱および排水用の側溝・釜場から出土した遺物である。1はかわらけの大皿の底部の小片である。外底部に線状の圧痕がみられる。2はかわらけの小皿の完形品である。体部中位に弱い稜を持ち、口縁部は外反する。3は常滑窯産の甕の肩部の破片である。内面は、指頭による接合痕がみられる。外面には入れ子状の長方形区画の角を対角線で結び、区画内に縦線を充填した文様が押印されている。押印文は灰緑色の自然釉を被っているため凹凸が不明瞭である。写真図版(図版6)を参照されたい。4は瀬戸窯産の縁釉小皿の口縁部の小片である。ロクロ成形である。内面から外面上部は、灰緑色不透明の灰釉が厚く漬け掛けされている。釉が剥離している。5は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部片である。内底に蓮華文が印刻されている。青緑色半透明の鈍い光沢のある釉が、薄く施釉されている。高台置付から高台内は露胎である。6は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部の小片である。釉調は暗灰緑色透明を呈し、薄く施釉されている。高台置付から高台内は露胎である。内底には、敲打したような痕があ

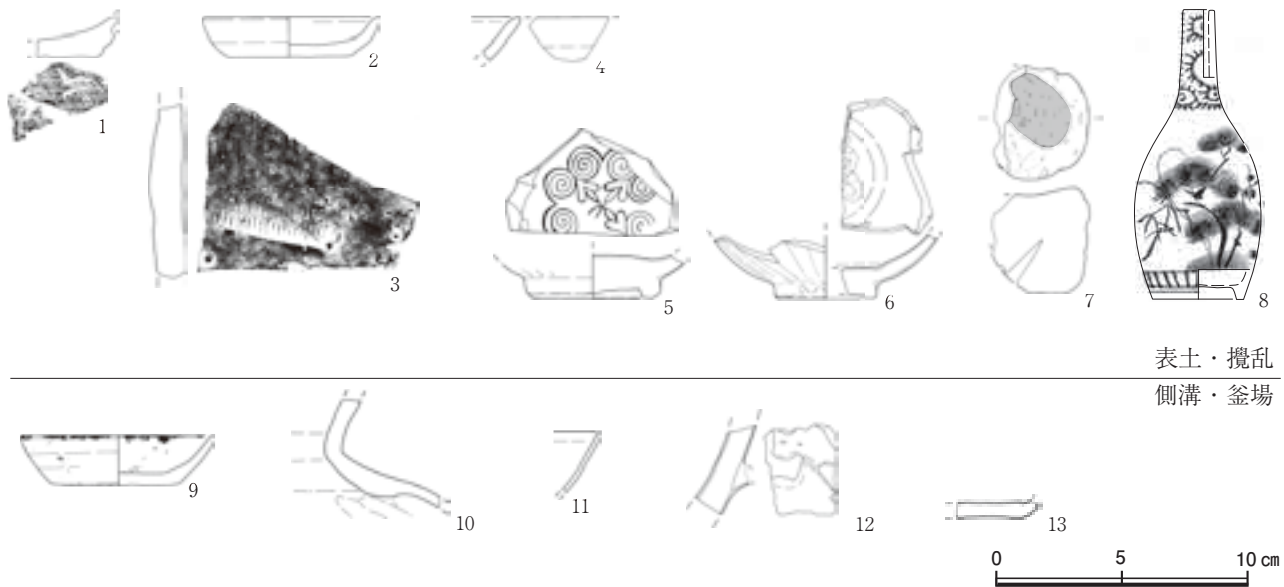


図18 表土・攪乱出土遺物、調査区内採集遺物

る。7は軽石である。表面は、薄灰黄色で、芯は白色である。縦2.2cm、横2.2cmの幅の凹面に、人為的な擦痕が認められる。8は、染付徳利である。伊万里窯のもので頸部にタコ唐草を配し、表面に松竹梅、裏面には長剣状の草文が描かれている。9はかわらけの小皿の完形品である。器高が高く、体部中位に稜を持ち、下位がやや凹む傾向にある。薄手で、均整のとれた器形をしている。口唇部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されたと考えられる。10は常滑窯産の壺の頸部から肩部の破片である。内側に粘土を継ぎ足した部分を指で押さえて調整した痕跡がみられる。外面肩の自然釉が剥離している。11は瀬戸窯産の入子の口縁部の小片である。ロクロ成形である。口縁部に薄く降灰している。12は龍泉窯青磁で器種は不明。体部外面に耳ないし取手を貼付けていた痕跡が残る。釉調は緑青色半透明で細かい貫入が入る。外面上半は焼成時に釉が流れたか施釉薄めで、色調は褐色味を帯びている。13は白磁の口元皿の底部の小片である。全体に薄く灰白色の釉が施釉されている。

第2節 自然遺物

軽石(表6、写真図版8)

調査で発見された軽石についての情報として、比重を測定できなかったため、表6におおよその大きさと重さを示した。ほとんどの個体に欠損が見られるため、計測値は全て残存値である。備考欄に黒色と記した4点を除いた46点は、色調白色を呈するもので、繊維状に発砲して軽く、水に浮く性質を持ち、微細な石英を少量含んでいる。欠損部を除き全面が摩擦しているが、そのうち摩擦面が不自然に凹んでいる個体(1・18)は人為的に加工されている可能性があるものとして実測図を掲載した(図16-24、図18-7)。黒色を呈するものは白色のものに比べて、発砲の度合いが甘く密度があり重いが、33・35・36の3点は水に浮く性質を持っている。34だけが水に沈むもので、石英の粒子が大きく径3mmを超えるものも含まれるほか、かんらん石かと思われる琥珀色の透明粒子が含まれている。

50点の軽石は大半が中世の第1生活面より下の包含層(図3-3~7層)から出土したものである。おそらく中世第3面下の砂質土層(図3-6・7層)が堆積する時期に調査地に到達したもので、2面・3面上の包含層出土のものについては中世期の地形の際に混入したものと思われる。

表6 軽石計測表(寸法:cm 重さ:g)

個体 No.	出土位置	長×幅×厚	重さ	備考	個体 No.	出土位置	長×幅×厚	重さ	備考
S-1	排水溝	4.2×3.8×4.3	19.1	擦痕あり(図18-7)	S-26	3面	6.7×4.8×2.7	11.8	
S-2	2面	1.9×1.9×1.2	1.8		S-27	3面	3.4×3.3×1.7	5.6	
S-3	2面	1.9×1.8×1.0	1.4		S-28	3面	5.0×4.2×3.1	11.6	
S-4	2面	6.6×4.5×4.4	18.6		S-29	3面	6.7×4.5×3.7	17.8	
S-5	2面	5.9×5.0×3.4	24.3		S-30	排水溝	3.4×2.7×1.0	1.0	
S-6	2面	5.4×4.3×2.9	13.1		S-31	排水溝	7.3×4.0×3.5	24.6	
S-7	2面	3.9×3.6×2.6	6.8		S-32	4面	2.7×2.7×1.5	3.7	
S-8	2面	2.8×2.3×1.5	1.7		S-33	4面	4.7×3.1×2.4	10.1	黒色
S-9	2面	3.0×2.4×1.3	1.0		S-34	4面	7.7×7.1×5.4	141.7	黒色 水に沈む
S-10	2面土坑1	3.7×2.2×1.5	2.2		S-35	4面	5.0×4.6×3.6	20.9	黒色
S-11	2面構成土	8.9×7.4×6.2	74.8		S-36	4面	8.3×7.6×6.9	114.7	黒色
S-12	2面構成土	8.5×6.2×3.9	31.8		S-37	4面	4.2×3.7×2.7	6.1	
S-13	2面構成土	6.2×2.9×2.9	8.7		S-38	4面	2.8×2.4×1.7	4.4	
S-14	2面構成土	5.3×5.0×2.4	12.6		S-39	4面	4.2×3.0×2.4	8.2	
S-15	2面構成土	5.9×3.1×1.8	5.9		S-40	4面	3.7×2.9×2.8	7.7	
S-16	2面構成土	2.9×2.8×1.4	1.3		S-41	4面	3.6×3.5×2.6	4.0	
S-17	2面構成土	2.6×2.3×0.8	0.7		S-42	4面	6.2×4.5×3.8	17.7	
S-18	3面	5.8×8.3×3.0	31.0	擦痕あり(図16-24)	S-43	4面	3.8×2.8×1.6	3.2	
S-19	3面	4.9×4.4×2.1	6.1		S-44	4面	2.6×2.3×2.2	5.0	
S-20	3面	2.7×2.3×1.3	3.2		S-45	4面	4.9×4.1×3.2	9.1	
S-21	3面	2.5×1.9×1.4	2.5		S-46	4面	4.7×4.1×2.9	8.2	
S-22	3面	2.7×2.0×1.9	2.6		S-47	4面	5.6×4.9×3.5	11.6	
S-23	3面	1.9×1.5×0.8	0.3		S-48	4面	7.4×5.8×4.1	21.1	
S-24	3面	4.2×2.8×2.3	4.6		S-49	4面	7.2×5.8×3.7	20.1	
S-25	3面	4.9×3.9×3.0	12.5		S-50	4面	6.7×5.3×4.0	25.3	

骨(写真図版8～10)

中世第3面、X3,Y3付近から馬の右上肢骨がまとまって出土したのを始め、65点以上の骨が出土している。取り上げの際に破損してしまったものも多く出土数を明確にできない上、種別・部位を特定できないものが含まれるため、残りの良い65点について、おおよそ1/2倍大の写真を掲載した。(写真図版8～10)全体に馬の四肢骨が多く、鹿・犬・猪などの陸生哺乳類が含まれるほか、人骨かと思われる小片も1点出土している。

大半が中世期の包含層中(図4-2～4層)から出土しており、遺構(2面土坑1:小型陸生哺乳類四肢骨3片、3面溝1:馬基節骨1点)から出土したのも包含層中のものが覆土中に混入された可能性が高い。3面、X3,Y3付近から出土した馬骨については、周囲に掘り込みなど確認されておらず、第3生活面が廃棄される頃に、そこに置かれたか捨てられたかしたものと思われる。右上肢のみがまとまった理由については不明である。

第3節 古代の遺物(図19、表9)

調査で出土した古代の遺物をまとめた。大半が古代の遺構確認面上(図3-9層上面)及び8層中から検出されたものであるが、中世期の造成土・遺構に混入されたものや、表土・排水溝・釜場など平面的な調査が行われていない範囲から出土したものも合わせて報告する。

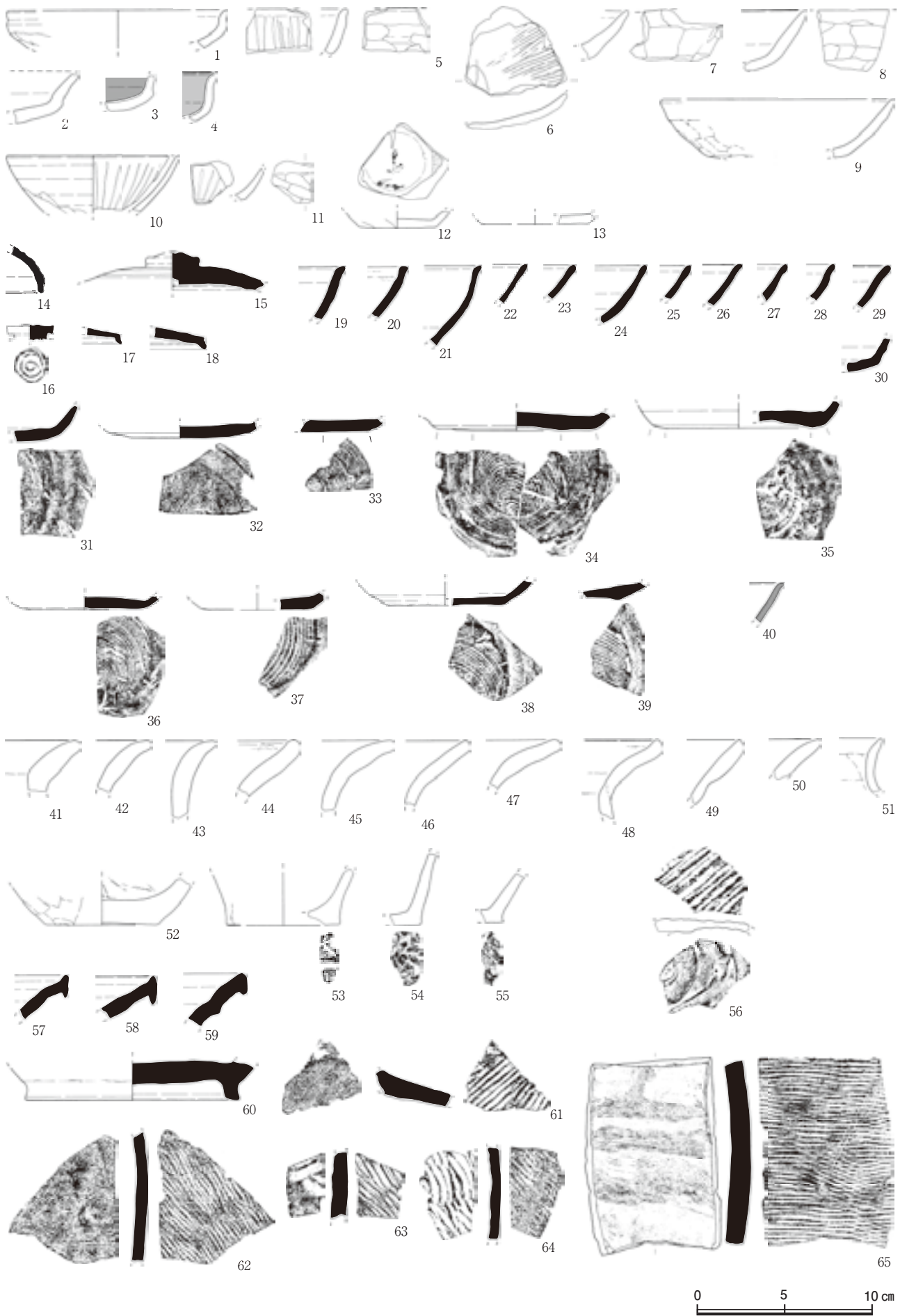


図19 古代の遺物

1～13は土師器の坏で、1～6は7世紀代の所産である。3は内外面に黒彩を施すもの、4は内外面赤彩された比企型坏。5・6は内面に暗文を有するもので、5は北武蔵地方に系譜を持つ半球形を呈するもの。6は内面に放射状暗文、中央に螺旋状暗文を配し、キメ細かく層状に剥がれ易い胎土などから畿内産の可能性がある。7・8は相模型、9は南武蔵型でいずれも8世紀後半代の所産と思われる。10～12は甲斐型坏である。12の内底は周縁に溝が巡り、中央付近に「山○」と読める墨書が残る。外面体部下位は斜め方向、底部は一定方向のヘラケズリが施されている。13はロクロ成形で、胎土が精良であることなどから甲斐型の可能性が高い。外面底部周縁は回転糸切り痕が消されているが、小片のため調整技法がはっきりしない。14～18は須恵器の蓋で、14が比較的古手のもの。16は摘み部分のみの残欠で内面割れ口には、糸切り痕の上に接着のための細い粘土紐が螺旋状に付着している。19～39は須恵器坏で、19～21の口唇部は内傾する平坦面が作りだされている。30は7世紀末から8世紀初頭頃の高台付坏の体部が屈曲して立ち上がる部分と思われる。31～39の底部片には法量の他、底部の切り離し技法やその後の調整技法に時期差が見られる。31は残存する底部から体部下位1cmあたりまで、回転ヘラケズリ調整が施されたものと思われるが、その後にナデ調整が加えられたためケズリがはっきりしない。32の底部は回転ヘラケズリの上に、周縁から体部にかけて回転軸がずれたか、手持ちによる別のケズリ調整が加わっている。33は復元がかなわなかったが、底径8～9cm程度になるものと思われる。35の回転ヘラケズリは体部下位のみに残る。底部は歪んで上げ底気味のためケズリの工具が当たらなかったものと思われる。内底立ち上がり部分の体部との境は鋭く凹んで沈線状となっている。36～39は底部回転糸切り後、調整が施されないもの。38・39は焼成が不良のもので、還元がうまくかからず、橙～褐色系の色調を呈する。40は灰釉陶器で、内面に灰釉がハケ塗りされており黒笹90号窯式の製品と思われる。41～55は土師器甕で、41～43は古墳時代後期のもの、44～49は相模型である。44は厚手で古手のものに見え、球胴甕になるかもしれない。46は口唇部を面取りするもの。50は通常見受けられる相模型の甕より、胎土が精良で、丁寧な作りに見える。51は武蔵型で「コの字」状の口縁部が退化しているもの。52は古墳時代後期の球胴甕の底部片、53～55は相模型の長胴甕で底部に木葉痕が残る。56は須恵器と思われるが断定はできない。器種は不明。外面は細かいハケ調整の後、叩き目のような平行条線で埋まっている。内面は強い指頭ナデが重なり、左端は何らの部分が剥がれたと見え、その周囲は接着のために薄く溶いた粘土を貼ったとみえる痕が残る。57～65は須恵器で57～59は甕の口縁部片。60は高台付きの壺で、外底面には回転ヘラケズリ調整が施されていたようだが、その後のロクロナデのため痕跡がはっきりしない。61～65は甕の胴部片で、65は硯に転用されている。65の内面は甕成形時の当て具痕をわずかに残し、良く摩滅している。内面周縁角の一部には使用が及んだとみえる擦痕が残っている。

表7 中世遺物観察表(1) 復元値= ()、既存値= ~ ※単位/ (cm)

挿図 番号	出土 位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	
				長さ	幅	厚さ	
							a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
13-1	1面	瓦質製品	高台部片				a.磨き b.灰白色 砂粒・黒色粒・白色粒多量 やや粗い c.器表面 灰黒色 e.やや甘い 軟質 f.産地不明
13-2	1面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.明灰色 砂粒・白色粒・小石粒多量 粗土 e.軟質
13-3	1面	尾張山茶碗系 片口鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.灰色 砂粒・黒色粒・小石粒微量、白色粒多量 e.良好
13-4	1面	尾張山茶碗系 片口鉢	体部片				a.輪積成形 回転ナデ→外面 縦位へラ削り b.淡灰色 白色粒多量 小石微量 やや粗土 e.良好 硬質
13-5	1面	瀬戸窯 緑釉小皿	口縁部片				a.ロクロ成形 b.黄灰色 砂粒 やや粗土 d.内面～外面上部黒黄色不透明鉄釉 漬け掛け e.良好
13-6	1面	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片				a.ロクロ成形 外面 鎬蓮弁文片切彫り b.灰白色 精良 堅緻 気孔有り d.灰青緑色半透明光沢有り 施釉厚い
14-1	2面	かわらけ	口縁～ 底部2/3	7.3	4.8	1.7	a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底2～3回ナデ b.微砂多量、赤色粒・白針・土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや良好
14-2	2面	かわらけ	口縁～ 底部1/3	(7.0)	(5.7)	1.4	a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底ナデ b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・黒色粒多量 良土 c.淡褐色 e.やや甘い
14-3	2面	かわらけ	口縁～ 底部1/6	(8.8)	(5.6)	2.7	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底ナデ b.赤色粒・白針 弱粉質 良土 c.橙色 e.良好
14-4	2面	かわらけ	口縁～ 底部1/6				a.ロクロ成形 内底ナデ b.赤色粒・白針 弱粉質 良土 c.橙色 e.良好
14-5	2面	瀬戸内系 瓦器皿	口縁部片 底部1/5				a.ロクロ成形 外底回転へラ切り b.胎芯 暗灰色 微砂・雲母・白色粒微量 良土 c.器表面 白桃色～桃色黒色 f.器表面摩耗
14-6	2面	土錘	完形	1.3	4.2	0.4	a.丸棒に粘土を巻き付け、手で握り成形か? b.微砂・雲母・金雲母・白針 良土 c.褐橙色 e.良好
14-7	2面	瓦器質火鉢	口縁部片				b.胎芯 灰褐色 砂粒・雲母・赤色粒・白色粒・黒色粒多量 粗土 c.器表面 灰黒色 e.不良 軟質 f.器表面破損調整不明
14-8	2面	瓦器質火鉢	脚部片				a.外面ナデ 縦へラ磨き、内面 横・斜めナデ b.胎芯 灰色～灰白色 粗砂多量 砂質 粗土 c.器表面 暗灰色 e.軟質 f.設置面磨減
14-9	2面	常滑窯 甕	口縁部片	縁帯幅2.4			a.輪積成形 b.灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒多量 やや良土 c.器表面 暗茶色 d.口縁部 灰緑色自然釉 e.良好
14-10	2面	常滑窯 甕	口縁部片	縁帯幅3.7			a.輪積成形 b.灰色～暗灰色 砂粒・黒色粒微量、白色粒多量 やや粗土 c.器表面 青灰色 内面 灰茶色～赤褐色 d.縁帯部 灰緑色不透明自然釉 e.良好
14-11	2面	常滑窯 甕	肩部片				a.輪積成形 押印文 b.橙色 砂粒・白色粒・黒色粒・微砂多量 粗土 c.器表面 暗褐色 内面 褐色 e.良好
14-12	2面	常滑窯 甕	胴部片	10.4～	5.7～	1.1～0.9	a.輪積成形 b.灰黒色 砂粒・白色粒・黒色粒・赤色粒多量 やや粗土 c.器表面 淡橙黄色 内面 暗褐色 e.良好 硬質 f.内面布付着
14-13	2面	研磨痕のある 常滑窯産甕片					b.淡灰色 砂粒・白色粒 良土 c.内面 淡褐色 d.外面 自然釉剥離 e.良好 f.内面～側縁擦痕 外面縁辺擦痕・一部敲打気味
14-14	2面	常滑窯 甕	胴部片	4.6	4.5	1.0～0.7	b.淡褐色 砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒 良土 c.器表面 明茶色 内面 褐色 e.良好 硬質 f.内外面敲打痕? 内外面爆ぜている
14-15	2面	研磨痕のある 常滑窯産甕片					b.暗灰色 白色粒多量、黒色粒・砂粒適量 良土 c.器表面 褐色 e.良好 f.内外面擦痕・縁辺敲打気味
14-16	2面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部片				a.輪積成形 へラナデ 砂目平底 b.灰色 砂粒・白色粒多量、黒色粒・小石粒少量 粗土 c.器表面 褐色～暗褐色 e.軟質
14-17	2面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底～ 体部片				a.輪積成形 へラナデ b.灰色 砂粒・白色粒・黒色粒多量 やや良土 c.器表面 暗赤褐色 内面 灰色 d.内底 灰緑色自然釉厚い e.良好
14-18	2面	東播系 鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.青灰色 砂粒・白色粒・黒色粒多量 良土 c.器表面 青灰色 口縁部 暗黒色 e.軟質 良好

中世遺物観察表(2)

挿図 番号	出土 位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	
				長さ	幅	厚さ	
14-19	2面	備前窯 播鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ 条線8本単位 b.青灰色～暗褐色 微砂・白色粒・赤色粒 良土 c.器表面 暗褐色 e.堅緻
14-20	2面	備前窯 播鉢	底部片				a.輪積成形 回転ナデ 外面 底部脇指ナデ 内面 条線8本以上単位 b.暗灰赤色 白色粒少量 緻密 c.器表面 暗茶褐色 d.条線凹部暗灰茶色自然釉 e.良好 堅緻 f.内面使用による磨滅
14-21	2面	瀬戸窯 入子	口縁～ 底部1/4	(4.0)	(3.0)	0.75	a.ロクロ成形 外底へラ削り b.黄灰色 砂粒 良土 d.底部以外灰緑色半透明自然釉 e.良好 硬質
14-22	2面	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 b.淡灰色 白色粒 良土 d.内面 一部自然釉 e.良好 堅緻
14-23	2面	瀬戸窯 入子	底部1/3		(4.6)		a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底軽いナデ b.淡灰色 微砂 良土 d.外面僅かに自然釉 e.良好 堅緻
14-24	2面	瀬戸窯 入子	底部完形		4.7		a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底ナデ b.灰色 砂粒微量 精良土 d.内面に僅かに灰白色～灰緑色自然釉 e.良好 硬質
14-25	2面	瀬戸窯 御皿	口縁部片	(15.0～)			a.ロクロ成形 b.灰黄色 微砂 良土 d.口縁～内面緑色透明灰釉 e.良好 硬質
14-26	2面	瀬戸窯 緑釉小皿	底部片				a.ロクロ成形 回転糸切り b.淡灰色 微砂 気泡有り 良土 d.内底 茶緑色自然釉厚い e.良好 f.内底窯クソ付着
14-27	2面	瀬戸窯 折縁深皿	底部片				a.底部不定方向のヘラナデか 体部回転ヘラケズリ 内底面沈線3条まで確認 b.淡灰色 微砂 良土 d.淡緑色灰釉 ハケ塗り e.良好
14-28	2面	瀬戸窯 折縁深皿	底部片				a.底部回転ヘラケズリ後回転ヘラナデ? 内底トチン痕 b.淡黄色 微砂・白色粒 良土 d.内面淡茶緑色灰釉ハケ塗り e.良好
14-29	2面	瀬戸窯 柄付片口	柄手片				a.ロクロ成形 取っ手貼付 b.灰色 良土 d.緑色透明灰釉 光沢有り 貫入 漬け掛けか? e.良好
14-30	2面	瀬戸窯 柄付片口	柄手片				a.ロクロ成形、取っ手貼付 b.灰色 良土 d.淡茶緑色透明灰釉 光沢有り 貫入 漬け掛けか? e.良好
14-31	2面	龍泉窯 青磁蓋	体部片				a.ロクロ成形 外面中ほどに沈線 b.灰白色 精良堅緻 d.青緑色透明光沢有り 厚い施釉 f.酒会壺ないし香炉
14-32	2面	白磁 口元皿	底部1/6		(5.8)		a.ロクロ成形 b.白色 精良堅緻 気孔あり d.灰白色透明 薄い施釉 外底部露胎
14-33	2面	白磁 口元碗	底部1/4		(4.8)		a.ロクロ成形 b.白色 精良 気孔あり d.青白色透明 薄い施釉 高台～高台内露胎
14-34	2面	景德鎮窯 青白磁皿	体部小片				a.ロクロ成形 内面 花文型押 b.白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色透明光沢有り 外面下半露胎
14-35	2面	景德鎮窯 青白磁梅瓶	肩部片				a.ロクロ成形 外面文様不明片切彫り b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色透明光沢有り 施釉薄い
14-36	2面	景德鎮窯 青白磁梅瓶	肩部片				a.ロクロ成形 外面 渦巻文櫛描き b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色半透明光沢有り 外面施釉 内面にも薄くかかる
14-37	2面	景德鎮窯 青白磁梅瓶	胴部片				a.ロクロ成形 外面 渦巻文櫛描き b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色透明鈍い光沢有り 外面施釉 内面薄くかかる f.二次焼成受け失透
14-38	2面	建州窯 天目茶碗	口縁部片				a.ロクロ成形 b.暗灰色 砂粒 精良土 d.茶黒色不透明鉄釉 光沢有り e.硬質
14-39	2面	高麗青磁 瓶子	頸部1/6				a.ロクロ成形 外面 沈線2条 b.灰白色 砂粒 精良堅緻 c.内面 黄灰色 d.灰青色半透明鈍い光沢有り 薄く施釉
14-40	2面	男瓦				2.3～1.3	a.凸面縄目叩き 横位ナデ、凹面布目痕 側端 面取り b.胎芯 黒色～灰色 砂粒・雲母・赤色粒 やや粗土 c.器表面 灰色～灰白色 e.良好
14-41	2面	女瓦				2.8～1.4	a.凹面 離れ砂、弱い布目痕、凸面 平行状叩目微かに残る 側端2段面取り b.胎芯 灰白色 砂粒・白色粒・小石粒 やや粗土 c.器表面 黒～灰白色 e.良好

中世遺物観察表(3)

挿図 番号	出土 位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	
				長さ	幅	厚さ	a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
15-1	2面 土坑1	かわらけ	口縁～ 底部1/6	(7.6)	(4.0)	(2.1)	a.ロクロ成形 内底ナデ b.白針・黒色粒 良土 c.にぶい淡橙色 e.やや甘い f.外面ロクロ目強い
16-1	3面	かわらけ	底部全		6.3	1.2～	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底ナデ b.微砂多量、金雲母・白針適量 砂質 良土 c.灰褐色 e.やや良好 f.体部打ち欠きか？円板状に遺存
16-2	3面	かわらけ	底部全		7.5		a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底に2回以上ナデ b.微砂・雲母・赤色粒・白針・ 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
16-3	3面	かわらけ	口縁～ 底部1/4	(8.0)	(6.0)	1.5	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底ナデ b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・土 丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-4	3面	かわらけ	口縁～ 底部1/4	(7.5)	(5.5)	2.6	a.ロクロ成形 内底ナデ b.黒色粒多量、白針少量、土丹粒 弱砂質 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-5	3面	かわらけ	口縁～ 底部1/5	(7.6)	(4.6)	1.5	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底2～3回ナデ b.微砂・雲母・赤色粒・白 針 やや良土 c.黄橙色 e.良好 硬質
16-6	3面	かわらけ	底部全		4.0		a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底2～3回ナデ b.微砂・金雲母・白針、土 丹粒少量 やや粗土 c.明橙褐色 e.良好 硬質
16-7	3面	かわらけ	底部片				a.ロクロ成形 内底未調整 b.赤色粒多量、白針少量 弱粉質 良土 c.橙色 e.良好 f.底径8cm程度かそれ以上
16-8	3面	常滑窯 甕	口縁部片				a.輪積成形 b.白灰色 砂質 長石細粒含む やや粗土 c.器表面 暗茶色 d.口縁 部 自然釉 剥げて白色部分のみ残存 e.良好 堅緻
16-9	3面	常滑窯 甕	口縁部片	縁帯幅1.8			a.輪積成形 b.灰色砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗土 c.器表面 褐色 d.口縁部濃緑色自然釉 e.硬質
16-10	3面	研磨痕のある 常滑窯産甕片					b.灰色 微砂・白色粒 良土 c.内面 暗茶色 d.外面灰黒緑色自然釉剥離 e.良 好 f.内面縁辺の一部擦痕
16-11	3面	常滑窯 片口鉢I類	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.暗灰青色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗土 e.軟質
16-12	3面	常滑窯 片口鉢I類	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ 高台周辺回転ヘラ削り 付け高台 b.暗灰色 砂粒・白 色粒・黒色粒・小石粒 粗土 d.内面 灰茶緑色自然釉 e.軟質
16-13	3面	産地不明 壺	底部片				a.内面ロクロ目強く残る 回転ヘラナデ 付高台 b.灰色 透明粒僅かに含む 緻密砂質土 c.器表面 灰茶色 d.内面灰白色自然釉 e.良好 硬質 f.東遠系か？
16-14	3面	東播系 鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.胎土 青灰色 微砂・白色粒・小石粒・黒色粒 良土 c.器表面 青灰色 口縁部 灰黒黄色 e.良好 軟質
16-15	3面	東濃型 山茶碗	口縁部片				a.ロクロ成形 b.淡灰色 微砂 良土 d.口縁～内面淡黄緑色半透明自然釉が 僅か e.良好 硬質
16-16	3面	東濃型 山茶碗	口縁部片				a.ロクロ成形 b.灰白色 微砂・白色粒 精良土 d.内面～外面に茶緑色不透 明自然釉 e.良好 硬質
16-17	3面	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 b.灰黄色 微砂 良土 d.口縁部灰緑色半透明自然釉 e.良好 硬質
16-18	3面	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 口縁部ヘラ押え b.灰褐色 微砂 精良土 d.外面 灰緑色透明自 然釉 e.硬質 f.輪花型
16-19	3面	瀬戸窯 柄付片口	注口				a.手づくね成形 b.淡灰色 良土 d.黄緑色透明 光沢有り 貫入僅か 漬け掛け か？ e.良好
16-20	3面	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	底部1/3		(3.6)		a.ロクロ成形 b.淡灰色 精良堅緻 気孔あり d.淡青緑色透明光沢あり 厚い施 釉、高台内薄い施釉 畳付露胎 f.割れ口周辺打痕あり
16-21	3面	滑石鍋 転用製品		2.7	2.2	1.4～2.2	a.切断痕・刃物痕 b.明灰色
16-22	3面	砥石		2.5～	4.6～		c.青灰色 鳴滝(奥殿) 仕上砥
16-23	3面	砥石	不明	4.4～	2.6～	0.7～0.5	c.淡褐色 鳴滝産 仕上砥
16-24	3面	軽石		5.8～	8.3～	3.0～2.5	c.白色 表面 淡灰黄色 f.表裏凹面擦痕あり

中世遺物観察表(4)

挿図 番号	出土 位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	
				長さ	幅	厚さ	a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
16-25	3面	加工骨	残片	3.4～	1.95～	0.9～	a.刃物痕複数 b.部位不明 牛または馬の骨可能性
16-26	3面	加工骨	残片	3.7～	2.2～	0.3～0.5	a.上下端部切断痕 b.鹿の角
16-27	3面	加工骨	残片	10.0～	2.9～	0.25～0.6	a.表面 刃物痕多数 b.部位及び動物不明
17-1	4面	かわらけ	体部～ 底部1/4		(7.8)	(3.1)	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・土丹粒・黒色粒 やや粗土 c.淡褐色 e.やや甘い
17-2	4面	木製品 蓋	内径1/3	外径 (15.5)	内径 (13.0)	0.5	
17-3	4面	木製品 曲物蓋	内径1/3	外径 (14.2)	内径 (12.2)	0.6	a.桜皮紐貫通
17-4	4面	木製品 円板	両端部 欠損	外径 (11.6)		0.5	a.中心に径1.0cmの穿孔
17-5	4面	木製品 用途不明	一部欠損	20.6	2.8	0.7	a.片面凹みあり 背面上部・下部に柄穴状の切り込み
17-6	4面	木製品 部材	全	3.2	3.7	2.6	a.上下端部切断痕
17-7	4面	加工骨	残片	3.7～	1.4～	1.4～	a.上端部切断痕・表面刃物痕 b.鹿の角 f.摩耗著しい
18-1	表土	かわらけ	底部		7.0～		a.ロクロ成形 外底糸切り痕・線状圧痕 内底ナデ b.赤色粒・白針 粉質 良土 c.にぶい 淡橙色 e.やや甘い 軟質
18-2	表土	かわらけ	完形	7.1	4.8	1.6	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底に2～3回ナデ b.微砂・雲母・赤色粒・白針・土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-3	表土	常滑窯 甕	肩部片	6.5～	3.2～	0.8～1.3	a.輪積成形 押印文 b.黄灰色 砂粒・白色粒・褐色粒多量 小石少量 やや粗土 c.内面灰褐色 d.外面灰緑色 降灰
18-4	表土	瀬戸窯 縁釉小皿	口縁部 1/5	(9.0)			a.ロクロ成形 b.黄灰色 砂粒 良土 d.内面～外面上部灰緑色不透明灰釉 漬け掛け f.内外面釉剥離
18-5	表土	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	底部 2/3		5.2		a.ロクロ成形 外面 鎚蓮弁文片切彫り 内底 蓮華文印刻 b.灰色 精良堅緻 d.青緑色半透明鈍い光沢有り 薄い施釉 高台畳付～高台内露胎
18-6	表土	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	底部1/4		4.0		a.ロクロ成形 外面 鎚蓮弁文片切彫り b.灰色 緻密 d.暗灰緑色透明光沢有り 薄い施釉 高台畳付～高台内露胎 f.内面割れ口周辺打痕あり
18-7	表土	軽石	一部 欠損	4.2	3.8～	4.3	b.白色 c.表面 暗灰黒色 f.凹面擦痕
18-8	攪乱	伊万里窯 染付徳利	完形	1.3	3.6	11.5	a.ロクロ成形 b.白色 精良 d.染付 e.良好
18-9	側溝	かわらけ	略完形	7.8	5.0	2.0	a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底2～3回ナデ b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・土丹粒 やや粗土 c.灰褐色 e.やや甘い f.口唇部タール付着 灯明皿
18-10	側溝	常滑窯 壺	頸部～肩 部片				a.輪積成形 b.灰色 白色粒・黒色粒・砂粒、良土 d.内面頸部～外面 灰緑色 自然釉 e.硬質
18-11	側溝	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 b.黄白色 微砂・白色粒 良土 d.口縁部灰緑色自然釉 e.良好 硬質
18-12	側溝	龍泉窯 青磁	体部片				a.ロクロ成形 外面 耳なし 取手貼付 b.灰白色 精良 気孔有り d.緑青色半透明 厚い施釉 貫入あり f.器種不明
18-13	釜場	白磁 口元皿	底部片				a.ロクロ成形 b.白色 精良堅緻 気孔有り d.灰白色透明 薄く施釉

表8 古代遺物観察表(1)

図 No	種 別	出土位置	観察内容 法量：単位=cm (000)=推定値 000～=残存値
19-1	土師器坏	4面	残存値：口縁部1/7 法量：口径(12.6) 稜径(12.6) 器高2.2～ 色調：暗い橙色 胎土：細砂・微細雲母少量含む良土 焼成：硬質 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面底部-ヘラケズリ 備考：
19-2	土師器坏	4面	残存値：口～底部片 法量：- 色調：淡褐色 胎土：粗砂少量含む粉質良土 焼成：良好 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面底部-ヘラケズリ 備考：
19-3	土師器坏	排水溝	残存値：底部片 法量：- 色調：暗褐色 胎土：細砂多い粗土、白針少量 焼成：軟質 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面底部-ヘラケズリ 備考：内外面-黒彩
19-4	土師器坏	3面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：淡橙色 胎土：長石粒子多め、小礫少量 焼成：普通 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面底部-ヘラケズリ 内面口唇部-沈線一条 備考：内外面-赤彩
19-5	土師器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：橙色 胎土：黒砂多い弱砂質土 焼成：普通 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面底部-ヘラケズリ 備考：内面-放射状暗文
19-6	土師器坏	4面	残存値：底部片 法量：- 色調：淡褐色 胎土：細砂・白針少量含む緻密良土 焼成：硬質 せいけい：内面-ナデ 備考：内面-放射状・螺旋状暗文
19-7	土師器坏	3面	残存値：口～体部片 法量：- 色調：淡橙色 胎土：砂粒多い 焼成：良好 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面体部-ヘラケズリ 備考：
19-8	土師器坏	排水溝	残存値：口～底部片 法量：- 色調：淡橙色 胎土：細砂少量 焼成：良好 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面体～底部-ヘラケズリ 備考：
19-9	土師器坏	4面	残存値：口1部～底部1/4 法量：口径(13.4) 底径(8.0) 器高3.3～ 色調：淡橙色 胎土：細砂含む 焼成：良好 せいけい：内面～外面口縁部-ナデ 外面体部-指頭圧痕 外面底部-ヘラケズリ 備考：
19-10	土師器坏	排水溝	残存値：口縁部1/6 法量：口径(9.9) 器高3.2～ 色調：にぶい淡橙色 胎土：橙色粒多い緻密良土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 外面体部下半-ヘラケズリ 備考：内面-山形暗文
19-11	土師器坏	4面	残存値：体部片 法量：- 色調：淡橙色 胎土：橙色粒含む緻密良土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 外面体部下半-ヘラケズリ 備考：内面-放射状暗文
19-12	土師器坏	排水溝	残存値：底部1/4 法量：底径(4.2) 色調：淡褐色 胎土：橙色粒多い緻密良土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 外面体部下半～底部-ヘラケズリ 備考：内面体部-放射状暗文 内底周縁-溝状 内底-墨書あり
19-13	土師器坏	4面	残存値：底部1/6 法量：底径(6.0) 色調：淡褐色 胎土：緻密良土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り→周縁ヘラケズリ？ 備考：
19-14	須恵器蓋	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰色 胎土：白色微粒子極少量含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-15	須恵器蓋	4面	残存値：体部1/4 法量：- 色調：灰白色(胎芯-黒灰色) 胎土：白色微粒子極少量含む弱粉質土 焼成：軟質 せいけい：ロクロ成形 天井部-回転ヘラケズリ→摘み貼り付け後回転ナデ 備考：
19-16	須恵器蓋	4面	残存値：摘み全 法量：摘み径2.7 色調：灰色 胎土：白色粒子・白針含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 接着部-静止糸切り→接着用粘土紐貼付 備考：
19-17	須恵器蓋	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：青灰色(胎芯-灰赤色) 胎土：白色微粒子極少量含む緻密砂質土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 備考：外面口縁部-黒変(重ね焼きの痕跡か)
19-18	須恵器蓋	3面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：明灰色 胎土：弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-19	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：暗灰色 胎土：白色粒子多い砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-20	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：暗青灰色 胎土：白色粒子含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：外面-黒変(火表側か)
19-21	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：褐灰色 胎土：白針多く含む弱粘質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-22	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰色 胎土：白色粒子少量含む緻密良土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-23	須恵器坏	排水溝	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰色 胎土：白色粒子少量含む緻密良土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：外面口縁部-黒変(重ね焼きの痕跡か)
19-24	須恵器坏	2面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰褐色 胎土：白針多く含む弱粘質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 備考：

古代遺物観察表(2)

図 No	種 別	出土位置	観察内容 法量：単位=cm (000)=推定値 000~=残存値
19-25	須恵器坏	3面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：明灰色 胎土：白色粒子含む弱砂質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-26	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：明灰色 胎土：白色粒子多く、白針少量含む弱砂質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-27	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：暗灰色 胎土：白色粒子含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-28	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰色 胎土：白色粒子・白針含む弱粘質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-29	須恵器坏	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰褐色 胎土：白色粒子多い弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-30	須恵器 高台付坏	排水溝	残存値：体部片 法量：- 色調：明灰色 胎土：白色粒子少量含む弱砂土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-31	須恵器坏	4面	残存値：体~底部片 法量：- 色調：明灰色 胎土：細砂少量含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 外面底部(~体部下位) 回転ヘラケズリ?→ナデ 備考：底部調整詳細不明
19-32	須恵器坏	4面	残存値：底部1/4 法量：底径(8.0) 色調：灰色 胎土：白針少量含む砂質良土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 外面底部-糸切り→回転ヘラケズリ→周縁~体部下位ヘラケズリ 備考：
19-33	須恵器坏	排水溝	残存値：底部片 法量：- 色調：褐灰色 胎土：白針多く、小礫少量含む弱粘質良土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り→周縁回転ヘラケズリ 備考：
19-34	須恵器坏	4面	残存値：底部3/5 法量：底径8.9 色調：白灰色 胎土：砂粒・白針少量含む含む弱粉質粗土 焼成：軟質 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り→周縁回転ヘラケズリ 備考：
19-35	須恵器坏	4面	残存値：底部1/4 法量：底径(8.3) 色調：白灰色 胎土：砂粒・小礫少量含む弱砂質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り 体部下位-回転ヘラケズリ 備考：
19-36	須恵器坏	排水溝	残存値：底部1/3 法量：底径(6.0) 色調：灰色 胎土：砂粒・白針含む含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り無調整 備考：
19-37	須恵器坏	排水溝	残存値：底部1/4 法量：底径(6.4) 色調：灰白色 胎土：砂粒含む含む弱粉質土 焼成：軟質 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り無調整 備考：
19-38	須恵器坏	4面	残存値：体~底部1/4 法量：底径(6.5) 色調：にぶい橙色 胎土：白色粒子、白針極少量含む弱砂質土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り無調整 備考：酸化焙焼成(焼成不良)
19-39	須恵器坏	4面	残存値：底部片 法量：- 色調：にぶい淡褐色 胎土：砂粒多く、白針極少量含む砂質粗土 焼成：軟質 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転糸切り無調整 備考：酸化焙焼成(焼成不良)
19-40	灰陶陶器 碗	4面	残存値：底部片 法量：- 色調：にぶい淡褐色 胎土：砂質緻密土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 備考：内面-淡緑色灰釉ハケ塗り
19-41	土師器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：にぶい淡橙色 胎土：黒色輝石・白針多め弱粘質土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 備考：外面口縁部-黒変(重ね焼きの痕跡か)
19-42	土師器甕	3面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰白色 胎土：細砂含む弱砂質土 焼成：普通 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-43	土師器甕	3面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：暗褐色 胎土：砂粒含み、白針多い弱粘質土 焼成：堅緻 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-44	土師器甕	排水溝	残存値：口縁部片 法量：- 色調：淡褐色 胎土：金雲母少量含む砂質土 焼成：良好 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-45	土師器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：淡褐色 胎土：砂粒含む弱粉質土 焼成：普通 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-46	土師器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：淡橙色 胎土：橙色粒子多く、白針含む砂質土 焼成：良好 せいけい：内外面-ナデ 口唇部-面取り 備考：
19-47	土師器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：- 色調：灰褐色 胎土：金雲母少量含む砂質土 焼成：良好 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-48	土師器甕	釜場	残存値：口縁部片 法量：- 色調：淡橙色(胎芯-暗灰色) 胎土：粒子多め、白針少量含む弱粘質土 焼成：良好 せいけい：内外面-ナデ 備考：

古代遺物観察表(3)

図 No	種 別	出土位置	観察内容 法量：単位＝cm (000)＝推定値 000～＝残存値
19-49	土師器甕	排水溝	残存値：口縁部片 法量：－ 色調：淡褐色 胎土：細砂少量、金雲母極少量含む弱砂質土 焼成：普通 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-50	土師器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：－ 色調：淡橙色 胎土：細砂極少量含む緻密良土 焼成：硬質 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-51	土師器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：－ 色調：暗灰褐色 胎土：微細雲母含む弱砂質土 焼成：良好 せいけい：内外面-ナデ 備考：
19-52	土師器甕	排水溝	残存値：底部3/7 法量：底径(6.4) 色調：橙色(胎芯-黒灰色) 胎土：粗砂・小礫含み、白針少量含む弱粘質土 焼成：良好 せいけい：内外面-ヘラナデ 備考：
19-53	土師器甕	4面	残存値：底部1/6 法量：底径(6.4) 色調：白橙色 胎土：細砂含み、金雲母少量含む砂質土 焼成：軟質 せいけい：内外面-ナデ 外底部-木葉痕 備考：
19-54	土師器甕	4面	残存値：底部片 法量：－ 色調：淡褐色 胎土：細砂多い砂質土 焼成：普通 せいけい：内外面-ナデ 外底部-木葉痕 備考：
19-55	土師器甕	4面	残存値：底部片 法量：－ 色調：淡褐～淡褐色 胎土：黒砂・橙色粒子多め弱砂質土 焼成：普通 せいけい：内外面-ナデ 外底部-木葉痕 備考：
19-56	不明	釜場	残存値：小片 法量：－ 色調：灰白色 胎土：砂粒少量含む砂質土、軽質 焼成：軟質 せいけい：外面-ハケメ→平行線状の叩き? 内面-指頭ナデ 備考：
19-57	須恵器甕	3面	残存値：口縁部片 法量：－ 色調：灰色 胎土：砂粒・白針極少量含む砂質良土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 備考：内面-降灰
19-58	須恵器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：－ 色調：明灰色 胎土：砂粒少量、白針極少量含む砂質土 焼成：硬質 せいけい：ロクロ成形 備考：内面-降灰
19-59	須恵器甕	4面	残存値：口縁部片 法量：－ 色調：白灰色 胎土：細砂極少量含む弱粘質土 焼成：普通 せいけい：ロクロ成形 備考：
19-60	須恵器壺	4面	残存値：底部1/3 法量：底径(12.2) 色調：灰色 胎土：白色粒子多く、白針極少量含む砂質土 焼成：良好 せいけい：ロクロ成形 外面底部-回転ヘラケズリ?→高台貼付け→ロクロナデ 備考：
19-61	須恵器甕	4面	残存値：胴部片 法量：－ 色調：灰白色 胎土：砂粒少ない弱粘質土 焼成：普通 せいけい：外面-平行叩き目 内面-同心円状の当て具痕 備考：
19-62	須恵器甕	釜場	残存値：胴部片 法量：－ 色調：明灰褐色 胎土：砂粒少ない弱粘質土 焼成：良好 せいけい：外面-平行叩き目 内面-ナデ 備考：
19-63	須恵器甕	4面	残存値：胴部片 法量：－ 色調：褐白色 胎土：小礫極少量含む弱粘質粗土 焼成：普通 せいけい：外面-平行叩き目 内面-同心円状の当て具痕→ナデ 備考：
19-64	須恵器甕	4面	残存値：胴部片 法量：－ 色調：暗青灰～黒灰色 胎土：白色粒子多い粘質緻密土 焼成：硬質 せいけい：外面-平行叩き目→ハケメ 内面-同心円状の当て具痕 備考：
19-65	須恵器甕 転用硯	排水溝	残存値：完形 法量：縦10.7 横7.7 厚1.0～1.2 色調：明灰色 胎土：白針極少量含む弱砂質良土 焼成：硬質 せいけい：外面-平行叩き目→ナデ 内面-同心円状の当て具痕→擦痕 備考：胴部片転用、内面使用

第五章 まとめ

第1節 中世

調査では3時期の中世面が調査されている。出土した遺物は少なく、詳細な年代を検討するには至らない。全体的には13世紀後半から14世紀代の資料が中心である。その他、第2面・第3面の覆土に混入して、13世紀初頭から前半、あるいは12世紀末までさかのぼる遺物が少量出土しているが、概期の遺構は検出されておらず、量的にもこの地に積極的な人的活動があったことを示すものとは思われない。図化がかなわなかった小片ではあるが、第3面構成土から出土した糸切りかわらけには、粉質気味で薄手の個体も含まれており、13世紀半ばまで遡れる要素は見当たらない。調査地の開発年代は13世紀後葉以降と思われ、各面の年代は中世第3面が13世紀後葉から14世紀前半、中世第2面が14世紀代で中葉以降か、中世第1面は14世紀後半以降と想定される。

中世第2面・中世第3面では明確な生活面と、それに伴う遺構が発見されている。第3面の建物1・溝1は、第2面で検出されている土坑1や、2口のピット(P1・P2)の並びと近い軸方向を示している。第3面の建物1と柱穴列1は直接の切り合いを持たず、新旧関係は不明といえるが、柱穴列1をより古い時期の所産と捉え、続く建物1・溝1の時期に変更された地割りが、第2面の時期まで継続されるという時間の流れを想定できるかもしれない。

今回調査で出土した遺物うち、不自然と思える痕跡が認められた常滑1点(図14-14)、舶載磁器2点(図16-20、図18-6)について補足を加えておく。図14-14は内外の器表面がはじけたように剥がれているもので、先が細く硬いもので、数度にわたり器表に正対する方向から打撃されたものと見える。器表面にこういった破損を持つ陶片は、市内遺跡で時に見かけるようでもあり、今回調査で出土した他の常滑片にも見受けられたが、その度合いは偶然と見える程度に収まっている。図14-14についてはその痕跡が著しく、やや不自然なものに見えるため実測図・写真(写真図版6)を掲載した。2点の磁器は共に青磁碗の残片で、割れ口に沿って小さな打撃痕が連続するものである。打撃痕はガラス質の石器に見られるような、打痕、放射状の波紋を残す剥離部分が連続するもので、通常目にする磁器片の割れ口とは異なっている。3点の痕跡とも加工痕とするには、その目的もわからず、根拠に乏しいものだが、遺物整理の段階で気になった点として上げておく。

坂ノ下遺跡は、中世には「前浜」と呼ばれた鎌倉丘陵部に囲まれる海浜地域の西端に位置する。本遺跡東側に広がる長谷小路周辺遺跡、由比ガ浜南遺跡では、砂丘上に竪穴建物が連なる様子や、葬送の地としての利用、職能民の存在を伺わせる遺構・遺物の発見など、土地の社会的な性格が明らかになってきているが、坂ノ下寄りの西側での調査事例は少なく、稲瀬川西岸から本遺跡にかけて一帯の地理には不明な点が多いと言える。今回の調査結果は、確実な広がりを持つ中世期の生活面の検出や建物址の発見など、この地の性格を伺う手がかりになる内容と思われる。

第2節 古代

古代の確実な遺構は調査区北東端の壁面で確認された落ち込みのみで、全容がわからず時期・性格は不明である。

遺物は7世紀から9世紀代にかけてのものがテン箱にして約1箱、523点出土している。内訳は土師器坏145点、土師器甕278点、須恵器蓋9点、須恵器坏50点、須恵器壺甕類が38点、須恵器甕転用硯1点、灰釉陶器1点、須恵器かと思われる不明品1点である。その他、古墳時代中期頃の所産と思われる赤彩

を施された小壺の小片が1点出土している。土師器坏は相模型成立期寸前の扁平な丸底形態をとるものが79点と最も多く、相模型坏は40点で胎土や形態から8世紀代に収まるものに見える。土師器甕はナデ調整のもの255点、ケズリ調整のもの19点でその内武蔵型が1点、ハケ調整のもの4点で、大半が相模型である。須恵器は坏の底部調整が明らかなものが20点あり、ヘラケズリ調整が施されていると考えられるものが13点、回転糸切り無調整のものが7点である。須恵器壺甕類のうち、実測のかなわなかったものには長頸瓶の頸部片、フラスコ型瓶の胴部片が含まれている。須恵器は南比企産を始めとする北武蔵地方の製品が主体的に出土している。多くが御殿山操業以前のもので、坏の形態を見る限りでは、降ってもG37ないしG59窯式併行期あたりに収まるものである。調査地の中心的な年代は、7世紀末から8世紀代となり、前後の資料が少数加わる結果である。また、9世紀代は前半の資料に乏しく、後半は甲斐型坏、灰釉陶器といった移入品による組成となる点に注意を払っておきたい。

表9 中世遺物集計表

		1面	2面	2面遺構	3面	3面構成土	表土・攪乱、調査区内採集	計
かわらけ (灯明皿)	糸切り	18	228 (1)	20	113	4	83 (1)	466
	手づくね					1	3	4
土製品	瓦		2					2
	瓦質製品	高台部片1	瓦器皿1					2
	火鉢	1	4		1		1	7
	土錐		1					1
国産陶器	常滑	甕・壺類19	甕・壺類103	甕・壺類9	甕・壺類22		甕・壺類20	173
		片口鉢I類1	片口鉢I類4		片口鉢I類3		片口鉢I類1	9
		片口鉢II類1	片口鉢II類5		片口鉢II類1		片口鉢II類1	8
	尾張産	片口鉢2						2
	渥美		甕・壺類2		甕・壺類4		甕・壺類1	7
	備前		播鉢2					2
	東播系		鉢1		鉢1			2
	山茶碗				東濃系2			2
	瀬戸	碗・皿類2	碗・皿類3 鉢類6 壺・瓶類4 入子5	壺・瓶類1	鉢類1 壺類1 入子2		皿類1 壺・瓶類4 入子1	31
	舶載陶磁器	青磁 (龍泉窯)	蓮弁文碗1	蓮弁文碗3 劃花文碗1 折縁鉢1 蓋1		蓮弁文碗1		蓮弁文碗3 双魚文鉢1 酒会壺1 不明1
白磁		四耳壺1	口元碗3 口元皿2 四耳壺2		合子 or 紅皿1		口元皿1	8
青白磁			合子1 皿1 盤1 梅瓶5		梅瓶1 不明1		皿1 小壺1	12
その他中国産			天目茶碗1 緑彩 or 二彩1					2
高麗青磁			瓶子1					1
土器・土製品・陶磁器 計		47	393	30	155	5	125	755
石製品	砥石				2			2
	滑石製品				鍋転用品1			1
	使用痕のある軽石				1		1	2
木製品					5		5	
骨製品				3	1		4	
総計		47	393	30	162	11	126	769



▲ A. 調査前状況（北東から）



▲ B. 表土掘削終了後（北西から）

図版2

中世第1面（南東から）A. ▶

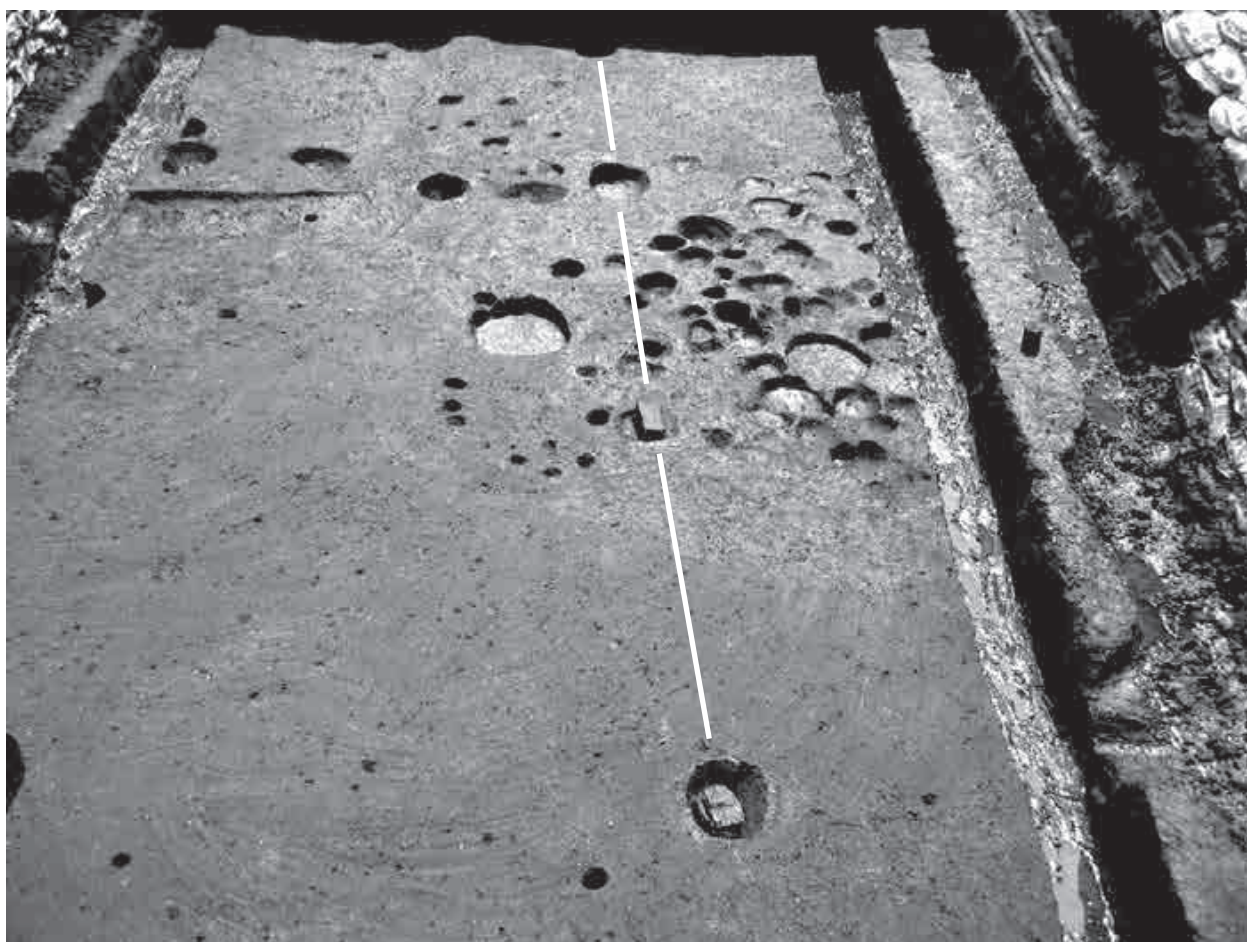


▼ B. 2面土坑1（東から）

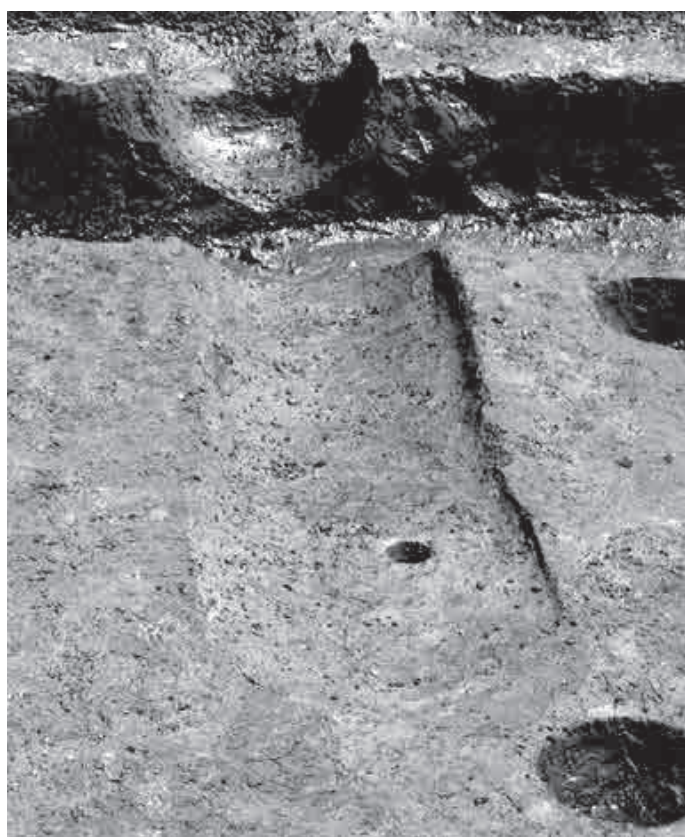


▼ C. 中世第2面（北東から）





▲ A. 中世第3面 (北から)



▲ B. 3面溝1 (西から)



▲ C. 3面上出土獣骨



▲ A. 3面建物1 (南から)



▲ B. 建物1 P6 (東から)



▲ C. 建物1 P8 (東から)

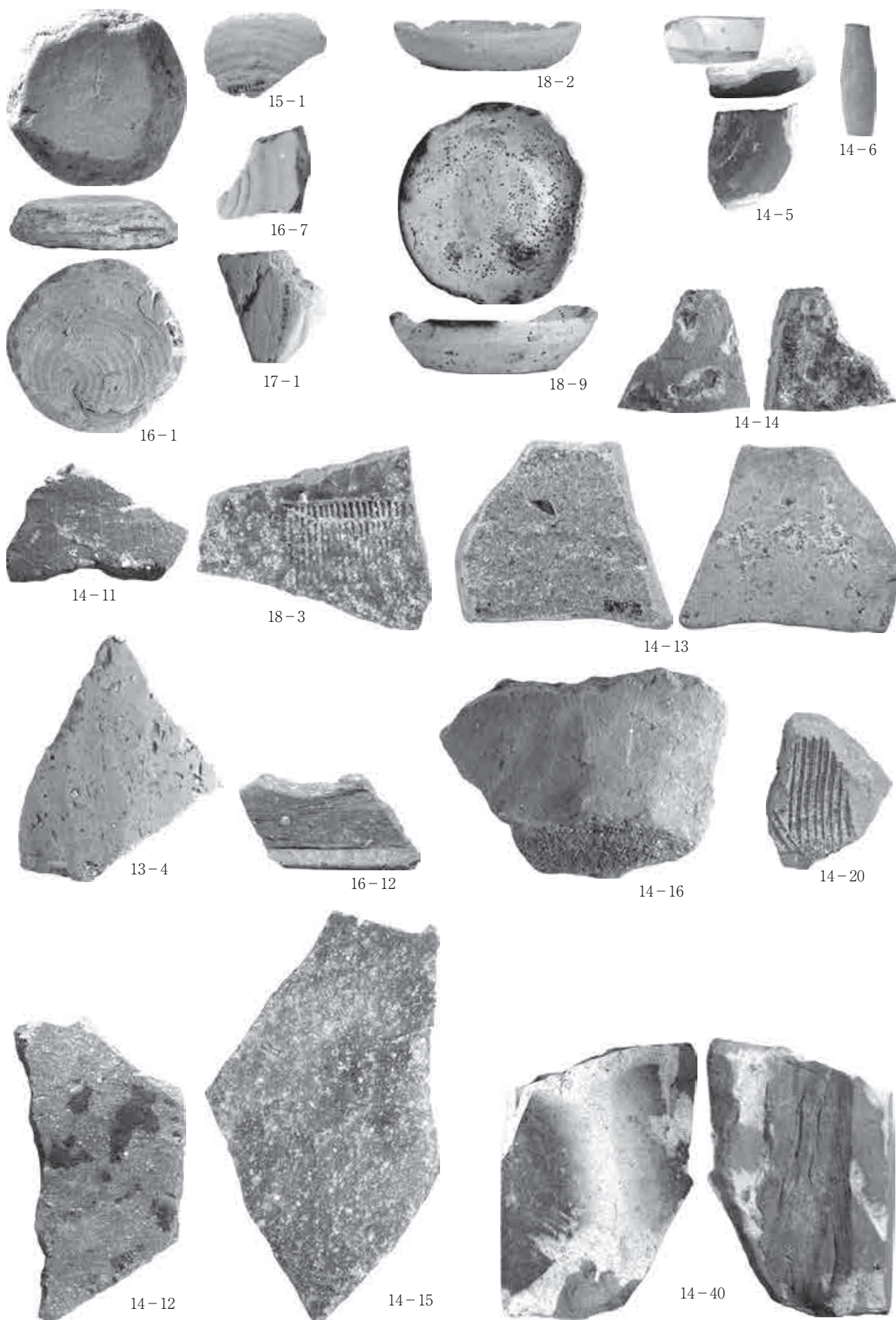


▲ A. 古代遺構確認面（北から）



▲ B. 調査区南壁土層（北から）

图版6





14-21



16-16



14-24



14-26



14-30



18-6



18-5



18-6



14-39



14-34



18-12



遺構外 (排水溝)



16-20



14-38



16-21



16-22



18-7



16-24



16-25



16-26



17-7



19-6



19-10



19-12



19-16



19-32



19-60



19-56



19-65



17-3



17-5



17-4



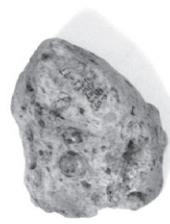
1面



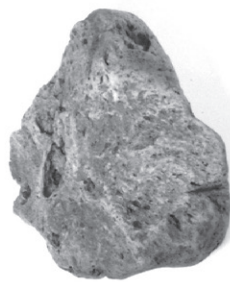
2面



2面土丹地形



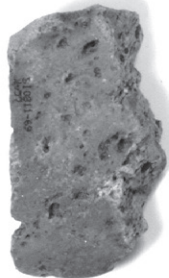
S-45



S-49



S-29



S-31



S-48



S-26



S-12



S-11



S-34



S-36



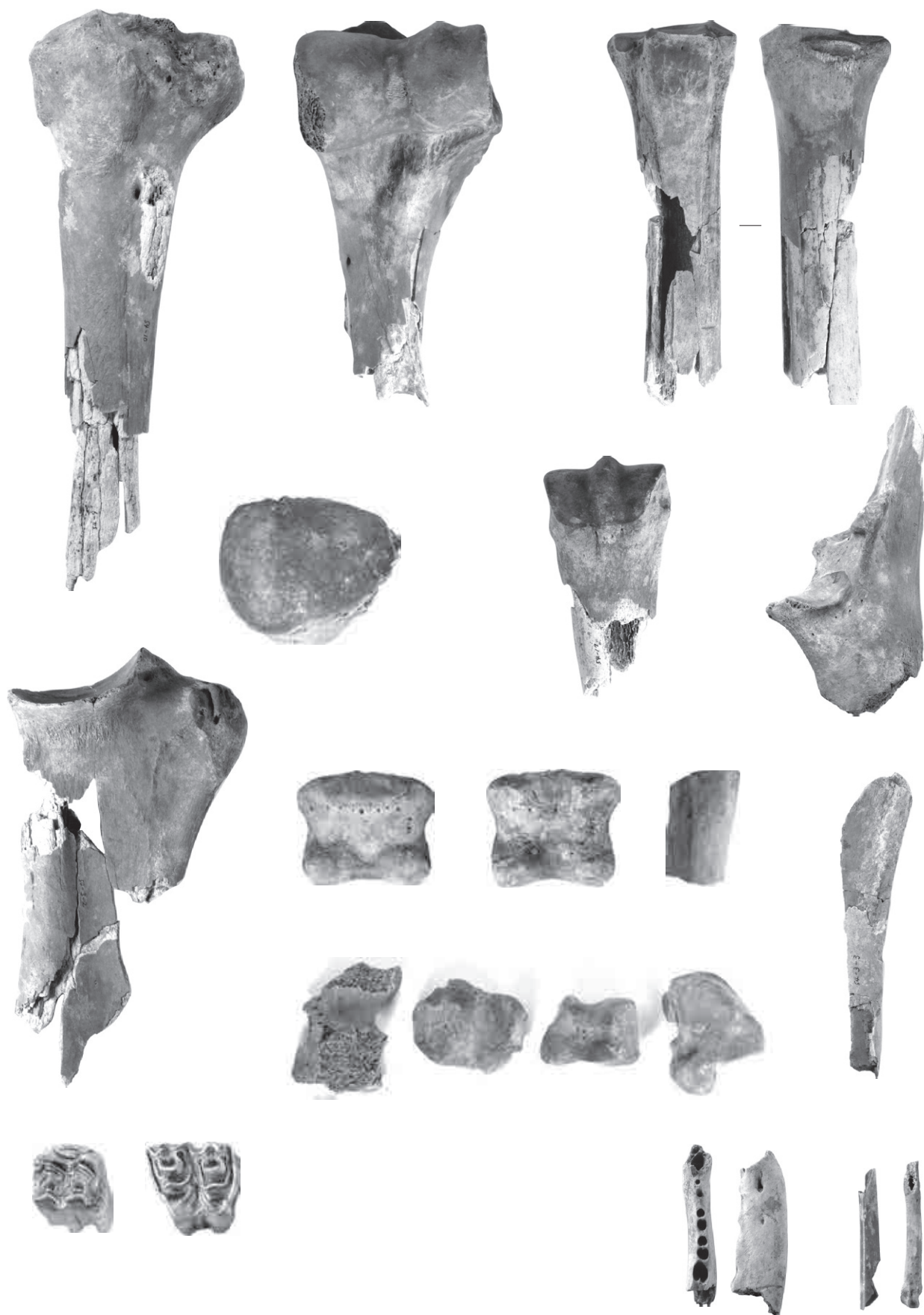
3面



3面溝1 馬



遺構外(排水溝)



3面 X3,Y3 付近出土獣骨



遺構外（排水溝）出土獸骨

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成25年度調査報告							
巻次	30 (第1分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	松吉大樹・原 廣志／伊丹まどか・松吉大樹／伊丹まどか・松吉大樹／馬淵和雄／ 沖元 道・馬淵和雄／沖元 道・馬淵和雄／森 孝子・赤堀祐子・松吉里永子							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ずいせんじしゅうへんいせき 瑞泉寺周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字紅葉ヶ谷 674番1	14204	338	35° 19′ 28″	139° 34′ 29″	20051108 ～ 20060118	56.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 76番8	14204	49	35° 19′ 31″	139° 33′ 51″	20060217 ～ 20060424	35.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町四丁目 1858番4	14204	231	35° 18′ 52″	139° 33′ 35″	20060501 ～ 20060607	10.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 雪ノ下四丁目 570番1	14204	49	35° 19′ 24″	139° 33′ 44″	20060712 ～ 20060824	32.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
だいけいじきゅうけいだいせいせき 大慶寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 寺分一丁目 943番2外	14204	361	35° 19′ 56″	139° 31′ 22″	20060919 ～ 20061102	56.10	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ふくせんやぐらぐん 福泉やぐら群	神奈川県鎌倉市 今泉三丁目 292番外	14204	447	35° 20′ 45″	139° 33′ 17″	20061115 ～ 20070105	63.90	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
さかのしたいせき 坂ノ下遺跡	神奈川県鎌倉市 坂ノ下 50番3外	14204	217	35° 18′ 41″	139° 32′ 04″	20080813 ～ 20080919	48.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ずいせんじしゅうへんいせき 瑞泉寺周辺遺跡	遺物散布地	中世	礎石建物、掘立柱 建物、土坑、溝、 ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、瓦、石製品、 金属製品、骨製品等	
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	都市	中世	土坑、溝、柱穴列、 柱穴、基壇状遺構	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、瓦、石製品、 木製品、金属製品、土製 品、古代遺物等	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、石製品、金属 製品、土製品等	据え甕遺構が検出さ れた。
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	都市	中世	滑川旧河道	かわらけ、舶載磁器、国 産陶器、瓦、石製品、金 属製品、木製品等	
だいけいじきゅうけいだいせいせき 大慶寺旧境内遺跡	社寺	中世	井戸、土塁状遺構、 溝	かわらけ、国産陶器	
ふくせんやぐらぐん 福泉やぐら群	やぐら	中世	土坑、柱穴、溝	土師器皿、近世国産陶磁 器、石製品	
さかのしたいせき 坂ノ下遺跡	都市	中世	掘立柱建物、溝、 土坑、柱穴	かわらけ、舶載磁器、国 産土器・陶器、土師器・ 須恵器・獣骨・軽石	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30

平成 25 年度発掘調査報告

(第 1 分冊)

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社

